
名探偵コナン 名探偵の最終章（エピローグ）

K I D

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン エピソード 名探偵の最終章

【Nコード】

N2380T

【作者名】

KID

【あらすじ】

工藤新一が姿を消して1年が経とうとしていたある日。コナンの元に事件の依頼が舞い込む。早速依頼を引き受けたコナン達だったが、それはこれから起こる組織との、長い戦いの始まりに過ぎなかった！ 愛する人、友人、両親、仲間、ライバル達に立ちはだかる組織の魔の手……。数々の試練が、コナン達に容赦なく襲い掛かる！ メインキャラクター達も引っ提げて、江戸川コナン最後の戦いが、今始まった！！ これは『名探偵コナン』、そして『まじっく快斗』の最終回を、私なりに考えた小説です。多少、組織の事件

ではないものも、内容等で含まれます。気になった方は読んでみてください。

0. Prologue

静かに夕焼けの日差しが差し込む場所で、何やら散らかり放題の部屋の中を、一人の人物が漁っていた。

探しているものは、サッカー用のキーパー軍手。

確かにこの部屋にあったはずだが、この中に何か物が入ったまま重なり放題の段ボール箱を見ていると、少々気が重くなる。

この際、軍手なしでもキーパーをやってもいいとは思ったのだが、最近はどうも相手のボールの蹴りが強いので、逆にないとマズイのではないか、という気持ちもあった。

それに、前に軍手なしでサッカーを行った際、偶々手の平に紙で切った傷があつて、その手でそのままボールを止めてしまった挙句、ボールに血を付けてしまい、かなり相手に嫌がられたことがある。

今回怪我はしてはいないが、きっと相手はよしとしないだろう。

ならばあっちがキーパーをやればいいとも思ったが、流石に大人の自分が蹴るボールを止められるとも思えないし、あの相手はボールを蹴るのは好きだが、受け止めるのは嫌いな主義だ。

『いいよ』と答えるはずがない。

それにそんなことを切りだしても、向こうは『どうせ、軍手が見つからなかったんだろ?』と言われるに決まっている。

実際にそう言われたら、正直こっちは何も言い返せない。

はあー・・・。

『こんなことになる前に、引越したその時に荷物の整理を全て済ませればよかった』と、少々その人物は溜息を吐いた。

いつも小一時間程度しか片付けは行わず、おまけに日常生活で支障をきたさない物だけをそのままにしておいたのだから、作業が進まなかったのは当たり前だ。

それにこっちだって、そんなに暇人じゃない。

仕事はいつ、何処で呼ばれるのか分からぬ仕事だ。

時には丸二日も、家に帰れない時だってある。

そんな中やっと空いた時間を持てたと思ったら、まさかこんな探し物によって、時間を取られることになるうとは・・・。

「はぁー・・・。仕方ない。上から探すか」

そう意を決して、上の方に段積みになっている段ボール箱を持ち上げた、その時だ。

「うわっ!!」

ダンッ!!

バタンッ!!

ガタンッ!!

ガッシャン!!

「痛っ・・・てえーっ!!」

と、突然バランスを崩したと同時に、持ち上げていた段ボール一箱と、その上の列で一緒になっていた両サイドの2箱の段ボールが、一気にこちらに向かって落ちてきた。
いや・・・、降ってきた。

中は色々ギュギュウ詰めになって入っていたのか、落ちてきた音と

言い、衝撃と言い、かなり重そうな音が辺りに響く。
実際の話、先程持ち上げた段ボールもかなりも重さがあった。

さらに辺りは一気に埃まみれになり、咳が止まらない。
ほったらかしにしていた末路がこれだ。

窓から差し込む夕焼けの明りに、埃がハッキリと映る。

「ゲホッ！　ゴホッ！　ガホッ！　窓、開けねえと・・・ゲホッ！」

窓を開けてみて幾分かスッキリした室内に戻り、ふっと自分の足元を見つめた。

大量に散乱した荷物と共に、お探しのキーパー用軍手を発見する。

どうやら、自分が持ち上げた最初の段ボール箱に入っていたようだが、この散乱した道具や物をこのままにしておくのはマズイ・・・。
きっとアイツが買い物から帰ってここに来てしまったら、説教を受けること間違いなしだ。

「しょうがねえ・・・。片付けておくか。適当に・・・」

とりあえず段ボール箱の中に詰めておいて、床に置いておけばいいだろう。

そう思っ、箱から飛び出した物々を片付ける。

それにしても、今日は妙に時間を取る。

下手をしたら、またこの間ののように夜までサッカーをやることになるだろうか。

そうすると結構アイツに怒られるのだが・・・。

「何て言っても・・・、いつも怒られるのは俺一人か・・・」

なんてぼやきながら片付けていた時だ。

パタッ・・・

「！ん・・・？なんだ？」

ふっと突然、上から何かが後頭部に落ちてきた。

その落ちてきた物は、自分の後頭部に一回落ちると、そのまま左側の方にスルッと滑り落ちていく。

何が落ちてきたのだろうかと思線をそちらに向けた瞬間、その人物は息を止めた。

落ちてきたのは、ボロボロになった赤い蝶ネクタイだった。

止め具が付いている紐の部分や蝶型の布はビリビリに破け、所々が黒い灰や煤に塗れている。

少々赤黒い跡があるそれは、血だろうか。

しかしその血の跡も、白っぽい埃にまみれ過ぎていて、ほとんどはよく分からなくなっていた。

その蝶ネクタイに、そっと手を伸ばしてみる。

今にも綿クズになって消えてしまいそうなそれを拾い上げ、そっと裏側を見てみた。

裏側には表側とはまるで不釣り合いな、妙に細かい機械が取りつけられている。

しかしその機械は煤や埃にまみれていて、とてもその機械が持つ機

能が使えるようには、到底思えなかった。

取りつけられているダイヤル状の物も、今は一切動かない……。

「あゝ……」

機械に向かって声を発してもみたが、そこから聞こえてくるのは自分の声。

この機械の機能によるものなのか、はたまた全く作動していないのか、今は分からない。

自分以外の誰かにやらせれば、分かるだろうが……。

そつとその機械に顔を近付けてみれば、何故か埃と煤のにおいと混じって、妙に甘いにおいがした。

『何の?』と訊かれると少々考えるが、強いて言うとしたら、フルーツ系のような……。

何か色々なフルーツを混ぜたようなにおいが薄らと、鼻に感じるのだ。

だがそのにおいのワケを思い出してみれば『ああ、そうか……』と納得する自分がいる。

『あの時のだ』と思った。

「そうか……。もうあの事件から、10年も経つのか……」

そう呟いて、ふっと目を閉じてみる。

その瞬間目に映りだしたのは、今ではまるで遠い日の事のように感じる、10年前の記憶……。

あの小さな名探偵が姿を消してしまった、10年前の真冬の夜。

あの時の自分は・・・、アイツにちゃんと『さよなら』を言えただろうか・・・。

そんな遠い日の記憶を、俺は静かに、思い出した・・・。

0. Prologue (後書き)

どーも☆

新連載を開始した

KIDでーす!!

今回のテーマはこんな感じです! (^^)

(一気に内容レベル上がりましたが・・・ (苦笑))

コナン

「ここまでいきなり行くのかよ! (驚)」

快斗

「しかも『あらすじまだ書き終わってない』って・・・ (汗)」

KID

うん。

だから1話書くごとに、最後に書いたあらすじの次話の話のあらすじを書くんだってば。

(もつとも、この話の分はもう書いてしまっているので・・・。次を書かないと詰まってる状況・・・かな?)

ちなみに、この時点で毎度のペースでいけば、終わるのは来年くらいかと・・・ (驚)

コナン・快斗

「「受験はっ!?!」」

K I D

んなの！

成り行き任せに決まってるやん！！↑（威張り）

とは言え、学校では意欲はあるけど、学力に関しては下の下な私・・。

マズイと言ったらマズイですけど（苦笑い）

とにもかくにも、こちらを頑張っ書いていきます！！

それでは☆シ

1. Day

1996年 10月19日 午後4時27分 米花町 毛利探偵事務所。

半分日が沈み掛けた夕空の景色。

そんな外の景色を、江戸川コナンは探偵事務所の2階の窓から見つめていた。

一人机に突っ伏して眠っている小五郎は、当分起きそうにない。そして、部活か何かで学校に残っている蘭も、しばらくは帰ってきそうにない。

「ああゝ・・・、腹減った・・・」
率直な感想だった。

今日は3・4時間目に体育があり、しかも大好きなサッカー。さらにその後の休み時間も、元太達とサッカーで遊んだので、結果的に空腹感がハンパない。

でも蘭はまだ帰ってこない。
何か腹ごしらえが出来そうなものでも探そうか。

そう思って、そういえば全部小五郎が食べてしまっていたのだと思
い出す。

コナンはため息を吐きながら、再び窓枠に両手を乗せ、その上に顔を乗せた。
ボーッと外を見ていれば、何やら下の方から賑やかな声が聞こえてくる。

「ん？」

下の方に視線を向けてみると、部活帰りだろうか。

大勢の高校生や中学生の集団が、真下の歩道を横切っていくのが見えた。

征服からして、帝丹高校と帝丹中学校の生徒達だろう。

そんな学生達が通り過ぎる姿を見て、コナンはふっと思う。

（俺・・・・・・・・。いつまでこんなガキの姿なんだろう・・・）

もうすぐ、コナンはあの出来事から1年を迎えようとしていた。

蘭をたまの解毒剤や電話で誤魔化し続けてはきたが、それももう限界に等しい。

というより、蘭がそれだけでは耐え切れなくなってきたのだ。

ちゃんと会って話してみたい・・・。

そう思う気持ちが強くなりつつある。

しかし、相変わらず組織の出所は一切掴めないし、最近解毒剤の試作品が出来るペースも遅くなっている。

蘭をこれ以上誤魔化すとするのなら、もっと別のやり方にしなくては・・・。

だがその一方で、自分が元の身体に戻るのかどうか、という不安

も募りつつあった。

これまでいくつか薬のデータや手掛かりは揃えてきたというのに、解毒剤はまだ効果が薄い。

もっても3日が限度……。

そんなことが、毎回毎回、試作品を服用する度に起こっているのだ。

さらに、薬を飲んだ直後にやってくるあの激痛と発熱。

今までだってギリギリで耐えてきていて、身体はガタガタ……。

完全な解毒剤ができ、服用した時にはどうなってしまうのだろうか。

元々あの薬は毒薬なのだ。

解毒剤もその類であることに変わりはない。

何故だろう……。

前はあんなに戻りたいと思っていたはずなのに、今はむしろ……。

“それが怖い……。”

「馬鹿言ってるじゃねえよ……。戻んなきゃ意味ねえだろ……」
「ただいまー」

『ガチャッ』というドアが開く音と共に、部活が終わった蘭が帰ってきた。

ドアが開く音とその声で気が付いたコナンは、先ほどまで考えてい

たことを首を横に振ることによって消す。
何も知らない蘭は、相変わらず天真爛漫な明るい笑みを浮かべていた。

「おかえり、蘭姉ちゃん」

なるべく明るい声で、コナンもそう答える。

蘭の前では子供っぽくするのも、もう慣れた。
これだけやっているのだから・・・。

「ただいま、コナン君。・・・・・・もう！　またお父さんそんなところで寝て・・・・。風邪ひいても知らないからねえ?!」

今の時期で考えてみると、よくもまあいつもの格好で寝られるものだ。

少なくとも、自分ならすぐに肌寒さで起きるだろうと、コナンは思った。

しかし小五郎は、蘭の怒鳴り声にも構わずに、いびきを掻いている。

「zzz・・・」

「はぁ・・・・。もういいわ・・・・。コナン君、もう少し待っててね。今からごはん作るから」

そう言っってエプロンを着込む蘭を見て、コナンは何か手伝おうかと、蘭の元に走った。

「僕も手伝うよ。お腹ペコペコだし・・・」

「えっ？　ありがとう、コナン君。じゃあ・・・、食器並べてくれる?」

「うん」

明るく答えて食器を並べ始めたコナンに、蘭が合挽き肉をパックごとコナンに見せる。

今日の給食メニューだ。

「ほら、見て！ 安かったの。今日はコナン君の大好きなハンバーグだからね」

「えっ？ ホントっ！？ やったぁー！」

「もう！ お父さーん！ いい加減起きなさいよねえー！！」

「zzz・・・」

（アレは当分ダメそうだな・・・）

未だ机に突っ伏して爆睡している小五郎を見て、コナンは胸中でそう呟きながら、苦笑いを浮かべた。

粗方食器を並べ終わり、小五郎を起こそうと体を揺すってはみたが、やはり起きない。

仕方なく、コナンは小五郎の肩に毛布を掛けた。

（まったく・・・いつまで寝てんだよ・・・）

そう呟きながら、ふっとキッチンの方で嬉しそうに鼻歌を歌う蘭の姿を見て、コナンは思った。

（まあいいか・・・もう少しこのままでも・・・。気長に待てばいいよな？ 蘭・・・）

時々楽しくて、時々危険過ぎて、時々悲しすぎる。

そんな日常が、もう少しだけ続いてしまってもいい・・・。

そうコナンは思った。

まさかこの日から、運命のカウントダウンが始まっているとも知らずに・・・。

1. Day (後書き)

どーも☆

食べ物の中ではサクランボが大好きな
KIDでーす!!

コナン

「また挨拶変わった・・・」

KID

はい。

今回は『こちらの性格』的な内容にしようかと・・・。

快斗

「ところで・・・。今回短め？」

KID

今回だけね。

来週から長くなる予定。

(あくまで予定・・・)

さて、早いものでもう5月。

実は母の誕生日真近なので、何か母の好きなものを買おうかと思っているんですが・・・。

その母がほしいものが『モッコウバラの白いヤツ』と、何とも注文細かくて（苦笑）

（しかも『白いヤツ』って、モッコウバラの意味無いじゃん！！（
ーっ））

大体そこら辺の花屋さんで探しても、運が良くて、ノーマルの『モッコウバラ』なんですよねえ。

（まあ……。もうちょい探してみようかと思います……。）

それでは☆彡

2、Phone

10月20日 午前10時28分 毛利探偵事務所。

この日コナンは一人で、探偵事務所の留守番をしていた。
小五郎と蘭は朝早くではあるものの、それぞれの用事で出掛けている。

蘭は銀行からお金を下しに。

逆に小五郎は、この間帰りの電車賃をおごってくれた居酒屋までお金を返しに。

こんな用件だったので、何となく一緒に出掛ける気になれず残ったコナンだったが、やっぱり付いていくべきだったと、今更ながら少々後悔していた。

とりあえず今は暇なので、先週の漫画雑誌を読みながら時間を潰す。ソファアの端にある出っ張りに足を乗っけるのは、正直少々行儀が悪いが、もう普通に座っている大勢がキツくなったのだからしょうがない。

この雑誌にしたって先週のものなので、もう何度も読んでしまい、内容だっぴ一字一句記憶してしまっている。
つまり暇を潰せるものすら、今は何もない。

「付いてくべきだったなあ……。おっちゃんの方は微妙だったけど……。蘭の方はまだよかったかも……」
なんてことを呟いて溜息を吐いた、その時だ。

ヴィイイイン……。ヴィイイイン……。

「うわっ・・・!!」

いきなりテーブルの上に置いておいた携帯が鳴り出し、コナンはその場で驚きながらソファアールから転げ落ちそうになった。

幸いにも落ちる一步手前のところで手足を踏ん張り、どうにかソファアールから落ちずにホッとする。

「っ・・・ビクリしたっ・・・。誰だ？」

そう思って携帯の画面を覗き込んでみれば、少々面倒な相手の名前が2文字、液晶画面に映し出されていた。

半分苦虫を噛んだかのような表情を浮かべつつ、コナンはバイブが鳴りっ放しの電話に出てみる。

「・・・もしも」

『よお！ 工藤！ 久しぶりやなあ〜！ 元気やったか?!』

半分コナンの声を遮りながら、電話の主である服部平次は大きな声で一方的に口を開く。

あまりにも度を越えた声に驚きつつ、コナンは苦笑いを浮かべながら、服部の問いに答える。

「ああ・・・。お前は元気そうだな・・・」

続けて『相変わらず』と言い掛けたコナンだったが、服部はまたしてもコナンの発言を遮る。

しかも今度は、否定の意味で・・・。

『アホ！ 元気なわけがあるかい!! 今学校は「試験！ 試験！

！」「テスト！ テスト!!」って、みんな言いよってからに・・・。教室は全体的に空気重いし、連れ同士で口も利けへん。おかげで

和葉とも音信不通や・・・』

「そっかー・・・。もうそんな時期か・・・」

そう言えば少し前に、蘭もそんな風なことを言っていたような気がする。

身体が縮んでから、試験はいくつもスッポカシ・・・。

こんなんで留年になっていないのかどうか、内心不安だった。

（一応・・・。蘭の方からまだそんな報告は貰ってねえけど・・・。職員会議とかじゃあ、きつともう決まっちゃってんだろーなー・・・。）

『工藤ー？ 聞きてんかー？』

「ん？ ああ・・・、悪い。んで？ なんで俺に電話を掛けてきたんだよ？」

ジト目でこっちか問いかけてみれば、服部はおそらく苦笑いを浮かべているであろう声で、その問いに返事を返した。

『いや・・・。話し相手がおらんかったから、ちょっとだけ口利こうと思っただけや。それでもせえへんと・・・、なんやこっちの気分がLOWになりそうで・・・』

「まあ・・・、お前はその方が丁度いいけどな」

『なんやとっ！？』

「冗談だって。んな本気にすんなよ」

『ケッ・・・』

「『ケッ』ってなんだよ」

半分服部の態度にムツとしつつ、コナンはパラパラと再び漫画雑誌を広げる。

「それで？ 電話を掛けてきた理由は、本当にそれだけか？」

『あ、いや・・・。実は12月の26日やけど・・・。そっちに行ってもええか？』

「はあっ!？　だってお前テストが……。ああ……。終
わって冬休みか……」

『せやせや。そういうこっちゃ。今回はちゃんとアポしたで？　工
藤』

「へいへい……。そうだな」

いつもアポなしで勝手にやってくる服部にしては、今回は自棄にし
っかりしている。

まあ、試験で脳が働いているとも取れるが……。

(ハハハ……。案外、そういう理由^{ワケ}だったりして……)

『ほな、よろしく頼むでー？　工藤ー!』

「へっ？　あっ……。！　おっ、おい！　はっと」

ブチッ！　ツー……。ツー……

コナンが慌てて声を掛ける間もなく、服部は自分の用件だけを先に
コナンに言くと、即座に電話を切ってしまった。

こういうところは、前とちっとも変っていない。

時々コナンもやるので、どうとは言えないことだが……。

「ったく……。勝手に掛けてきて、勝手に切りやがった……」

仕方なく携帯電話を閉じて、コナンはソファに再び横になる。

明かりも何も付いていない青み掛かったグレーの天井を見つめなが
ら、コナンは再び電話の時と同じ会話を呟いた。

「もうそんな時期か……」

蘭や服部も・・・。

和葉も園子達も・・・。

皆、それぞれ次の学年へと進もうとしているというのに・・・。

「俺だけ置き去りかぁ・・・。それもみんなと10学年も離れた場所に・・・。」

思わずコナンの口から溜息が零れる。

その溜息はまるで、これからやってくる真冬の訪れを感じさせるかの如く、コナンの顔の前で真っにく光った・・・。

2、Phone (後書き)

どーも☆

キュウリが大っ嫌いな

KIDでーす!!

あれは一生食える気がしない!! (笑)

(あのにおいと味……。なんとかなんないかなあ (ーー))

コナン

「ところで、今回のこの小説。修学旅行中に俺達にMC任せるって
言ってたけど……。何回くらいありそう？」

KID

それが携帯のスケジュールで確認してみたら、なんか2回あんのよ
(笑)

しかも最終日、羽田からこっちに戻ってくるのが、約11時過ぎく
らいだと判明……。

(どれだけ過酷な修学旅行……。ozu)

さらに!

つい最近になって、出発日が1日早めの12時(昼)なのだと判明
しました(苦笑)

(だから他の人のコースよりも、2万高かったんだなと……)

快斗

「あれ? でもその日って確か……」

K I D

そう！

G A R N E TのDVD2枚とCDの発売日！！（ギャー！！）

『CDくらいは聴けるかも？』という希望は、コトゴトク破り捨てられました（哀）

コナン

「それだと早くても・・・。8日後？」

K I D

ですねぇ（涙目）

修学旅行中にゆりっぺの誕生日過ぎるのは分かってたけど、まさか発売日まで・・・（オヨヨ・・・）

（どんだけ縁がないねん・・・O Z U）

来週はいよいよ、小五郎の元に依頼が！！

それでは☆彡

3. Invitation

午後1時18分 毛利探偵事務所。

小五郎と蘭が帰ってきた後、コナン達は静かに休日を過ごしていた。昼食も食べ終わり、有難いことなのかどうかまでは分からないが、今のところ小五郎に関する依頼の電話も掛かってきていない。

(今日は服部^{アイツ}の電話以外は静かに過ごせそうだな・・・)
ギリギリまでそう思っていたのだが、結構現実とは唐突的なものだ。

プルルル・・・ プルルル・・・

『噂をすれば』とは、まさにこのことだ。

誰かがこのようなものを思ってしまうと、望んでもいないのに掛かってくる。

いきなり鳴り出した事務所の電話に、小五郎は急ぐでもなく、半分のんびりな感じで受話器を握る。

「はい。こちら毛利探偵事務所」

『初めまして』

電話から聞こえてきたのは若い女性の声。

女性ともなると、小五郎は一気に鼻の下が伸びる。

「ああー！！ どうもー！ 私が名探偵の毛利小五郎です！」

(ハハハ・・・。自分で言ってやがる・・・)

『どうも・・・。私、佐山薬品会社の社長。佐山圭蔵^{さやまけいぞう}の秘書をして

おります。原根空はらねそらと申します』

電話の女性は小五郎に対し、かなり礼儀正しくそう名乗った。自分で自分のことを『名探偵』と呼んでいる小五郎とは偉い違いである。

その一方で、小五郎はふっと今の相手側の紹介で出てきた『佐山圭蔵』という言葉に『あれ？』と宙を仰ぐ。

「『佐山』って……。ひょっとしてガンとかの治療薬を作ってる、あの佐山薬品会社の社長さんですか？」

『あ、はい。そうです』

佐山薬品会社は以前、小五郎が睡眠薬のCMでお世話になったことがある場所だ。

確かあの時は、出演料のギャラが高いつかで撮影にノッたような気がする。

まあ、似たような撮影依頼はいくつもあったので『あの時のことはよく覚えてはいない』というのが、小五郎自身の本音。

しかしこの会社自体は、関東の方ではかなり有名である。

普通のドラッグストア商品は勿論。

病院や研究所などで使われる薬品も作っているため、この辺りではかなり名が知られている。

CMなどの数も多く、よくテレビで流れているのを目にすることもあった。

そんなところから電話とは、一体どういうことなのだろう。まさかまたCM撮影の依頼だろうか。

そんなことも思いつつ顔を顰めながら、小五郎は再び受話器を耳に当てる。

「それで……。私に何の用でしょうか？ まさか……。またCM撮影なんてこと……」

『あっ……。いえ……。！ 今回はそういうわけではありません。……実は今週の土曜日に、会社の創立30周年のパーティーを開く予定なんですが……。昨日、その会社の郵便ポストの中に『社長を殺す』と書かれた紙が入っていて……。』

「そっ……。！ それって！！ 『犯行声明』じゃないですか!?!?」
「えっ!?!?」

（何っ!?!?）

うっかり大声で言ってしまった小五郎の言葉に、蘭とコナンは一斉に視線を小五郎の方に向ける。

その反応を見た小五郎は、即座にマズイと感じたのか、軽くその場で咳払いをして誤魔化した。

「オッホン！ ええ……。それで？」

『はい……。社長は「何が何でもパーティーは取り消さない」と言っていますし、悪戯だとは思いますが、あまりにも心配なもので……』

犯行声明による依頼は、度々小五郎の元によく届く。

しかもそのほとんどが、悪戯ではなく本物。

小五郎は探偵の血が騒ぎ出したかのように、顎を指でなぞりながら『フムフム』と頷いた。

「なるほど……。分かりました！ お引き受けいたしましたよう！ 『本当ですか？ ありがとうございます！ それでは、詳しいことはまた明日。こちらにお電話を致します。生憎、今は時間が……。』
「でしたら、明日の12時頃は？ その時間でしたら、ここにいま

すので」

『分かりました。では明日の12時頃にまた、こちらにお掛けします。それでは失礼します』

それだけ言い残し、原根は電話を切った。

何とも礼儀正しい秘書である。

しかも何処そとなく、小五郎の嫌いなあの人に似ているような気もした。

（んなヤツ……。何処にでもいんだよ。最近は……）

「お父さん。仕事の依頼？」

「『犯行声明』とか言ってたけど……」

蘭とコナンがそう尋ねると、小五郎はジト目になりながら、二人の問い掛けに答えた。

「ああ……。あの有名な佐山薬品会社の社長秘書からの依頼だ。

土曜日に開く予定のパーティーに『社長を殺す』という、犯行声明が届いたんだとよ」

「『佐山』って、この間お父さんがCM撮影をやった、あの佐山薬品？」

「ああ。明日詳しく事情を聞いて、今度の土曜。つまりは26日に、その会社のパーティーに出掛ける予定だ。だからお前ら、その日は予定開けておけよ？」

「『開く予定』って、そんなのが届いたのに、パーティーをやるの？」

気になったコナンがそう尋ねると、小五郎は椅子の背凭れに凭れながら『ああ』と答えた。

「本人曰く、30周年を記念する大事なパーティーだから、中止にはしたくないんだとよ」

（よくあるパターンってわけだな・・・）

「じゃあ私、カレンダーに書いておくね」

蘭はいつも何か用事や予定が出来る時、事細かく壁に掛けられている大きめのカレンダーに書き込んでいた。忘れっぽい自分や小五郎の為である。

ふっとそのカレンダーを見つめていたコナンは、ふっと先ほどの電話のことを思い出した。

そういえば、まだ服部から掛かってきた電話のことを言っていない。せっかくアイツがアポなしにならないようにしてくれたと言うのに、こちらが伝えそくなってしまっただけの意味がない。

「そう言えばさっき、平次兄ちゃんから電話があつて」

「えっ？ 服部君から？」

「ん？・・・んだよ・・・。またあの関西ボウズか・・・」

小五郎は半分『アイツが来るというも事件が』と言いたげな顔をしていたが、実際の話、どちらが事件を呼んでいるのか分からない。

案外、おっちゃんや服部ではなくて自分が・・・。

（んなわけねえか・・・）

「それで？ 服部君、なんて？」

「えっ？ ああ、それで。平次兄ちゃん達、12月の26日にこっちに遊びにくるって。丁度試験が終わってる頃だからって言ったけど・・・」

「そう、分かった。じゃあそれも、下のカレンダーに書き込んでおくね」

コナンにそう言いながら、蘭は赤ペンで11月26日に『事件依頼 佐山薬品パーティー』と書き、その11月カレンダーの下にある12月カレンダーの26日に『服部君・和葉ちゃん 米花町』と

書き込んだ。

そうして書き込まれた予定今月と来月の予定を、コナンはただ無言で見つめる。

何となく感じたこの胸騒ぎは気のせいだと、自分に言い聞かせながら・・・。

3. Invitation (後書き)

どーも☆

A型のくせに、よくAB型と間違われる

KIDです!!

大雑把で、不器用で、脳が乏しく・・・。

それでいて自由気ままで、よく自分の世界に入っている・・・。

そういう性格なんでよく間違われます (笑)

小さい時は全くと言っていいほど泣かない子だったので (今でもそうですが)、保育園の先生達からは『自閉症なのでは・・・?』と、散々間違われたこともあります (へーへ;))

割かし最近に『ADHD』や『アスペルガー』の診断もやってみたんですが、診察結果は『マイペースな部分が強い性格』だとのこと・・・。

(要は『なんでもなかった』ってことなんですが・・・。なんだかなあゝ)

コナン

「ハハハ・・・」

快斗

「話変わるけど。そう言えば今日って、母親の誕生日なんじゃ・・・」

K I D

そう。

一応こっちは適当にプレゼントを・・・。

父は自分でとりあえず得意なパスタを作りました（^^）

男性の方って、パスタ作るの得意な人多いですよね？

（私はイカそうめんとチャーハンと玉子雑炊しか作れないのに・・・）

快斗

「充分だよ！！（笑）」

コナン

「3つだけ作れば、毎日その3つをサイクルで作って生活できる
だろ！」

K I D・快斗

「「えっ？」」

コナン

「えっ・・・？」

快斗

「・・・今お前、スッゲエ生活リズム悪いこと暴露しなかったか？」

K I D

しかも『1日サイクル』って、朝・昼・晩に『そうめん・チャーハ

ン・雑炊』を作って過ごせと？
飽きるしやってられへんわ！！
（しかも栄養バランス悪っ！！（笑））

コナン

「・・・・・・・・・・ハァー・・・」

快斗

「『ハァー・・・』じゃねえよ！！」

KID

それでは☆彡

4. Darknes

午後11時33分 杯戸シティービル付近。

真夜中の杯戸シティービルの真下に、まるで闇夜に隠れるかのように、ひっそりと一台の車が止まっていた。

この場所には割に合わない外国製の古い車。

真っ黒のボディーに、シルバーの装飾。

車には『356A』と書かれていた。

パルシェ356A・・・。

そんな古い車が、人気を避けるような。

まるで寄せ付けないかのようなオーラを放ちながら、ただひたすら持ち主を待ち、息を潜めている。

その肝心の持ち主は、半分ビルの入り口の扉に寄り掛かるようにして、ある人物からの電話を待っていた。

その人物の口には、今さっき火を点けたばかりのタバコが銜えられ、その頭の上には、まるで顔を隠すかのように黒い帽子が深く被られていた。

黒いのは車や帽子だけではない。

上下の服やコート、靴も黒一色。

唯一黒くない個所と言えば、その男性の長い髪くらいだろう。

長くきれいに整えられた銀髪は、美しさを通り越して、殺気帯びていた。

そしてそんな男の隣りに立つがたいのいいサングラス男も、似たような気配を帯びている。

こちらもちちらで全身黒づくめだったが、車の持ち主のような強いオーラはない。

恐怖心を堪えて見つめていれば、サングラスの方が格下だということとはすぐに気が付くだろう。

やがてしばらくすると、各上と思われる車の持ち主の携帯が鳴った。着うたやメロディーなんて一切流れやしない、普通のコール音。そんな音ですら、男は2回流れることを許さなかった。一回目で即電話に出る。

「ああ……。俺だ」

『ジン。連絡が遅れてすまん。色々と立て込んでな……。』

「そんなことはどうでもいい。仕事は上手くできそうなのか？」

『ジン』という名の男はそう電話の相手に問い掛ける。

その口から出てくる声は、何処までも凍り付いていた。

「忘れるな。失敗すればどういふことになるのか……。今回のパーティーで確実に、ヤツを仕留めろ。あの薬のことが世間に知られれば、それこそ一大事だ」

『あっ……。ああ……。分かってる。そのことなんだが……。少し気になることがあって……。』

「……。ん？」

電話の相手はそう言うと、ジンに対し、ある内容の話をし始めた。それは、そのパーティー関係者についての出来事のこと。

「何？……。犯行声明だと？」

『ああ……。そういうものが届けられてたらしくてな……。一応今回のことや、前から気になってることも踏まえて、あそこに依頼を頼んだそうなんだが……。』

「依頼？」

『ほら。お前も知ってるだろ？ あの時テレビで活躍してる「眠りの小五郎」って探偵』

「ああ……。アイツか……」

『探偵』というのは少々マズイ存在でもあるのだが、ジンは別にどうでもいいと言いたげな反応を電話相手に返した。

この反応に、逆に電話相手の方が驚いてしまう。

「ソイツがどうした？」

『あ……。ああ……。だからその……。ソイツに捜査を頼んだってことだ。ただ単に……。ところで……。あの犯行声明はそっちの策の一部か？』

「いや……。俺達の方じゃない。そんな足が着くような馬鹿なやり方、こっちが取るはずがないだろう？」

『そりゃそうだ……。』

「まあお前なら、こんなことは『問題』の『問』の字にも入らないはずだ。上手く切り抜けられるだろ？」

『ああ、そのつもりだ。じゃあまたな、ジン。何かあり次第、連絡を入れる』

「ああ……」

会話も早々に、相手は電話を早めに切った。

そんな携帯を見つめつつ、ジンもパタリと黒い携帯を閉じる。

一応電話の相手^{向こう}がちゃんと動いてくれていると確信した上で……。

「『探偵』つつても、相手はあの競馬オヤジ……。どうってことないんじゃないですかい？」

隣りに同じように立っていた格下の男がそう尋ねると、ジンは銀色の瞳を向けながら、その男に口を開いた。

「ああ……。そっちはな……」

「?……『そっち』?」

「……。俺が気にしているのは、その男といつも一緒にいる、あのガキだ。何かにつけて、俺達の邪魔をしてくる……」

ジンの脳裏に、自分達が全く予測できなかったあの眼鏡の子供が過る。

確か情報が正しいければ、あの子供は毛利探偵事務所にいるはず。

もしもまた、何かマズイことでもされてしまい、組織の存在が明るみに出てしまったら……。

「そんな……。兄貴は考え過ぎなんじゃないですかい?」

「ああ。俺も多少はそう思っている……。だがな、ウォッカ。俺はずっと、前のタワーの時やキールの時。それとアイリッシュの事件のことが、未だに引っ掛かったままでいる……。あのガキがやった行動は、到底ただの小学生が出来ることじゃない……。どう考えても『小学生』という化け皮を引っ被ってる人間にしか見えねえ……。もつともそれも、俺の気にし過ぎなのかもしれないがな……」

ジンはそう言い終えると、まだ半分以上も残っているタバコを地面に捨て、それを右足でギチギチと踏み消す。

「行くぞ」

「へい」

その後ジンとウォッカと呼ばれる二人は、ポルシェの車に素早く乗り込み、誰にもその場を見られぬ内に、夜の闇へと消えて行った。

4. Darknes (後書き)

どーも☆

好きなゲームは「テトリス」と「ぷよぷよ」と「ジグソーパズル」のKIDでーす!!

「ぷよぷよ」に関しては終わりなく出来るので、大体はこちらが飽きてリタイヤすることが多いです(笑)

(大体ハイスコアまで行くと、力尽きてます(^ | ^ ;))

さて、高校の修学旅行の日程が決まってきたところなのですが、7月3日は、コナンと快斗のみでの後書きトークになります(^ ^)大丈夫?

コナン

「まあ、まあ・・・」

快斗

「放送事故起こしてもいいよね?」

KID

いや・・・、駄目だろ(ーー)

そしてつい最近知ったのですが・・・。

『コナン』って、真夜中の連ドラになるんですね?!

（しかも七夕から・・・）

コナン

「一応、噂だと服部が実写化される予定だってさ」

快斗

「はぁ！？ アレどう実写にすんの?!」

蘭

（アレ・・・？（――））

キッド

「おまけに・・・。名探偵になる3か月前が舞台なんでしょう？

あの西の探偵君と出会ったのって、コナンになってからじゃないですか。その前は、顔も名前も知られていませんでしたし・・・。どうやって登場させるんです？」

コナン

（いつからいたんだよ・・・）

KID

確かに・・・（――）

さらになんですが、修学旅行の出発日がGARNETの発売日なのはご存じ・・・。
だろ？

コナン・快斗・蘭・KID

「」「イエース」「」

K
I
D

そしてその期間中に、ゆりっぺの誕生日が過ぎ・・・。

そして帰ってきってからDVDとCDを確認！

その翌日にはコナンの実写ドラマ！！

もうテンコ盛り♪（^^）

（体調崩さすように頑張ります！）

それでは☆彡

5. School

10月21日 午前7時23分 帝丹小学校通学路。

この日コナンはいつもの少年探偵団達と共に、帝丹小学校へと向かっていた。

今日は月曜日。

昨日のあの電話の話がそのまま変更にならなければ、今日は小五郎が、依頼者と午後に電話で話し合う予定だ。

本当ならその内容を聞きたかったのだが、平日ではどうしようもない。

コナンが『まあいいか・・・』と溜息を吐いていると、ふっと先頭の方を歩いていた歩美の口から、こんな声が飛び出してきた。

「そう言えば、もうすぐ歩美達・・・。小学2年生だね」

「そうね・・・」

歩美のその発言を聞いた灰原が、横目でコナンを見つつ返事を返す。コナンはそんな灰原の目線を見ながら『な、なんだよ』と口パクで聞き返した。

当然、本人からは『別に・・・』の一言しか出てこない。

代わりに今度は光彦の口からも、こんな言葉が飛び出した。

「それにしても気になりますねえ。クラス分け・・・」

「うえー!? じゃあ、俺達バラバラになっちまうのかよ?!」

「いえ、まだそこまでは・・・」

「それに、クラスは2クラスだけだし。小林先生、歩美達が少年探

偵団だってこと知ってるから、きっとバラバラになんかしないよ。ね？ コナン君もそう思うでしょ？」

「えっ？」

いきなりそう訊かれてもどう言ったらいいのか分からず、とりあえずコナンはそのまま『ああ・・・』と返した。

「ほら！ コナン君だってそう言ってるし」

「うーん・・・」

「歩美ちゃん・・・。必ずしも『コナン君が言ったからならない』とは限らないですよ？ 決めるのは所詮、先生達なんですから」

（なんで俺が全部を決める人間になってんだよ・・・。とついでに光彦。お前の年齢で『所詮』の言葉は早い！）

「でも、可能性はあるじゃない」

「それはそうだけだよお・・・」

そう言いながら先を歩く3人を見つめ、灰原はふっと口を開いた。

「複雑ね・・・。あなたにしてみたら」

「・・・で？ 薬はまだできねえのか？」

「ええ・・・。どれも一時的なものばかり・・・。これじゃ当分駄目ね」

「はあ・・・」

そんな結果に溜息をしつつ、コナン達は十字路に差し掛かった。

この十字路の横断歩道を一つ通ると、学校はもう目と鼻の先。

コナン達から言わせてもらえば、既に行き慣れた通学路だった。

「あっ・・・、ねえ！ 青だよ！ 早く渡ろう」

「あっ、本当ですね」

「行こうぜ」

いつも通り赤だった信号が青に変わったところで、歩美達は横断歩

道を走り出した。
と、その時だ。

キキイーツ!!

「!!」

「歩美ちゃん!」

突然横の道路から、一台の紺色のベンツが飛び出してきた。
さらにそのベンツはスピードを緩めずに、横断歩道の真ん中を走っていた歩美の方へと突き進んでいく。

「歩美ちゃん! 危ない!!」

「離れてーっ!!」

「歩美ーっ!!」

「キャアアアー!!」

恐怖でその場に固まる歩美。
車は一向に止まる気配を見せずに突っ込んでいく。

(マズイ!!)

そう思ってたコナンがキック力にスイッチを入れた瞬間、その横断歩道の反対側から黒い影が歩美を抱き抱え、そのままコナン達の方の道路へと倒れ込んだ。

コナン達が一瞬の出来事に驚いていると、その黒い影がゆっくりと起き上がった。

その正体は、学ランを着込んだ一般の男子高校生。

「ハア・・・、ハア・・・、大丈夫!? 怪我はない?」

「・・・え? う・・・、うん・・・」

「馬鹿野郎! またお前か!! おい、テメエツ!! 俺の車に轢かれてえかつ!! ああっ!!」

その怒声のする方に視線を向けてみれば、そこにはあの紺色のベンツを運転していた運転手が、運転席の窓から怒鳴り込んでいた。

自分から突っ込んできたくせに、この男は車を停めようともせず、むしろ相手の方が退けという態度を見せてきたのだ。

全く反省の色を見せない男に、学ランの高校生は果敢にも怒鳴り返す。

「ふざけんなっ! 子供を轢き殺しそうになりやがって・・・!!
今は車は赤信号だろ!!」

「そ、そうですよ!!」

「歩美を殺すつもりかよ!!」

高校生と一緒に元太や光彦も反論すると、男は敵わないと思ったのか、それとも人が多すぎてマズイと感じたのか『チッ!』と舌打ちをすると、再び車のタイヤを乱暴に、道路の方へと向けた。

「今度そんな口利いたら、ただじゃおかねえからな!! 覚えとけっ!!」

それだけ言うと、男は再び猛スピードで道路を走って行った。

高校生は最後に車の方に顔を向け、大声で怒鳴り返す。

「フン! そんな時には知り合いの刑事を呼んでやるよーっ!!」
高校生はそう言い終えると、優しく歩美に声を掛けた。

「もう大丈夫だよ。立てる?」

「う、うん……。ありがとう」

「ありがとうございます！ でもよかった。歩美ちゃん無事で……」

「ホントだぜ。ったく、なんだよ！ あの男……」

「あんな車をギョングン言わせて走らせてるところを見ると、どつかの大金持ちみたいだな……」

「全く……。金持ちだからって、高級車なんて渡すもんじゃないわね……」

流石のコナンと灰原も呆れ過ぎてものが言えない。

と、何かに気が付いたように、光彦が高校生の右手の方を指差した。

「あっ！ 血が出てますよ！！ 右手の小指の下辺り……」

「えっ？ ああ……。きつとさっき擦ったんだ。大丈夫♪ 軽い掠り傷だし……」

「ねえ。あの人と前にも会ったことがあるの？」

「えっ……。？」

「今あの人『またお前か！』って言ってたでしょ？」

コナンにそう問い掛けられ、高校生は半分驚きながらも、頷いた。

「ああ……。最近この辺で問題になってる乱暴運転の男でさあ……。前にも子供とか老人とか轢き殺しそうになって、こっちが止めたんだけど……。アイツ、丁度今の時間帯でこの辺走るから、よく会ったんだ」

「そ、そうなんだ……」

そう答える高校生の話に頷きつつ、コナンはふっと誰かとこの高校生が似ているような気配を感じた。

制服から察するに江古田高校の学生で、年齢は蘭達と同じくらいだろう。

だがそれとは別に、誰かと似ているような気がしたのだ。
思い出せないが・・・。

「あっ・・・！ ヤバいッ！ 遅刻する！！ じゃあ、俺はこの辺で。それと、みんなも気をつけろよ！ あの男またこの辺走り回らるうから・・・。じゃあな！」

高校生はそう言い残して、そそくさと米花駅の方へと走っていった。
しまった。

「でもよかったですね。いい人に助けられて・・・」
「うん！ 優しかったし」

「でもよ。あの男、誰かと顔似てなかったか？」
「そう・・・、言われてみれば・・・」

皆が元太の発言を聞いて宙を仰いでいると、後ろの方にいた灰原からこんな声が出てきた。

「『工藤新一』じゃないの？ 後ろ髪は違ってたけど・・・」
「えっ？ ・・・ああっ！！」

「そっかぁ！ 確かに似てたかも！」

「蘭さんの隣りに映ってた男の人ですよね！？」

「似てたかぁ？ 俺に・・・」

「ええ・・・。少なくとも私は、後ろ髪と性格以外は似てると思ったわよ」

「・・・・・・・・・・」

灰原の発言に、コナンは『ハハハ・・・』とジト目で笑う。

これはあくまでも自分の意見だが、似てないと思う。

その前に、自分と顔が似ている人間なんて『江戸川コナン』だけで十分だ。

（いい気しねえつつうの……。でもアイツ……。なんかどつかで会った覚えが……）

ギロツ!!

「!」

「? ……どうしたの？」

「いや……。一瞬誰かの視線を感じたんだけど……。気のせいだよな……」

視線を感じたのは、コナンの真後ろの方から。

だがあの高校生が走っていったのは前の方だし、まだあのベッツ男が近くにいても思えなかった。

現に振り返ってみても、そこにはその二人の姿もなければ、こちらを見つめている人影すらない。

「止めてよ……。あなたのそう言うのって、必ず何処かで私達を巻き込むんだから……」

「あ? ああ……。悪いー、悪いー。なんでもねえって……」
「……ホントに?」

「本当だって。誰もいなかったしさ……」

コナン達はそう言いながら、再び帝丹小学校への通学路を歩き始めた。

近くの裏路地から、誰かに見られているとも知らずに……。

5. School (後書き)

どーも☆

動物の中では一番ヘビが大好きな

KIDでーす!!

これでも一応女子です! (笑)

女子で『ヘビ好き』と言うと、結構周りから変な目で見られます (^^;)

中学生の時なんて、普通に学校でトカゲやらヘビやらカメやら (あれは川だったかな?) を捕まえた際、当時一番クラスでツツパってて恐かった女子ギャルに

『あんた「女」としての自覚あんの? (睨)』

と脅しみたいに言われて、かなりビビった記憶があります。

でも個性なんだから別にいいじゃん!! (泣)

それを言ったらこっち、あんまり哺乳類好きじゃないし! (笑)

コナン

「ま・・・、まあ・・・。個性ってことでいいんじゃない?」

快斗

「でも・・・、なんで今ヘビの話?」

KID

・・・。

実は自宅でヘビ飼い始めた (^^) (キツパリ)

コナン・快斗

「何ーっ!？」

コナン

「灰原がこの場にいたら、確実にそのヘビ、スリッパでボコボコに
してるぞ!？」

快斗

(スリッパごときで倒せるのかどうか疑問だけだな・・・。うん・
・・(笑))

KID

ハハハ・・・。

実は私、将来ある爬虫類専門のペットショップで働きたいと思っ
ているのですが、そこは一番にヘビを売るのに力を注いでまして・
・。

よくヘビのことで、飼い方や生態などを聞きに来るお客さんも多い
んです。

そう言った方々のアドバイスや対応の為にも、どうしてもヘビが飼
いたかったのですが・・・。

何せ自宅が集合住宅なので、隣り近所が『ヘビ飼ってませんよね?』
なんて訊いてくるし、ヘビはエサ代が少々掛かる。

そう言ったことで諦めていたのですが、金曜日に学校の近くの川辺
で一匹捕獲しまして、現在そちらを飼育中。

コナン

「捕獲って・・・（苦笑）」

K I D

もう簡単ですよ（^^）

右手で首根っこをガシッ！と（笑）

ちなみに種類はアオダイショウのオス。

名前は体色で決めて、琥珀^{こはく}。

快斗

「なんか古風な名前付けたなあ・・・」

K I D

ほんで体長は確か・・・、110センチで細めだったと・・・（長
っ！！）

この後何が起こるのか、個人的に楽しみです（^^）

それでは☆彡

6. Menace

午後8時02分 帝丹小学校 職員室。

無事帝丹小学校に到着したコナン達は、教室へは向かわず、そのまま担任の小林先生がいる職員室の方へと向かった。

理由は、先ほどの乱暴運転のことを知らせるため。

今回は大事には至らなかったが、もしまた同じことが起こったら大変だ。

下手をすれば、自分達のクラスメイトが巻き込まれる可能性だってある。

職員室へと入ったコナン達は、すぐさま小林先生に、先ほど十字路のところで起こった出来事を事細かに報告した。

他校の人間ではあるものの、怪我人が出たということも……。

その話を聞いた小林先生は驚きながら、その運転手に心当たりのある人物の名を口にした。

「その人……。きつと『金田^{かねだ} 悟^{さと}』っていう人よ」

「えっ!？」 『金田悟』って……。この間『子供だより』に載ってた、あの乱暴ベンツ運転手の?」

そう言えば前に、子供用の手紙（子供だより）にそんな人物のことが載っていたような気がする。

確かそこに書かれている『金田悟』の特徴は、30代くらいのかなり細身の男で、身長は177センチくらい。

髪型はやや長めで、毛先を少しだけ尖らせたような形にしている。

そして愛車は、ダークブルーのベンツ。
要は、珍しい紺色のベンツだったと書いてあったはず……。

「そう言えば……。あの人が乗ってた車も、紺色のベンツだったわね……」

「言われてみれば……」

「紺色のベンツだったら、ほぼ間違いないわ。つい最近、この近くに移り住んだらしいんだけど『運転が乱暴で危ない』って、このこの辺の近所じゃ、かなり騒がれてるから……」

と小林先生が口にした瞬間、元太は激しく机を『バンッ!!』と叩いた。

「ちよっ……。ちよつと! 元太君!」

「なんで警察は何にもやらねえんだよ!! んなヤツ、警察がとっ捕まえればいいじゃんか!!」

「そうできない理由があるのよ」

灰原がサラリとそう返すと、小林先生も落胆しながら頷いた。

「そうなの……。その人、かなりの大金持ちでね……。車以外にも色々トラブルを起こしてるみたいなんだけど、みんな逆らうと何されるか分からないから、何にも言えないのよ」

「とんでもねえヤツだな……」

流石のコナンも呆れてそう言い返す。

これまでも何度か、金持ちだから手出しが出来ないというケースはあったが、ここまで酷いのは初めてだ。

ましてや怪我人が出ていても動かないのは、もはや仕返しなんかで怯えている場合ではないと思う。

少なからず、コナン自身はそう思った。

「ところで……。『大金持ち』って、一体どんな職業を？　米花町には、あんまりその手の仕事場はないですよねぇ……？」

「さぁ……。？　先生に聞かれても……。噂だと、佐山薬品会社の誰かがご親戚だって聞いたけど……」

「ええっ!？」

その小林先生の言葉に、思わずコナンの口が大きく開いた。

今のは聞き間違いだと信じたい。

何処か別の薬品会社であると思いたい。

が、現実には『違う』とは言ってくれなかった。

「さ……。佐山薬品会社……？」

「そ、そうよ？　あくまで噂だけだね」

「……」

「何？　……今度はどうしたの？」

「えっ？　あつ、いや……」

「だから『やめて』って言ってるでしょ!？　そういう風に事件を呼ぶ前兆みたいな反応は!」

「なんだよ、それ……」

少々灰原のその発言にはムツとしたが、まあ後でこのことは話そうと思う。

現にコナンの後ろにいた元太達も、コナンのただならぬ反応や表情を察しているようだった。

（わぁーったよ……。話なしやーいんだろ。話しやー……）

「まあ……。一応私の方から警察には連絡しておくけど、今後はみんなも気を付けてね。逆恨みでもされたら大変だから……。さあ!　教室に戻りなさい。授業始めるわよ!」

「「はい!!」」
「はい・・・」

5人はそう返事を返した後、小林先生と共に教室へと向かった。

6. Menace (後書き)

どーも☆

洋服は黒と紺が好きな

KIDでーす!!

投稿遅れてすみません!! (<|>)

(少々こちらの手違いで遅れました(汗))

コナン

「またやっちゃったよ・・・」

KID

今後もうこうなりそうなので、ご了承を・・・。

さて!

昨日はおかもちの Birthday♪

(ああ・・・。もう年が・・・(――;))(しみじみ・・・)

そしてようやく、GARNETの腕時計が届きました!! (笑)

(本当はもっと前に届いてたんですけど、色々バタバタしていて、報告遅れ気味に・・・(苦笑))

腕時計なんですけど、私は基本、サイズが超ブカブカになる人間です(苦笑)

早めに調節しないとなぁーと思いつつ、何やら出来ずにいる今日こ

の頃です。

震災の影響で遅れた腕時計……。届いてシリアルナンバーを確認してみたら……。

200／800

えっ!？ これって『800台中』の『200台目』ってことっ?
! (驚)

結構関係のない数字がやってくることを想定していたので、かなり届いた直後はポカ〜ンとしていました……。 (へーへ;)
(だって、キリが(笑))

さらにチャリティーライブのチケットも当たったし、8月はまた盛り上がれそうです♪

(まあ……。今年は震災やら受験やらでバタバタ年なので、唯一の息抜きがコレかなと……)

快斗

「修学旅行は？」

KID

それが……。

露あけたでしょ？

その次に来るのって、台風なんだよね……。 (やめてえ〜!! (笑))

さて、来週は快斗編になります！

コナン

「クラスメイトの彼女も登場予定♪」

快斗

「違うから！！」

『彼女』じゃねえから！！」

K I D

それでは☆彡

7. Ekoda

午前7時57分 江古田高校 保健室。

(もう！ 何やってんのよ・・・！！！)

そう何度も胸中で叫びながら、青子は大急ぎで保健室へと向かって
いた。

実は先程教室で『マジシャンが腕を怪我したぞ！！』という話を耳
にしたからである。

その『マジシャン』が誰なのか予測が付いていた青子は、それを聞
いてすぐさま保健室へ向かおうと階段を駆け下りていた。

途中転びそうになろうが、人や教員にぶつかりそうになろうが気に
しない。

そればかりか、青子は頭の中でただひたすら『今日一緒に登校すれ
ばよかった』と後悔していた。

一緒に登校していれば、アイツが怪我をするような状況にはならな
かったはずなのに、と・・・。

きつと怪我をする前に、こっちが動いていたはずなのに、と・・・。

『保健室』と書かれた看板が見えたところで、青子はさらに走るス
ピードを加速した。

そしてドアの前で、まるで急ブレーキを掛けるかのようにして止ま
ると、右手で力いっばいにドアを弾き開ける。

「快斗！！」

「「！！」」

いきなり『ボタンッ！』と大きな音を立てて中へ入ってきた青子に、保健室の女性職員と快斗は、ただただ目をパチクリさせる。だがしばらくすると、女性職員はクスリと面白げに笑い、塗り終わった消毒液付きのガーゼをゴミ箱へと捨てた。

一方、丁度小指の下の擦り傷を手当てされていた快斗は、その職員の顔を見てジト目になると、その目付きのまま青子の方に視線を向ける。

「なんだよ……」

「えっ、あ……、その……」

思いの外軽い怪我だったと知った青子は、ただただその場に固まった。

一体今、快斗に何を言ったらいいのか分からない……。

こちらが大げさに慌て過ぎていたことに、青子はほんの少しだけ顔を紅くする。

結局次の言葉が出ぬままモゾモゾしていると、女性職員の方は面白そうにそんな二人を見つめ、ふっとこんな言葉を口にした。

「いいわねえー。青春みたいで……」

「「べっ……！ 別にそんなんじゃない……！」」

「あら。否定の言葉まで同じになってるわよ？ 大丈夫。私は空気になってるから……。フフフ」

「っ……！！……」

（あちゃー！ 青子のバカーッ！）

女性職員に色々と恥ずかしいことを言われ、青子は顔を完全に赤面させながら、右手を額に当てて溜息を吐いた。

と同時に、快斗の方からも冷めたような声が聞こえてくる。

「で？　なんだよ……。いきなり慌てて来やがって……」

「えっ……。？　だって……。！　快斗が登校中に怪我したって聞いたから……」

「えっ？　ああ、このことか？」

そう言って右手の小指の下に巻かれた包帯を見せると、青子は一気に赤面させていた顔を青褪めさせ、半分悲鳴を上げるかのように叫んだ。

「まさか！！　本当に手を怪我したのっ！？」

「そ……。、そんなに驚くなよ！　心配ないって！　掠り傷だから……。手品師としての支障ナシ！」

「そうよ、中森さん。単なる擦り傷ですから。包帯を巻いたのは、ちょっと絆創膏だと収まりきれなかったからよ」

「な……。、なんだあ……。よかった……。」

それを聞いてようやく、青子は安堵の溜息を吐いた。

内心『骨折でもしていたら……。』と、かなり心配していたのである。

そんな青子を見つめつつ、快斗はただただジト目のまま『ケツ』とそっぽを向いた。

（オメーは心配し過ぎなんだよ……。）

「でもさ、快斗……。『掠り傷』って、何かあったの？」

「あ？　ああ……。ほら、例の暴走車がまた子供を轢きそうになつてさあ。それを助けた時に、道路に擦ったんだよ」

「ああ！　あの米花町で問題になってる車のこと？！」

先程の空気状態発言は何処へやらと言った感じに、女性職員は驚い

たように快斗の方を振り返った。

どうやら江古田高校内でも、その車はいろんな意味でかなり有名になってしまっているらしい。

もつともあの運転などを見ていれば『そうだろうな』という予想は大体付くが……。

「その車……。確かこの間も同じことがあって、快斗が助けたんだよね？」

「ああ……。なあ！ 頼むぜ、青子。オメーの親父に頼んで、ソイツ捕まえてくれよ！ 捕まえるのは警察の十八番だろ？」

快斗がそう言いながら頼んでみれば、青子はかなり渋い表情を浮かべている。

その理由は、青子の父親でもある中森銀三警部の『課』のことだ。

「それが出来ればいいけど……。でもお父さん……。捜査参加二課で、専門は専らキッドだし……。そういうのって、別の課の担当なんじゃないかなあ」

「んだよ、それ……。ハアーツ……。警察も色々と面倒臭えなあ……。あ……。あ……」

「しょうがないでしょ！」

ここで青子に怒鳴られても困るのだが、正直面倒臭いのは事実だ。

確かにそう言った迷惑な内容は、普通は交通課が行う仕事。

ブラックリストなどにも載るような泥棒を追いつけている二課の仕事ではない。

（にしたって面倒だなあ……。）

こんなにも被害者が出そうになっているのだから、金銭的なことはともかく、即急にあの男を捕まえてほしいものだ。

今度もしまた轢かれそうになって、死者でも出たらどうするつもり

なのだろう。

ふっとそんなことを考えていると、快斗の脳裏に今日出会った5人組の子供達の顔が浮かんできた。

その内の一人は、いつも夜の姿の時に火花を散らし合っている、小さな小さな名探偵・・・。

（バレてねえよなあ？ 俺の顔見てたけど・・・）

変装する相手にもよるが、一応今まで素顔で彼に出会ったことは一度もない。

『工藤新一と顔が似ている人間』というのは知られているが、いざ表に顔を出したところで、すぐにあの怪盗とは結び付かないだろう。咄嗟に行ったポーカーフェイスも、自分の中では自信がある。

（大丈夫・・・。分かりっこねえ。あんだだけ誤魔化したんだからな。・・・そう言えば・・・、そろそろ犯行の為の予告状、作成しとかねえと・・・）

この時の快斗はまだ何も知らないまま、今までと全く同じ生活を行っていた。

まさかこの日から、あの戦いは始まっていたとも知らずに・・・。

7. Ekoda (後書き)

どーも★

学校では美術が大好きな

KIDでーす!!

よく学校でやるものとかも家の中でもやってまーす (笑)

(元々家系的に美術関係が得意なのが多いもので・・・こちらもその影響が (^ | ^ ;))

コナン

「そう言えば、話は変わるけどさあ・・・もう2週間切ったな。修学旅行・・・」

KID

そだね。

(早い・・・)

一応今週は荷物購入に追われる予定です (苦笑)

『ちなみに』な話なんですけど、実は今日、修学旅行前のお試しキャンプを行う予定だったんです。

雨天だったので中止になりましたけど・・・ (^ | ^ ;)

快斗

「じゃあ・・・いつキャンプの練習を？」

K I D

一応今週の水曜日に、学校の校庭か駐車場で、お試し飯盒炊爨をやることになりました（笑）

（たき火でやるとはいえ、なんだか心配ですけど）

コナン

「ハハハ・・・」

K I D

そう言えば今日辺り、コナンの時間にGARNET CROWのNEWシングル予告と、コナンの実写連続ドラマ予告が流れるかなあ。

（→これを書いている現在時刻は、3時25分です）

そろそろ日も近いし、そんな気がするんだけど・・・。

今日チェックしてみます（^^）

来週は、再びコナンが登場する話に戻ります！

それでは☆彡

8. Party

午前10時57分 帝丹小学校。

1時間目の授業が終わり、ノートやら教科書やらを片付けながら、コナンは『ハァー』溜息を吐いた。

その溜息に、隣りに座っていた灰原が半分怪しむかのような視線を向けた。

「どうかしたの？　なんかさっきの話を聞いてから、随分顔が暗くなってる？」

「そ．．．、そうか？」

「そう言えば、コナン君。さっき驚いてたよね」

「薬会社の名前聞いた時だろ？」

「それがどうかしたんですか？　コナン君．．．」

授業が終わって席を立った光彦達も、先ほどのことがかなり気になったのか、代わる代わるにコナンに尋ねてきた。

その問い掛けに、コナンはジト目のまま重い口を開く。

「ああ．．．。実は昨日、事務所に依頼電話が掛かってきてさあ．．．。依頼の内容は、会社に犯行声明を送り付けられたってやつで」

「犯行声明．．．。『誰かを殺す』とかの？」

「あ、いや．．．。詳しいことは、今日おっちゃんがもう一度電話で訊く予定なんだけど．．．。その犯行声明に書かれた内容じゃあ、5日後に杯戸シティービルで開かれるのパーティー会場で、何らかの騒ぎを起こすってやつなんだ。ざつと言うと．．．。それでそのパーティーの主催者が．．．『佐山薬品会社』の社長なんだ．．．。．．．。なんかヤバイ空気感じねえか？」

「「「「．．．感じる（わね）」」」」」

コナンのその話に、皆も状況が理解できたらしく、一斉に渋い表情を浮かべた。

「ひよつとすると……。そのパーティー会場に、あの『金田』っていう人がやってくるかもしれないってことですね？ コナン君……」

「なあ？ 最悪だろ……。？ 下手すりゃあ、アイツ……。俺の顔覚えてるかもしれねえし……」

「恐いんなら、行かなければいいんじゃない？」

「あ、いや……。その……」

確かに灰原の言う通り、恐いのなら付いていかなければいいだけの話だ。

しかし、事件には目がないコナンにとって、流石に『家で留守番』というのは、少々気持ち的に落ち着かない。

ましてや、犯行声明の内容は『社長を殺す』。

高校生の時は専ら殺人事件専門だったコナンにとって、これは黙ってはられない内容。

勿論『事件が起こってほしい』などとは一切思っていないが『事件』と聞いたらどうにもこうにも好奇心が収まらなくなってしまうのだ。哀しき探偵の性である。

「まあ、あなたの場合……。『事件』と聞いたらすぐに飛びついてくるんだから、家で一人留守番なんて出来ないんでしょう？ まるで糸だけで飛びつくカツオね」

「時期的なたとえ方をすんなよ！」

「あゝら。もう旬は過ぎたけど？」

「知らねえよ！！」

「なあなあ……。俺思っただけどよお……」

ふっと灰原と言いついていけば、珍しく元太が話の口を開いた。
いつもなら難しい会話ばかりが飛び交っている中では絶対に話そう
としない、あの元太が、だ。

「・・・ん？ どうした？ 元太」

「いや・・・。もしかしたら、その犯行せいなんとかっていうの出
したヤツ、その金田っていうヤツなんじゃねえか？」

「元太君！ 『犯行せいなんとか』 じゃなくて『犯行声明』ですよ
！」

空かさず光彦が、いつものように元太の言葉を訂正する。

「しょうがねえだろ！！ 難しすぎて覚えられなかったんだからよ
お！」

（あっ・・・。結局分からなかったのね・・・）

「おいおい・・・。まだ本物だって決まったわけじゃ・・・。送っ
たヤツだって、分かってねえんだし・・・」

「あら？ ・・・でも可能性は、なくはないんでしょう？」

「ま・・・、まあな・・・」

確かに親戚の一人だとすれば、その可能性は十分に考えられる。

何故ならば、こちらが知る限り、あの社長の親戚はその金田のみ。
金田以外の親戚は皆死去していて、後継者候補も残されていない。

となれば必然的に、唯一の親戚でもある金田が『佐山薬品会社』の
正統後継者候補として上がるだろう。
と同時に、莫大な資産も・・・。

（遺産狙いで殺害をする可能性もなくはないが・・・。自殺に見せ
掛けられなければ、そう上手くは・・・）

「あっ！ 先生達が戻ってきたよ」

「チャイム、知らない内に鳴ってましたね・・・」

「ああ。じゃあ、また休み時間にしようぜ。この話の続き」

「はいはい・・・」

「そうですね」

会話もそこそこに、少年探偵団達は散り散りに、それぞれの机へと戻った。

8. Party (後書き)

どーも☆

嫌いな教科は体育の

KIDでーす!!

小中学校の頃は『体育なんて消えてしまえ!!』と恨んだほどです

(笑)

唯一出来たのは、前転&後転(要はでんぐり返り)と開脚前転&開脚後転のみです(苦笑)

コナン

「サツカーは？」

KID

ちょっと嫌な経験が・・・(汗)

さて、来週は修学旅行前日!!

荷物まだ詰めてない・・・。

ついでに言ってしまうば、まだこれの続きも書いてない・・・(苦笑)

(早めに書いておかねば・・・)

そう言えば遅れましたが・・・。

快斗誕生日おめでとー!! (^^)

（色々忙しくて、全然何にも出来なかったけど・・・）

快斗

「あっ・・・、サンキュー♪」

コナン

「一応こっち、2日前に快斗達と飲み会やってたぜ！（笑）」

灰原

「パイカル飲みながらね・・・」

コナン・快斗・平次

「「「ギクッ!!」」」

KID

それ駄目でしょ!!（汗）

それでは☆彡

9. Old playmate

午前10時59分 帝丹高校。

一方その頃、帝丹高校で1・2時間目の授業を終えた蘭は、教科書類などを片付けていた。

服部の方だけでなく、蘭達のところでさえ、今は『試験』という言葉があちらこちらから飛び交っている。

勿論、授業も専ら試験範囲の説明だらけだ。

ふっと教科書類を片付け終えた蘭が視線を前の方に向けてみれば、そこには前の席でダラリとノビている、友人の園子の姿があった。

『あった』というよりも『いた』の方が、この場合の表記は正しいのかもしれない。

ややその脱力ぶりが尋常でないことに気が付いた蘭は、恐る恐る園子に声を掛けた。

「・・・園子。園子？ 大丈夫？」

「はぁ・・・。もう試験なんて嫌なっちゃう・・・」

そう言いながらモソモソと起き上がる園子に、蘭は苦笑いを浮かべた。

「そもそも・・・。好きな人の方が少ないと思うけど・・・」

「そりゃそうだけどさぁ・・・！ もうなんなのっ！？ まだちょ

っとばかし先だっていうのに、教員全員揃って『試験』って・・・

！！」

「まあ・・・。言いたくなる気持ちも分からなくないけど・・・」

確かにこのところ、学校の授業はいつも二言目には『試験』だらけ

だ。

現に今の1・2時間目に行われた社会の授業だって『今日読んだ箇所を全て試験に出す』などの説明ばかり。

園子が嫌がるのも無理はないだろう。

ふっとそう思いたただただ苦笑する蘭に、園子はふっとある不登校生のことを尋ねた。

「そう言えば……。彼から『学校に行く』って話、蘭聞いたの？」
「えっ……。？　彼？」

「やっであー！　アンタの旦那のことよ」

園子が半分『私に言わせないでよ』と言いたげな表情を浮かべながらそう答えると、蘭は一気に顔全体を真っ赤にしながら、園子のその発言を否定した。

「そっ……。！　そんなんじゃないわよ！！　なっ……。、なんで私が……。っ！　あんな推理オタクなんかと……。！！」

「まったくまたあー！　照れちゃってえ」

「ちっ……。、違うわよ！！」

蘭は必死に『否定』というよりはかは『抵抗』するかのように、園子の言葉に何度も首を横に振る。

だが『気持ち』と言うものは素直なもので、そうする度に、蘭の顔は真っ赤になっていく。

と、そこまで蘭をからかっていた園子は、途中でいきなり『あれ？

なんか本筋の話から離れているような……。』と言った感じの表情を浮かべ、ハッとしたように本筋の方へ話を戻した。

「て……。、そうじゃなくて……。！！　蘭！　もうじき私達受験生よ！？」
あと少しで高校三年生になるっていうのに、工藤君……

。相変わらず学校に来る気ないの？」

「えっ・・・？」

そう尋ねられて、蘭は下に視線を落としてしまった。

というのもこのところ、新一とはあまり電話をしていない。

こちらが前ほど電話を掛けなくなったというのもあるが、一番の理由としては、新一が電話にあまり出なかったから・・・。

それほど電話に出ることがなかったので、いつの間にかこちらも、新一の方に電話を掛けることを止めてしまっていた。

きっと前から言っていた『厄介な事件』が、かなりマズいことになっているせいだと思う。

そんなこともあって、学校の今後についての話は、何一つ聞いていなかった。

「う、うん・・・。新一、今忙しいみたいだから・・・。『厄介な事件に関わってる』って、いつも電話で言ってたし・・・。」

「『厄介な事件』って、それって一体いつからよぉ？ 大分そう言ってから日が経ってるじゃない」

「そうだけど・・・。きつと・・・、きつと大きな犯罪組織とか、凶悪犯集団とか、そういうのの事件に関わってるから、解決するのに時間が掛かってるんだよ。多分・・・。」

「でも、蘭・・・。いくら高校生探偵として人気者の工藤君でも、今の状態じゃあ下手したら留年よ！？」 電話で今回のテストくらい、出るように言えないわけ？」

(・・・留年・・・。)

その言葉が、妙に蘭の中で突き刺さった。

今でさえ、新一とは思うように会えない。

いつも電話の声だけで、実際に顔を合わせられるのは本の一瞬だけ・
・・。

それなのに留年にでもなってしまったら？

余計に新一と会える機会は減ってしまうのではないか・・・。
そしてそのまま、新一とは疎遠になってしまうのではないか・・・。

そんな不安が、蘭の中でグルグルと渦巻いた。

だが電話を掛けたところで、向こうが出てくれるのかどうかも分からない。

もしかしたら、また留守番電話になってしまいかもしれない・・・。
そのまま、用件を聞いてくれないかもしれない・・・。

電話だけで問題が解決するのだろうか、かなり微妙なところだった。

「どうだろう・・・。新一、今すごく忙しそうだから・・・」

「でも、やっというて損はないんじゃない？」

「・・・・・。そうだね・・・。うん、分かった。私、今日家に帰
ってから電話してみる」

「うん、そうしてやんな。新一君の為にもね」

「うん」

そうは答えたものの、内心では『それでも新一は来ないのではない
か』という気がしてならなかった。

理由は『勘』としか言えない。

ただもし強いて言うとしたら、いつも涙ながらに『会いたいよ・・・』
『と言つても、新一とは会えないから・・・』

もしもそれで会えるのなら、いつもだってきっと、こちらが『会いたい』と言えば、会えていたはずだと思うのだ。

それが出来ないのだから・・・。

新一とはもう、学校では会えないような気がした。

（新一・・・。来てくれるの？　・・・・・・・・・・また、会える？）

蘭はまるで新一に問い掛けるかのように、青空を眺めながら、そう
呟いた・・・。

9. Old playmate (後書き)

どーも☆彡

お米は硬めが好きな

KIDでーす!!

いよいよ明日は修学旅行出発日!!

いきなり西表・・・じゃなくて(笑)

一日目は石垣島のホテルに泊まります(^ | ^ ;)

コナン

「なんで石垣?」

KID

そっちの方が料金安いんだと・・・。

朝食がそのバイキングっていう時点で、高い気もするが(ーー)

そして3日は、コナンと快斗に『後書きラジオ』任せます♪(笑)

二人で不安だったら、ゲスト数人呼んでいいから(^^)

コナン・快斗

「「って言われてもなあ・・・(苦笑)」」

KID

はい!

さて、その問題の二人が『後書きラジオ』を行う来週ですが。

来週は蘭とコナン（新一）の、少しばかり切ないような・・・。
そんな話になる予定です♪

また今回の話から、感想のコメントは一回分できなくなります。
（書く人間がいらないので、ご了承を・・・）

それでは☆彡

10. ? miss you

午後4時43分 通学路。

ようやく学校での授業も終わり、コナンはいつもの少年探偵団達と帰宅路を歩いていた。

ちなみに問題のあの十字路は、どうにか信号を渡り終え、何事もなく通ることが出来た。

が、今後はあそこを通る度に注意しなくてはならない……。

（乱暴ベントツ男ね……）

なんて思いつつジト目で十字路を振り返った。

朝とは違い、今の時間帯はお年寄りや大人が多く行き来している。

あの中に車が突っ込むことを考えると、かなり鳥肌ものだ。

「嫌ね……。あそこに紺色のベントツが突っ込むのを想像するの……」

「ハッ……。好きなヤツなんていやしねえよ……。犯罪に飢えてるヤツ以外はな……」

「……組織のこと？」

「いや……。アイツなら、言いたかねえけど……。もっと残酷なことすんじゃねえか？」

「……そうね」

明らかに夕焼け空をバックに言う話ではないと思いながら、コナンと灰原は十字路から目線を放し、前を向きながら歩き出した。

毛利探偵事務所 2階。

一方その頃。

一足先に帰宅していた蘭は、カバンをソファの上に乗せると『毛利探偵事務所』と書かれた窓の方へと向かい、携帯電話を握りしめた。

新一に掛けるために手にした携帯電話だけれど、いざとなると不安で仕方がない。

今日の朝に園子と話していた言葉が、蘭の脳裏を何度も過った。

『いくら高校生探偵として人気者の工藤君でも、今の状態じゃあ下手したら留年よ!?!』

(・・・電話・・・、しないとマズイよね・・・)

蘭はようやく覚悟を決め、電話帳登録の欄から『工藤新一』という名前を見つけると、TELLのボタンを押した。

コナンのランドセルがバイブを鳴らしたのは、それから10秒後くらい経ってから・・・。

しかしコナンは最初、携帯のバイブ音に全く気付かなかった。

携帯を仕舞っていた場所がランドセルの中だったこともあるが、本人には一切バイブが聞こえておらず、普通に元太達と話しながら歩いていた。

電話が鳴っていることに気が付いたのは、一緒に歩いていた灰原である。

「ちょっと・・・。江戸川君!」

「あ？」

「携帯……。ランドセルの中から鳴ってるけど？」

「えっ？ 携帯……。？……………あゝっ！！」

ようやく取り出した携帯電話は、新一の方の白い携帯。

しかも表示されている名前は『毛利蘭』。

これはかなりマズい……。

（ゲッ！ 蘭からだ……。！ 早めに出ねえとマズい！！）

そう思ったコナンは、鍵を開けたままランドセルを背負うと、途中の横道の入り口の方へと向かう。

それを見て不審に思ったのは、前の方を歩いていた光彦だ。

「あれ？ コナン君、どこ行くんですか？」

「あっ……。その……。お前ら、悪い！ ちょっと電話が掛かってきちゃったから、先に帰っててくれ！ また明日な！！」

そうコナンは皆に言うのと、まるで逃げるかのように横道の奥の方へと走り出していった。

そんなコナンを、灰原は半分無表情のような目で見つめ、小さく溜息を吐く。

（どこまで誤魔化しきれんのかしら……。彼……。）

そんなことを言われているとは露知らず、コナンは近くの公衆電話BOXの中へと駆け込み、素早く蝶ネクタイ型変声機の声を新一にセットする。

電話に出たのは、既に12コール目からだった。

「もしもし?!」

『あつ、もしもし？ 新一？』

「あ、ああ……。俺だけど……。」

『今……。電話よかった？』

「……。あゝ……。別に。大丈夫だけど……。？」

半分あたふたしながら、新一は公衆電話の中で苦笑いを浮かべた。

携帯で話しているのにも関わらず、公衆電話BOXの中で話すだなんて、これこそかなり世間迷惑ように思えたが、一々そちらの方まで意識が向かない。

何せ蘭からの電話が不意打ち過ぎて、今は相手の問い掛けに答えるのが精一杯だ。

『元氣？』

「ああ、まあ……。ボチボチ……。かな？ んで？ どうした

んだ、急に……。」

『あ、ほら……。新一、もうすぐ高校で試験があるじゃない。だから新一、試験どうするのかなあゝって……。』

「えっ！？ いやゝ……。まだ分かんねえよ。事件の方も解決してないしさあ……。」

『そ、そう……。』

少しばかり、新一は『あちやゝ』と、顔に右手を当てた。

考えてみれば、服部の方が既にテストで騒いでいるのだから、こちらの方も試験日が近づいているのは当たり前のことだ。

確かに蘭が言うように、これだけ学校を休んでいるのだから、出来ることなら試験はどうか出てみたいと思う部分はある。

だが現実的に考えた時、それは『不可能』としか言えなかった。一時的に薬で元の姿に戻すにしても、しばらくは身体に負担が掛か

る。

最悪、試験なんて受けられる身体ではなくなってしまうかもしれない。

それに、いくら『名探偵』と周りに言われてはいても、所詮は高校2年生。

授業の休み過ぎは、きっと試験問題にも響いてくる。
それほどいい点が取れるとは思えなかった。

悔しい部分はあるが、留年覚悟で諦めるしかない……。
そう新一は電話で蘭に伝えた。
だが……………。

『でも、警察の方に事情を話して、一旦学校に戻ってきたら？ 出席回数、新一危ないんだし……………』

「いや、それも出来ねえんだ……………。だからかなり厄介な事件で……………」

『分かってるけど、どうにか出来ないの？』

「だから……………。その、色々面倒で……………。手が離せないんだ……………」

どうやら蘭自身は全く踏ん切りが付かなかったらしく、その後も新一に何度も試験に出るように掴み掛ってきた。

そしてその度に、新一は半分重そうな苦笑を浮かべて、蘭を引き離す。

『その事件、警察も一緒なんですよ？ だったら事情を説明して、せめて試験くらい……………』

「それも無理なんだって・・・」

『「無理」「出来ない」じゃなくて、言ってみないと分かんないでしょ?!』

「だから・・・。出来ねえんだって・・・」

そう言い続けている内に、次第に新一コナンの中に、後悔や悔しさが溢れ出だしてきた。

何故、今自分はこうなっているのだろう・・・。

何故、こうも苦しまなくてはならないのだろう・・・。

何故、他のみんなと同じように出来ないのだろう・・・。

そう思う内に、自分自身が徐々に虚しくなってくる。

『本当ならそうしたい』と、望んでいるのに・・・。

そんな新一コナンの事情など、蘭は全く以て知らない。

ただ向こうは、こちらを心配しているだけ・・・。

その後蘭は尚も、新一に掴み掛り続けた。

『ねえ・・・。言ってみてよ、新一』

「だから・・・、出来ねえって・・・」

『でも・・・! 新一あと少しで高三なんだよ!? 今からこんな状態じゃあ・・・。失敗したら、来年も高二に・・・!!』

本気で心配した蘭が、再度新一コナンに声を掛けた。
その瞬間。

「どんな理由付けても、無理なもんは無理なんだよっ!!」

携帯の奥から聞こえてきたその声は、今まで一度も蘭に発したことのない、新一の怒鳴り声だった。

でも何処か・・・。

その声が新一の、苦痛の悲鳴のようにも聞こえた。

突然怒鳴られた蘭は、恐る恐る新一コナンに声を掛ける。

『し・・・、新一・・・?』

「っ!!」

一方の新一は、蘭に怒鳴ってしまったことにハッとし、深く後悔した。

蘭は理由を知らないのだ・・・。

こちらが苦しんでいる理由なんて・・・。

それなのに怒鳴り散らすだなんて・・・。

今蘭が知っているであろう事実だけで、こちらの何を気付けたというのだろう。

それは到底無理な話なのに、感情のままに怒鳴ってしまった。

新一コナンは慌てて、携帯電話に口元を近付け、蘭に謝った。

「わ・・・、悪い! 急に・・・。ごめん・・・。ごめんな、蘭」

『・・・・・・・・・・』

「ら・・・、蘭？」

慌てて謝ってはみたものの、蘭の方からの返事は一切返ってこない。

泣かせてしまっただろうか・・・。

傷つけてしまっただろうか・・・。

嫌な想像だけが、新一^{コナン}の脳裏を過ぎる。

「蘭？・・・・・・・・蘭？」

『・・・・・・・・・・ねえ・・・、新一・・・』

ようやく聞こえてきた蘭の声は、途轍もなく小さく・・・。

そして、今にも泣きだしそうな・・・。

泣いてしまっているかのような声だった。

新一は不安ながらも、再度蘭の名を呼んでみる。

「蘭・・・、その・・・。悪い。ごめん、今は・・・」

『ねえ、新一・・・』

「な・・・、なんだ・・・？」

電話から聞こえてくるか細い声に、新一^{コナン}は慎重に聞き返す。
すると蘭は、静かにこう口にした。

『もう・・・・・・・・・・、会えないなんてこと・・・、ないよね？』

その蘭の問い掛けに、新一^{コナン}は思わず口を閉じた。

会えなくなるなんてことない・・・。

そう言えたら、伝えることが出来たら・・・。

どんなに気持ちが悪くなったことだろう。

きっと蘭も、余計に自分のことなどで苦しむことはないと思う。

でも、そう言える根拠は何処にもない。

薬が見つからなかったら・・・。

灰原が解毒剤を作れなかったら・・・。

元の姿に戻ることは出来ない・・・。

『新一・・・？』

でも・・・。

もしまだ希望を持てるとしたら・・・。

何か一つ・・・。

蘭に伝えることが出来るとしたら・・・。

「蘭・・・」

『えっ・・・？』

「確かに俺は、中々学校にも戻れねえし、オメーにも会えねえ・・・。

でも、これだけは信じてほしい」

新一はそう言って瞼を一旦閉じると、電話の向こうで驚いた顔をしているであろう蘭を思い浮かべながら、口を開いた。

「会える時は・・・、絶対^{ぜってえ}会いにいくから・・・。たとえどんなことがあっても、絶対に・・・」

『!』

携帯の向こうから聞こえてきたその声は、まるで何か硬い決意を決めたかのような。

自分に無理矢理でも言い聞かせ、その通りに生きようと決めているかのような。

そんな声だった。

その新一^{コナン}の言葉に、まるで時が一瞬だけ止まったかのように、蘭は身体を硬直させる。

そんな蘭の頬を、未だ冷たい秋の風がヒラリと吹く。

その風に長く黒い髪を揺らしながら、蘭は目元の涙を拭った。

『・・・・・・・・ホント?』

「・・・・・・・・ああ。本当さ」

『約束・・・・・・・・、してくれる?・・・』

「ああ・・・・・・・・」

『絶対だよ・・・・・・・・?! 絶対だからね!?』

「しつこいよ・・・・・・・・。一回言や分かるって」

『ごめん・・・・・・・・。だって・・・・・・・・。心配なんだもん』

「ったく・・・・・・・・」

『そう言えば、新一。今日学校でね』

その後蘭は何の脈絡もなしに、いきなり最近の高校での出来事を話し始めた。

最初は『なんでいきなり』と、半分ジト目顔で聞いていたのだが、自分の周りのことが知れるその話に、気が付けばかなり聞き入って

しまっていた。

他に今の学校のことを知る方法がないのだ。

かと言って偶の電話の時に蘭にそのことを聞けば、少々蘭を複雑な気持ちにさせてしまうだろう。

せっかくの電話の時に、高校の話だけでお互いの会話時間が削れてしまったら、きっと蘭を寂しくさせてしまう。

だから向こうから話してくれた時以外は、基本的に学校のことは聞けないのだ。

それに今は、学校や周りの話も勿論気になりはするけれど・・・。
それよりももう少し・・・、蘭のこの明るい声を聞いてみたいと思った。

たとえそれが、距離や身体ですらお互いに離れ過ぎている姿だとしても・・・。

10. ? miss you (後書き)

どーも☆

何を話そうかとアタフタしている

コナン&快斗でーす!!

コナン

はい！ 今週は作者が旅行中ということで、俺と快斗の二人が司会という・・・。

(ついでに言わせれば、話す内容が何も浮かばないという・・・)(汗)

今頃K I Dはなにやってんだろぅなあゝ・・・(シミジミ)

快斗

今頃バカンスでもやってんじゃねえの？ 西表なんだし。

(まあ・・・。長袖でないと、日焼けで全身火傷するとは言ってたけど・・・)

由利

そう言えば私、明日誕生日なんだよねえゝ・・・(何気にボソツと笑)

コナン・快斗

(話題見つけた!!)

コナン

へえー・・・。

ゆりっぺ、何歳になるの？

由利

コナン君。

女性に年は聞いちゃいけないんだよ（^^）

コナン

（俺の母さんかよ・・・（――））

快斗

岡本さん、おいくつでしたっけ？

岡本

えっ？

僕、35ですけど・・・？

快斗

と言うことは・・・。

ゆりっぺは岡本さんより1つ年下なんだから・・・。

由利

ぎゃあああああーっ！！！！！！！

もっちのバカアアアアアアー！！

なんで年言うのよおーっ！！！！！！

（バレちゃったじゃない！！（怒涙））

岡本

えっ？（汗）

で、でも・・・。

もう古井さん以外はみんな四捨五入したら4・・・。

由利

まだ私は四捨五入しても30よ!! (キツパリ)

三十路よっ!

三十路っ!!

一緒にしないで!!

岡本

~~~~~!!

快斗

名探偵・・・。

これって放送事故?

(とうか、三十路はウソだろ・・・(――;) )

コナン

さ、さぁ・・・。

かろうじてセーフじゃね? ( ^―^ ; )

岡本

(基準は何処やねん!!)

コナン

さて。

感想等のお返事は、予定通りにできれば8日から返信されるかと思っています!

快斗

是非、ご理解とご了承を・・・。

コナン・快斗・由利・岡本

「「「それでは☆彡」」」

## 11. Appointed day

10月26日 午前11時25分 杯戸シティービル。

依頼の電話から4日後。

コナン、蘭、小五郎の3人は、依頼で言っていたパーティー会場の杯戸シティービルの真ん前に立っていた。

そこにやってきた理由は勿論、あの依頼のため……。

結局月曜日の確認電話で、小五郎はこの依頼を引き受けることになった。

今日の11時30分から、ここの18階で依頼の電話を入れた秘書の原根と、命が狙われているという佐山薬品会社の社長、佐山圭蔵氏と会う予定だ。

ちなみにパーティー会場は、このビルの3階で開かれることになっている。

そのせいもあってなのか、ビルの出入り口には大勢の人達が忙しそうに動いていた。

もうその辺にベンツやリムジンが止まっているのなんて当たり前である。

「すごい車ばかりだね。コナン君……」

「うん。みんな大手の社長さんとかなんだよ。きつと……」

しかし幸いなことに、そこに止めてある車の中に、あの問題の紺色のベンツは見当たらなかった。

単にまだ来ていないという可能性もあるが……。

「うーん！ それにしてもいい天気だね、コナン君」

「う、うん。ちょっと寒いけどね」

腕を伸ばして伸びをしながらそう言う蘭に、コナンは手袋をしたままの手を摩りながらそう返した。

確かに今日は天気はいい。

だが気温はやや低めだ。

おまけに上着の下に着ている服がパーティー用のシャツなどの為、余計に風が通り抜けて寒い。

（あゝあ……。早く暖房の入ってる中に入りてえ……。）

「おい！ いいか？ 今日は俺の依頼で来たんだからなあ？ また

ゴチャゴチャ余計なことすんじゃねえぞ」

「はい」

「うん♪ 分かってるよ、お父さん」

「……。本当に分かってんのか？」

さぞまだ不安そうな表情を浮かべながら、小五郎はジト目で二人を見つめた。

何せそう聞いていい返事は返ってきて、言われた通りにしていたことは一度もなかったのだから、無理もない話だ。

（本当に大丈夫なのかあ？ コイツら……。）

「それよりもおじさん。中に入ろうよ」

「時間もうそんなにないし……。」

「あ？ ああ。へいへい……。」

「何よ。その返事……。」

少々ブツブツと呟いたまま、3人はエレベーターの方へと向かった。18階ともなると、エレベーターがやってくるまで大分掛かる。とついでに、18階に着くのにもかなり掛かる。

（なんでこうお偉いの人達っていうのは、上の方が好きなんだよ・・・）

「おじさん！ エレベーター！」

「置いて行っちゃうよー？」

「ん？ って・・・！ オメーらが先に行ったって意味ねえだろうが！！」

「だから早く！ 閉まっちゃうよー?!」

半分本気で小五郎を扉に閉めそうになりながら、3人はエレベーターで18階へと向かった。

内心、あまりにも自分達が騒ぎ過ぎて恥ずかしくなる。

やがてエレベーターが18階に到着すると、開いたエレベーターの扉の先に、一人の女性の姿が飛び込んできた。

上には抹茶色の上着を着込み、下は黒の清楚な感じのミニスカートを履いている。

ヒールの靴はやや高めだが、それでも微妙に小五郎よりは背丈は低い方だろうか。

髪は黒のショートで、首には少し高そうなネックレスを身に付けている。

まあ一言でまとめてしまえば、小五郎が一発で鼻の下を伸ばしてしまいそうな女性だ。

そしてその予想は大当たりで、小五郎は女性の姿を見るや否や、まるでバナナをひっくり返したような形に目を変え、口をビローンと伸ばした。

「おおっ！ なんてキレイな・・・。足なんか細くてなっがーいし」  
「止めてよ、お父さん！ こんなところでっ・・・。恥ずかしいから・・・。」



「んだよ。だったら他人のフリをすりゃあいいじゃねえか」

「そういう問題じゃないでしょ!!」

呆れた蘭がそう小五郎に怒鳴った、その時。

「あの……。もしかして毛利小五郎様ですか？」

そう言いながら走り寄ってくるその女性に、小五郎は曖昧ながらも頷いた。

すると女性は、清楚な感じの笑みを浮かべて頭を下げる。

「お待ちしておりました。私、先週そちらにお電話をさせて頂きました。秘書の原根です」

「「えっ！」」

「えっ!? あなたが……。! 秘書の方……。ですか? し、しかし……。随分とお若い……」

「ええ。まだ25ではありますが、こちらの秘書を担当しております。あっ……。立ち話なんですから。どうぞこちらへ……」

そう言うと、原根は小五郎達を佐山社長がいる控え室の方へと案内し始めた。

佐山社長の控え室は、18階のやや奥にある一番大きな部屋だ。

部屋の真ん前に立つと、栗野は右手で二回、ドアを『コンッコンッ』とノックする。

「失礼します。佐山社長。毛利さん達がいらっしゃいました」

『ん? ああ! 中に入れてくれ』

「はい。どうぞ……」

(完全に社長室みたいだな……)

中へと入ってみると、部屋は借りているというのに、妙に本物の社長室の中にあるかのような雰囲気があった。

それが社長自身の趣味で置いてある花瓶や絵画のせいなのか、妙に

多くまとめられた書類のせいなのかはさかではないが。

そして部屋の奥の大きな黒いソファに、一人の小太り気味な男性が座り込んでいた。

この男性が、佐山薬品会社の社長、佐山圭蔵だ。

佐山は小五郎達を見るや否や、ソファから立ち上がった。

「いやいや、毛利さん！ これはよくいらっしやいました！ ささ、どうぞ！ どうぞ！」

「ああ！ こりゃあどうも」

「ささっ。娘さんや息子さん達も」

「あっ、すみません」

（息子じゃねえんだけどな……。ハハハ……。）

「原根くん。何か暖かいものを」

「はい」

原根がお茶を入れている間に、ソファに座り込んだコナンは辺りを隈なく見渡す。

一応パーティーの前後期間はここに泊まるというのもあってか、荷物は少し多めだろうか。

そして肝心の脅迫状は、見たところ何処にも置かれていない。

（まだ隠してるのか……。？）

「いや……。嬉しいなあー。私はとても毛利さんの大ファンでして……。弁護士被害者殺人事件。同窓会殺人事件。それに、海辺の殺人未遂事件……。毛利さんの名推理にはいつも驚かされますよ！」

「いやー！ それほどでもないっすよ！ ガッハッハッハッ！！」  
そう言いながら口を大きく開けて笑う小五郎に、コナンと蘭は『ハァー』と溜息を吐く。

その横では、原根は入れたばかりの4人分のお茶を、テーブルの上に並べていた。

「ねえ！　　そう言えば脅迫状って？　　見た感じここにはないみたいだけど」

「コラ！　　コナン！　　それは俺が聞く話でっ・・・」

「おお、そうだった！　　原根くん。例の脅迫状をこっちにもってきてくれ。モノを見せなくては・・・」

「あ、はい」

そう頼まれた原根が向かったのは、部屋の隅に置かれていたダイヤル式の金庫の前。

原根はそこでダイヤルを回し扉を開けると、そこから一枚の紙を取り出し、佐山に手渡した。

「誰か別の人間の手が触れるとマズイと思い、ここにずっと仕舞っていたんですよ」

「はぁー・・・」

「これが・・・、その脅迫状です」

そう言って佐山はそっと小五郎に、問題の脅迫状を手渡した。

## 11. Appointed day (後書き)

どーも☆

無事修学旅行から帰宅した

KIDでーす!!

みんなー!

放送事故とか起こさなかったー?

コナン・快斗

「……うん!」

由利・岡本

「……」

KID

起こしたな? (――)

コナン

「ん、んなわけねえよ!」

快斗

「それよりも修学旅行の土産話してくれよ!」

KID

ああ……。

OK!

（なんか上手いこと流されたような・・・（ーーぐ）

では、今日は1日目の話をしたいと思います♪

リュックを背負ってみて即、その重さに倒れそうになったOZU・  
・  
（おまけに腰にサブバックも付けてたせいで、骨盤に金具が食い込んでかなり痛い！！）

それを背負ったままの電車移動は、邪魔者にしか見られなかったと思う（苦笑）

（自分自身凄い恥ずかしかったし・・・）

学校に着いて出発式をやった後、皆よりも一日早めに出発だった西表班。

用意されていたバスに乗り込み、ようやく羽田へ。

と思ったら・・・。

教員が少々遅刻し、出発がチョイ遅れ・・・（ズベ〜）

羽田に到着した後は、夕飯のお弁当をそこで購入。

そしてそれを買った人は、空き時間でやや遊び放題。

（ここでカニ弁とスタバのマキアートを買ったことに、後々やや後悔・・・（ズンツ））

そして昼くらいに飛行機で那覇空港へ（ビューン（笑））

内心久々の飛行機だったのだけれど、チョイと怖かったです（へへ；）

そして降り立った後は、しばしのお遊びタイムの後、別の飛行機でそのまま石垣空港へ。

着いた頃には外は真っ暗。

おまけに気持ち悪いくらいに蒸し暑い!!

(あの暑さは尋常じゃない・・・(ーー))

そして歩くのかと思ったら、ホテルまでタクシー♪

(ある意味何年ぶりだったろう・・・(笑))

そこでカニ弁を食べて、一日目は終了となりました♪

コナン

「ちょっと待て!! 西表はどうしたんだ!? 西表は!!」

KID

一日目は西表に行ってねえよ?

(二日目のお昼くらいに向こうに着いたから・・・)

快斗

「えっ? 一日目は石垣なの?」

KID

そっちの方が料金安いんだと。

(それでも他のコース班よりも2万オーバーしてるんだけどね・・・

ozu)

今回はこの辺までで・・・。

来週は2日目と3日目の出来事を。  
んで、小説の方は・・・。

コナン

「脅迫状の内容が出てくる感じ？  
・・・だよな？」

快斗

「俺に聞くなよ!! (慌)」

KID

それでは☆彡

## 12. Ransom Note

「これが・・・、その脅迫状です」

佐山から渡された脅迫状を、小五郎は慎重に受け取った。

「ちょっと、拝見しますよ?」

「どうぞ・・・」

紙は三つ折りで、大きさはB4ほど。

中には3行のワープロ文字がプリントされていた。

今月30日に行われるパーティー会場で

貴様を自身の血で真っ赤に染めてやろう

紫電の桜

ややこれまでの脅迫内容と比べてみれば、内容は簡潔にまとめられている。

おまけに、決行された際の状況まで、ある程度把握できそうな内容だ。

そしてやや変わっていたのが、この最後に書かれている4つの文字。

「? 紫むらさき・・・、電でん?」

(いや・・・。これは多分・・・)

「紫電しでんだよ。読み方はな」

「『しでん』・・・?」

「ああ。確か意味は『光が当たって紫色に光ること』だったような・・・。にしてもこの文章、脈絡がおかしいなあ。2行目からいきなりこうなるとは・・・」



ズベツ

そのへボ発言に、コナンは思わずソファーの上で転がった。

誰がこれをそのまま文章として繋げて読むだろうか。

明らかに行変えやマス空けの様子から、これが文章でないことは一目瞭然だろうに……。

見かねたコナンはそつと隣りで、小五郎の耳元に囁くように言った。

「おじさん。この『紫電の桜』は、犯人のハンドルネームだと思うけど?」

「あ? ……ああ……、そういうことな」

(どういうことだと思ったんだよ……)

半分小五郎の発言に呆れたまま、コナンはジト目で小五郎を見つめた。

よく連続的な、または凶悪な犯罪者達は、時折このように自身を名乗ることがある。

コナンが関わった事件で例を言えば『銀ギツネ』や『赤いシャムネコ』『源氏螢』などがそうだ。

ふつと再び文章の方に視線を戻した小五郎は、顎に手を当てながら『フムフム』と頷く。

「しかし……。なんちゅう殺人予告犯らしからぬハンドルネーム……」

「ちよっと、お父さん! 犯人の名前に『らしい』『らしくない』はないでしょ!!」

「あ、ああ……。そうだな……」

蘭にご尤もなことで怒鳴られ、小五郎は苦笑いを浮かべた。

ふっとこの脅迫状を読んでいたコナンは『あれ?』と首をかしげる。書かれている内容がサッパリし過ぎていて、おまけに言葉も簡潔すぎることにやや違和感を覚えはしたのだが、それよりも気になったのは、文章に書かれていない内容。

「ねえねえ。ところでどうして、この脅迫状が社長宛てだって分かったの?」

「「えっ?」」

そのコナンの問い掛けに、佐山と原根は半分驚いたような表情を浮かべた。

そんな二人の反応を見つつ、コナンはさらに口を開く。

「だってこの脅迫状、何処にも佐山社長の名前が書かれてないじゃない。これじゃあ、社長宛てだったかどうか分からないよ? 本当は同じ会社の違う人の可能性もあるし……」

「たっ……、確かに……。どうして分かったんすか?」

それを聞いて文章を読み直しながら、小五郎は二人に聞き返した。その問いに、先に答えたのは秘書の原根だ。

「実は会社の下に、それぞれの社員用のポストがあるんです。これは、その社長のポストの中に入っていましたので……。てっきりこちらは社長宛てかと」

「ああ……。でしたら、間違いないですな……。ほら。分かったらゴチャゴチャ言わずに黙ってろ」

(チッ!)

こちらは特に邪魔になるようなことを言っただつもりはないというのに……。

そんなことを思いながら、コナンは再び脅迫状に視線を下す。

『自身の血で真っ赤に』ということは、犯人は血が出るような犯行を行う気らしい。

一般的に出血するようなものと言えば、ナイフでの刺殺や、鈍器などで殴るなどの撲殺、出血性の毒物による毒殺など、数を挙げればいくらでもある。

海外などでは、射殺というものも出てくるだろう。

だが基本その手のものは、犯人が姿を現して行うものの方が多く、犯人側は捕まえられやすくなる。

特にナイフなどの場合は、誰もいない場所、もしくは暗闇の中で刺そうとしない限り、必ず誰かの目に止まることになる。

正直な話、出血性を要する犯行は、リスクが高いのだ。

青酸カリなどの毒であれば、血を流すことはまずない。

出血性の毒物と言えば苛性ソーダなどが一番に浮かんだが、あれは毒性が青酸カリよりも大幅に下がるものだ。

現に一度事件で起こったが、被害者は病院で一命を取り留められた。

ならばやはり可能性として高いのは、ナイフなどを使った犯行か、あるいは天井からの転落落下などの殺し方だろうか。

（でもあんな小太りの男性を、吊し上げるのは一人じゃ無理だな・・・。かと言って果物くらいのナイフじゃあ、あの体型じゃ心臓まで届かない・・・。まさかパーティー会場なんかで切断をやるとは思えねえし・・・）

「コナン君。さっきから何ブツブツ言ってるの？」

「えっ・・・!？　ううんっ!!　なんでもないっ!　なんでもないな

いよ！」

「そ・・・、そお？」

まだ何か気になっているかのような面持ちで、蘭は首を傾けながら聞き返す。

その問い掛けに、コナンは冷や汗付きの笑顔で何度も頷いた。

そしてその間に、小五郎と佐山の会話はどんどん進んでいく。

「毛利さん、お願いです！ 今日のこのパーティーで、私を守ってください！ 今日はお偉いの方々も沢山いらっしゃっています。そんな方達の目の前で惨劇になるだなんて・・・！ 殺されたとしても御免です！！ どうか！ どうか私のボディーガードになってください！！ お願いします！！！」

そう深々と頭を下げる佐山に、小五郎は背広の襟元を直しながら頷いた。

「分かりました！ お引き受けいたしましょう！！！」

「ほ、本当ですか！？」

「はい！ この毛利小五郎、名探偵の名に懸けて、佐山社長をお守りいたします！！！」

「あっ、ありがとうございます！！！」

佐山は小五郎のその言葉を聞くと、目を輝かせながら何度も頭を下げた。

でも何故だろう・・・。

コナンには何故か、何か在らぬ者の気配があるように感じてならなかった。

## 12. Ransom Note (後書き)

どーも☆

KIDでーす!!

(懐かしいなあ)。この挨拶(笑)

コナン

「今日は修学旅行2・3日目だっけ？」

KID

そうそう。

この日から本格的に、私達は西表に向かいました(^^)

2日目は、朝食がホテルのバイキング♪

でも楽しみにしてた海ぶどうがなかった。oza!!

(『海ぶどう』だと思ってたものはもずくでしたし・・・(笑))

その後は船で1時間くらいかけて西表へ!

着き次第星砂キャンプ場を目指して歩いたのですが、これがまた暑いこと&長いこと!!

着いた早々起こったハプニングは、テントが届いていないという・・・。

(何処で寝たらええねん!! (笑))

そんなこんなでテントが建てられぬまま、皆は昼食後、暑さしのぎの為に海へDASH!!

(ちなみに私はこの日から6日まで、水着のみで過ごしました(^^

― へ；）

そして海に足を入れ、キャーキャー周りが騒いでいる間に、教員から『テント届いたよーっ！！ 一旦戻ってー！！』

・・・（――；）

（また炎天下の元に連れ戻すんかいっ！！（怒））

テントを建てた後は、男性友人4人と一緒に、高級食材でもあるシヤコガイを取ってました♪

（サンゴの中で成長していたので、それを取り出すのに2〜3時間は掛かりました（苦笑））

快斗

「どうやって取ったの？」

K I D

トンカチとクイで岩を削って、それでどうにか10センチくらいのを取った。

（味はサザエとカキを×2みたいな・・・）

その後は夕食を作って、ミーティングを行った後、ヤモリとカエルの鳴き声がうるさい中就寝・・・。

だったのですが！

私は先ほどのメンツと一緒にヤシガニ狩りに行っていました（笑）

（途中、サバトラの猫をヤマネコと見間違えてちよい騒ぎに・・・（苦笑））

3日目はサンゴの残骸で出来た島、バラスヘカヌーで行きました（  
^^）

あそこは日焼けする率がハンパない！

（私の場合、長袖&長ズボン&帽子で隠れてた箇所以外、全部日焼けで黒くなりました（汗））

そしてカヌーの移動中にスコールが30分間も！

さらに『下にはサメが普通にいるからね』というガイドの話にゾッ！

（私、泳げないし（苦笑） ライフジャケットしてるけど、落ちたら死ぬやん・・・（恐怖））

でもいざバラスに着いてみたら、もうきれいな貝殻とサンゴだらけ。いくつかお土産で、サンゴとタカラガイを拾って帰りました♪（^^）

さらに海はお魚オンパレード♪

（これが見られない快斗は正直哀れだと思いました↑（酷））

快斗

「悪かったなあ！！」

コナン

「ところで・・・。魚以外には何かいたのか？」

KID

一応・・・、ウミガメを見たやつが2〜3人いたかな？

（丁度産卵シーズンだそうで）

それと、こちらはウミヘビを生で見ました（笑）

猛毒を持っているとはいえ、初めてみるヘビの種類に思わず大興奮！  
（そして家で飼っているヘビ、琥珀を思い出して少々ホロリ・・・  
（涙））

その後はみんなで50円のパイナップル（沖縄価格）を食べながら、  
帰宅就寝となりました（^^）

さて、来週は最大のハプニングが起こった4日目と、移動の5日目  
をレポートします！

コナン

「小説の方は、俺とおっちゃん和蘭が推理開始！！」

KID

そして今日はサンデーを読み返し！！  
（キッド様っ！！↑（誰・・・））

それでは☆彡



### 13. Outsider

午後12時47分 杯戸シティービル 5階 洋食レストラン。

一旦佐山社長達と別れたコナン達は、5階にある洋食レストラン『ビストランテ』にやってきていた。

気分的には夕食を食べる時に行きたい感じの店だったのだが、何せ佐山社長自身の勧めだったので、今回は仕方ない。

（でもなあゝ……。朝っぱらからランチフルコースって……。一体いくらだよ）

「ねえねえ、お父さん。あの脅迫状……。本当に佐山社長宛てだったのかなあゝ……。」

ふっと、一人サラダを食べていた蘭が、唐突にそう口を開いた。

その問い掛けに、ステーキを口に運ぼうとしていた小五郎の手が止まる。

「なんだ？ 急に……。」

「だって……。確かに脅迫状自体は、佐山社長のポストの中に入ってたよ？ でも……。それ以外に証拠はないし……。」

「まあ……。なあ」

確かに蘭の言ったように、あの脅迫状が本当に佐山社長宛てだったという証拠はない。

普通なら脅迫相手の名前を入れてもおかしくなさげな気もするが、それですらなかった。

そもそも、名前を書かない場合の脅迫状は、基本的に殺したい相手の近くに置かれていることが多い。

しかし今回は、下手をすれば色々な場所に移動してしまうであろう

ポストの中だ。

何故犯人は、そんなところに佐山社長宛ての脅迫状を入れたのだろう……。

「もしかしたら……。犯人は佐山薬品会社で働いていないのかも……」

「えっ？ どうして？ コナン君」

「だって、もし会社の人間が犯人なら、きっとあの脅迫状はポストじゃなくて、社長室のドアの隙間とか……。あるいは部屋の中に直接入れるはずでしょ？ むしろポストに入れたんじゃないあ、今回は秘書の人が見つけて渡してくれたけど、下手をしたら、勝手に社員の誰かがそれを見つけて、社長に渡さずに捨てちゃうかもしれないしね」

「確かに……。捨てられちゃって存在忘れられちゃったら、本も功もないね……」

「なるほど……。つまり犯人は、会社の中を出入りすることが出来ない人間。外部犯になるってわけか……」

犯人を絞り出す要素はそれだけではない。

同じ外部の人間でも、佐山社長と仲の良い人間は白に近くなるだろう。

もしもその人達が犯人なら、佐山社長に会うフリをして、社長室などに脅迫状を入れるのは容易いことだ。

それを行っていないということは、犯人は外部犯であるだけではなく、佐山社長とあまり面識がない人間ということになる。

ここまで絞り込めれば、犯人をある程度は特定できるはずだ。

そうコナンと同じように思っていた小五郎は、自分の名が上がるのではないかと笑みを浮かべていたが、ふっとここで蘭があることを

思い出し、問い掛けた。

「でもお父さん。佐山社長の護衛を任されてるんでしょ？ それなのにどうやって犯人を捜すのよ」

「そうだよ。おじさん、護衛は抜けられないでしょ？」

コナンも蘭と同じようにそう尋ねると、小五郎は右手の人差し指を左右に揺らしながら『チツチツチツ』と言った。

「実は、犯人を炙り出す最高の兵器を、俺は見つけてなあ」

「？ 『最高の兵器』・・・？」

「ああ。参加者は全員、原根さんの参加者リストに名前を書き込まなくてはならない。しかも、佐山薬品会社に勤めている人間は、そのリストの下欄にある『社内関係者』のところを、赤丸で囲まなくてはならないんだよ・・・。それですぐに、犯人の身元は判明するっていう寸法だ！ ガッハッハッハッ！！」

「な・・・、なるほど・・・」

（せこー・・・）

『そんなズルい手はすぐに見つけるんだな』と思ったコナンだったが、考えてみれば、リストというものは普通、会場の入り口に設けられているものだ。

そしてそれを全て記入し終わるのは、大体パーティーが始まって3時間後くらいのはず。

その間、佐山社長が居そうな場所と言ったら・・・。

「ところで、おじさん。その参加者リストって、パーティーが開始してから見られるようになるんでしょ？ 参加した人が自分で、そのリストに名前を書いて、丸を付けたりするんだから」

「ああ。人数確認も兼ねてっから、基本的にパーティーが始まってから、随時確認できるだろうなあ」

「じゃあさあ……。おじさんはいつ、そのリストを見るの？ 多分佐山社長、ずっと会場の中にいると思うよ？ 社長さんなんだし……」

「そ、そうよ！ お父さん！ 護衛を抜け出してリストを確認するなんて、ほとんど出来ないじゃない！」

「うっ……」

かと言って、佐山社長と一緒にそれを確認しに行くわけにもいかない。

正直な話、依頼者にとっては迷惑な話だ。

だが秘書の原根にそれを任せるのも、正直言って気が進まない。

そもそも佐山薬品会社の人間が怪しいと思っている今、今日初めて会った人間を信用する気には到底なれなかった。

場合によってはそちらも犯人で、真犯人とグルになっている可能性だってある。

『これはどうしたものか』と考え込んでいると、ふっとコナンが小五郎に対して、ある意味恐ろしいくらいの満面の笑みを浮かべた。こういう顔をコナンがする時は、何か良からぬことを企んでいる時だ。

流石にコナンと一緒に生活し始めて早1年目になるとしている小五郎には、もう既に知り尽くしていることだった。

恐る恐るコナンにその笑みのワケを尋ねる。

「なんだ？ その顔は……」

「僕も捜査に入ってもいいよね？ 今なら事務所に帰り次第、おじさんにビールとおつまみを持って行くよ。1週間……」

（コイツ……。いつからこう手段を選ばなくなったんだあ？）

その後は少々ハメられたような気がしつつも、結局小五郎は動けそうになかったため、コナンに捜査の許可を下してしまった。

その代わり、少しでもコナンの出した条件内容が変わり・・・。

「ただし！ 事務所でのビール&つまみ運びじゃなくて、俺の分のパーティー料理運びをしろ！！ 護衛中は取りに行けねえから！」  
(そっちかよ・・・)

結局最後は蘭に呆られながら、3人は昼食を済ませた。

### 13. Outsider (後書き)

どーも☆

KIDです!!

さて、今日はハプニング続出だった4日目と、かのかわ鹿川へと向かった5日目をお話しします♪

4日目。

この日は西表で一番の観光スポット、ピナイサーラの滝へと向かいました(^^)

(よくテレビとかにも出てるんで、名前だけ知っている人もいるのでは?)

途中までは車での移動。

(ここまではラクチン♪)

ところがそこから先の移動がキツかった!! (苦)

何せひたすら両手を使って登るような危険な山道をみんなで移動! 最初は会話が賑やかだったものの、途中から水を打ったように静まり返ってしまいました・・・o z u

何回か移動休憩を繰り返し、ようやく滝のてっぺんに到着。

そこがまたかなり高く、正直下を見るのが精一杯・・・。

(アレは小五郎でなくてもビビるわぁー(――;) )

そこで昼食だったのですが、周りの石が滑って大変アブナイ!!

(普通に私を含め、計6人が滑ってました(苦笑))

その後はまたしても急な道を下りて行き、ようやく地上へ。

滝壺のあたりまでやってくると、皆で川に入りながらギャーギャー言っていました（笑）

そしてそうして遊んでいる間に、コース長の男子がコンタクトを落とすという・・・（爆）

快斗

「してこなきゃいいのに・・・」

コナン

「それが最大のハプニング？」

KID

いや・・・。

それはその後の帰り道。

滝壺で記念撮影をし『さあ！ 帰ろう！！』と歩きだした瞬間、一人の長身＆体系が大きい男子が岩で滑り、そのまま岩に右胸をバンッ！！

生徒全員で半分パニックに（驚）

その後、肋骨骨折の疑いがあったものの、救助隊がここには来られないということで、数名がタンカー運びの為にその場残り。

私を含んだそれ以外の人達は、日向のマングローブを突っ切ってキャンプ場へ。

キャンプ場に無事到着したと思いきや、夜に行われたミーティングでは、2件のお金の盗難話も・・・。

(おいおい・・・(――;) )

なんだが嫌な雰囲気のまま、5日目へ。

5日目はバスで港に向かい、そこで船に約1時間ほど乗りました。

(波が強かったのもあり、船はまるでウォータージェットコースターみたいな感じに( ^―^ ; ) )

そうして到着したのが『鹿川』という場所で、ここで2泊した後、最大のスケジュールでもある7時間港まで歩いて移動だったのが・・・。

あそこ！

岩と砂浜しかないやん!!

(大雑把に言う・・・)

おまけに潮の流れのせいで、周りはかなりゴミまみれ・・・OZU  
(さらに私達のテントが完全に崩壊しかかり、みんな気分がLOW  
に・・・(苦笑))

元々キャンプ地ではないというのもあり、この日から川でのシャワーや、土を掘るだけのトイレ生活となりました。

(完全にサバイバル・・・)

ただし一日目はテントと夕食作りだけで全て終了、と言った感じです。

来週は6日目と7日目をお話します♪

でえ・・・。

小説は？



コナン

「・・・・・・・・何にも聞いてねえけど？」

KID

・・・・・・・・・・！

あっ、そっか！

（こっちが話すんだった（汗））

来週は、謎の電話です！

（タイトルで予測できた方は凄い・・・）

KID・快斗・コナン

「「「それでは☆彡」」」

## 14. Shadow

午後12時32分 杯戸シティービル 18階。

コナン達が昼食を取っていたその頃、佐山はあの社長室のような部屋で、一人窓の外を眺めていた。

今日は快晴とまでは言えないが、一応晴れている。

『今日という日にしては不釣り合いだな』と、佐山が微笑した。その時だ。

ヴィイイイン・・・ ヴィイイイン・・・

「ん？ …… 来たか・・・」

バイブを鳴らしたのは、マナーモードにしていた佐山の携帯電話からだ。

佐山はテーブルの上に置いてあった携帯電話を手にとると、画面を開いた。

画面には非通知の文字・・・。

だが佐山には、見慣れた文字でもあった。

（今度は誰だ・・・）

そんなことを思いながら、とりあえず電話に出てみる。

「誰だ？」

『・・・相変わらずこの辺の男達は・・・、電話の開口一番がかな

りキツイわね。危険なオーラが流れ出てるようだわ・・・」  
電話の相手は、妙に色気のあるような言葉遣いの女性からだった。  
だが佐山にとって、彼女はある一点でおいての顔馴染みである。

「なんだ、君か・・・」

『あら。あのおっかない相手が出るとでも思ったの？ 生憎今彼は、  
あの方からの指示で手が離せないの』

「いやいや、そう意味じゃない・・・。今度は誰かと思ったただけだ」  
『そう』

女性はどうかやら煙草を吸いながら話しているらしく、時折妙な間が  
空いては、煙草の煙を吹く時の『ふうー・・・』という息が、微か  
に電話越しから聞こえてきた。

こういうことをしている時は、相手が今は退屈且つ、リラックスし  
ている時のみだ。

それを知っている佐山は、ふっと彼女に今日のことについて尋ねた。

「ところで・・・。今回のパーティーには、見張りは来ないのか？  
一応、アイツが来ることはなつてはいるが『心配でもう一人』  
とは聞いていないからね・・・。その辺のところの情報を、もう少  
しくれないか？」

『・・・応援は来ないわ。今日、そのパーティーにやってくる彼が、  
今回の見張り役よ。この電話は、それをあなたに知らせるために掛  
けたの。忙しい部下達に代わって・・・』

「上司は暇を持て余し・・・か・・・。でもわざわざ？ このくら  
いの内容なら、別にメールでも良かったんじゃないのか？」

そう佐山が聞き返すと、女性は何を思ったのか、突然不気味に『フ  
フ・・・』と微笑んだ。

その笑い声に、少々佐山も眉を動かす。

「・・・・・・・・どうした？」

『いいえ……。でも電話だと、下手をしたら彼に気付かれることになっていたかもしれないって、思っただけよ。あなたが今日相手にしていたあの子は、侮れないから……。』

「ん？　・・・・・・・・ああ……。例の眼鏡の子か……。君も、随分前に散々な目に遭ったそうだね」

『まあ……。あの子に傷を負わせられたわけではないけど……。』

そう言いながらまた微笑を浮かべる彼女に、佐山は少々不安げな表情を一瞬浮かべながら、ふっとこんなことを口にした。

「しかし、アレの始末を行う十脅迫状が届くだなんて……。しかもそれによって、まさか彼の捜査も同時に行うことになるとはなあ……。流石に仕事が2重3重ともなると、ボロが出てしまうんじゃないか？」

『それになるべく無くすのも、あなたの役目よ。じゃあ、仕事が終わった頃合いに、また掛けるわ……。』

女性はそう言い終えると、電話をブツリと切ってしまった。

最後くらいはアドバイスのようなものが欲しかったというのに、少々佐山としては複雑だ。

「やれやれ……」

そう言いながら携帯を再びテーブルの上に置くと、いつからそこにいたのか、秘書の原根が入り口の扉に背を向けるような形で、真っ直ぐに佐山を見つめていた。

その瞳は瞬きもしなければ、動こうともしない。

そんな原根を見て『そう言えばここにも、冷たい女がいたな』と、

佐山は微妙に苦笑した。

何はともあれ、上からの指示だ。

ある程度はやり通さなくてはならない。

佐山は原根の方に視線を向けると、先程の電話の内容も含め、口を開いた。

「伝言役からの命令だが……。仲間是一人だけ、見張り役としてやってくるのみ。仕事は全部で2つだが、厄介事を含めれば3つある。そのどれにも、ボロを出さぬようにとのことだ。お前も、失敗しくじるなよ」

「はい。佐山社長」

まるで機械のように、無表情のまま返事を返す原根。

その原根の返事を聞いた佐山は、今度は氷のような冷たい視線で、再び窓の外を眺め始めた。

まるで、この晴れている空が憎たらしいと、言わんばかりに……。

## 14. Shadow (後書き)

どーも☆

KIDです!!

今日は鹿川最終日の6日目と、7時間歩行の7日目をお話します♪

6日目。

鹿川での丸一日生活が始まり、この日は時計を一切として確認しないで、班で勝手に朝・昼・夕飯を作るということに。

しかしっ!!

何故か大雑把・ヤンキー・小食系・リーダー女子が揃っていた私の班は、この時点から分かりますけど、全員バラバラ・・・(ー；)  
(ちなみに私は・・・、一応普通人だったということで(苦笑))

朝は皆が持っていた非常食(カロリー○イトとか○イジョイとか)で、終了することに・・・。

しかし非常食を大量に持ってきていなかった私は、一人コーンスープの素を舐めていました・・・(涙)

(虚しい・・・(／；))

その後はリーフ(サンゴ礁)の上を歩いて遊んでいたのですが、その時前方からウツボがやってきまして・・・(汗)

快斗

「ウツボ？」

コナン

「ヘビと魚×2みたいな魚・・・だよな？」

KID

そう。

んでそれが、いきなり口を開けたまま体当たりしてきまして・・・。

軽く靴が破けました（恐っ！！）

その後も似たようなことが3回ほどありまして・・・。

（一体こっちが何したっちゅうねん！！（爆））

ちなみにその日の夜は、班の一人が釣ってきた魚でどうにか満つ・・。

快斗

「ぎゃあああああああーっ！！！！！！それは言わないでええええーっ！！！」

コナン

「うるせえよ！！（怒）」

KID

オホンッ！

その後はバラスでの怪我人の話になったのですが、どうも石垣病院での検査の結果、肋骨には異常がなかったらしく（アレ？）

逆に右腕が折れているかもしれないという方向に。

（あの騒ぎはなんだったの？（――））

その後はミニミニキャンプファイヤーを行っただけですが……。  
風で火の粉が飛んで、とんだ災難に（笑）

7日目は、9時からテントを畳んで、徒歩開始！

企画としては、7時間歩いて港を目指し、そこから船で星砂の方に向かい、途中温泉で風呂に入った後、地元の方達が用意してくれたバーベキューを食べて終了♪

と言った感じだったのですが……。

過酷すぎ！！

まず最初の山に登る時点から、もう道じゃない！！（驚）

岩がゴロゴロの川を突っ切って、1メートルほど断切されている道を通って、丸太が足元や頭上に倒れていてもお構いなしに進むという……。

（途中、股の辺りまで水に浸かる箇所もありました）

そして山を越えたかと思えば、マングローブを突っ切る羽目に……。  
しかも満潮だったのもあり、ほぼ全員が腰まで水に浸かっていました。

（一人思いつき泥に足を取られて、後ろにひっくり返ったりして  
ましたし（――））

何より全員、サブバックとリュックサックを背負ったままだし……。



コナン・快斗

「「えっ!?! 背負ったまま!?!」」

KID

イエス!!

その後は海岸沿いに海を歩いて、ようやく着いたと思ったら、今度は小さな山を登っていくことに……。

さらにその途中一人がハチに刺され、一時パニックに(@|@;) )

その後は山を下ってまたマングローブ&海を突っ切り(疲)

一人船に乗っていた教員は、その頃野生のジンベエザメの子供を見てはしゃいでいたそうで……。

(コノヤロ〜!!>、へ'<)

どうにか港に着いた時の快感は忘れられないです♪

(さらにみんなで、自動販売機の炭酸飲料水を全て『品切れ』にさせました(笑))

その後は船&バス移動で温泉へ。

1時間ほどこしか時間がなかったので、皆で3〜4回ほどシャンプー&ソープを堪能(笑)

こちらはかなり洗顔切れにさせてしまいました……(へーへ;) )  
(スミマセ〜ン!!)

その後は皆でワイワイガヤガヤ騒ぎながらバーベキュー♪

(焼きそばがなんだかんで一番うまかったかも……? (……))

途中ピナイサーラの怪我人とも再会。

なんと、腕は肉離れだったことを知らされ、若干男性群達に『何処かで骨折れ!!』とからかわれていました(笑)

(ああいうのって、助かっても損なの？(苦笑))

コナン

「ところで寝た場所は？」

KID

あそこ廃墟の民宿だから、皆そこで寝た。

(クラーが使えない部屋がほとんどだったけど・・・)

さて、来週は・・・？

コナン

「とうとうパーティーが始まり、おっちゃん軽く暴走・・・(苦笑)

」

KID

ハハハ・・・。

こちらは最終日をお話します♪

快斗

「それでは☆彡」

KID・コナン

「「一人で言うな!!!」(怒)」

## 15. Holding a meeting

午後6時21分 杯戸シティービル 3階 パーティー会場。

昼食の食休みも済み、コナン・蘭・小五郎の3人は、一旦パーティー会場の入り口付近へと向かった。

会場の出入り口でもある扉の奥からは、何やら賑やかな声と美しい楽器による音色が流れている。

どうやら、もう既に大勢の招待客がやってきているようだ。

小五郎はコナン達を入り口付近にまで連れていくと、一旦腕時計で時間を確認し、天井の方を親指で示した。

「いいか？ 俺は今から、上の階にいる佐山社長の護衛をしてくる・・・。お前ら二人はパーティー会場の中に居ろ。くれぐれも、変な行動なんか取るんじゃないぞ」

「『ついでに関係者リストもちよくちよく見てこい』でしょ？」

コナンが半分ニヤニヤしながらそう尋ねると、小五郎は渋い表情を浮かべ、コナンをジト目で睨み返した。

それでもコナンは普通に満面の笑みを浮かべている。

「まったく・・・。なんでお前ら二人に俺が頼まねえと・・・」

「まあまあ。お父さん、あとは任せて。私、コナン君とちゃんとやるから」

今度は蘭まで、小五郎に満面の笑みを浮かべながらそう言った。そんな二人の姿を見て、小五郎はジト目のままブツブツと文句を呟きつつ、その場を後にする。

「さてと……。お父さんもエレベーターホールに行ったことだし……」

「中に入ろっか」

二人はそんな軽い会話で、パーティー会場の出入り口扉を開けてみる。

そしてその光景に驚かされた。

（うわーっ!!）

（スゲー人……）

パーティー会場の中には、ゆうに300人を超えるかのような招待客で賑わっていた。

中には蘭の知る著名人や有名人、大企業の社長さん達なども集まり、かなり盛大なパーティーと化している。

（おいおい……。これ全員リストで調べるのかぁ？）

これは少々、参加者リストのページをめくるだけでも一苦労と言った感じだろうか。

今更ながら、コナンは容疑者候補の数を見て溜息を吐いた。

一方の蘭の方も、この招待客の数にはかなり驚かされたようで、しばし辺りをキョロキョロと見渡し、逸れぬようコナンを連れて、会場内の隅の方へと移動した。

そこに立てば会場内全体がある程度見渡せるので、一応小五郎と佐山社長を見つけることはできるだろうが……。

「お父さん……。こんなに人が多いのに、犯人見つけられるのかなぁ……」

「むしろ、殺す側もターゲットを見つけ難いし、殺そうとして動けば、絶対に誰かに犯行を見られるね」

「それじゃあ……。犯人は捕まるの承知の上で、佐山社長を殺害しに来るってこと？」

「たぶん……」

脅迫状まで出しているということは、おそらくそういうことなのだろう。

だとすれば、犯人は佐山社長に強い恨みのある人物ということになる。

（元太が一応言ってた『金田』っていう人は……。まあ……。この推理でいけば白だな）

「でもお父さん……。この人混みの中で護衛もやるだなんて……。大丈夫かなあ……。」

（いや……。駄目だろ……。）

まるでその蘭の不安が移ったかのように、コナンはパーティー会場内2回目の重い溜息を吐いた。

午後6時23分 18階 控え室。

その頃、エレベーターで18階へと到着した小五郎は、佐山社長が泊まっている部屋のドアをノックしていた。

ノックをしてしばらく経たぬうちに、原根の『少々お待ちください』という返事が通路に響く。

この廊下はかなり声や音が反響するので、正直な話、部屋の中で小声で話してでもない限り、どうしても外の人間からは丸聞こえになってしまうのだ。

もつとも、今回は依頼者の佐山社長と原根以外、この階には泊まっていないが……。

しばし待っている間に、小五郎は自分の後ろにあった窓ガラスの方

に視線を向ける。

外はすっかり夜の景色となっていて、少々小五郎の立ち位置が遠巻きだったこともあり、窓ガラスには小五郎の今の姿がハッキリと映り込んでいた。

小五郎は半分窓ガラスを鏡のように見ながら、パーティー用として着てきた一張羅や蝶ネクタイ、髪型などを整える。

別に大きく乱れていたわけではなかったのだが、やはり社長の護衛を行う仕事となると、それなりの格好や髪型にしなければと、妙なところに気合が入ってしまう。

髪型を直してしばらく経った頃、ようやくパーティー用の服に身を包んだ佐山社長と原根が、部屋から出てきた。

佐山社長は普通に黒いスーツ姿だったが、原根の方は足や胸がかなり大胆に出ているエレガントドレス。

それも真っ赤なやつときたら、小五郎の目はもう釘づけた。

（オオーッ！！　こりやあなかなか・・・）

「いやあ、毛利さん。すみません、わざわざお待たせしてしまってます。」

「あ・・・？　・・・ああ！　いいですよ。とんでもない」

「じゃあ・・・、行きましかうか。原根君、先頭を頼むよ」

「はい。佐山社長」

三人は半分事件の話などで盛り上がりつつ、エレベーターホールの方へと向かった。

その三人の後ろで、あの暴走ベントの張本人が見つめていることに気付かずに・・・。

## 15. Holding a meeting(後書き)

どーも☆

KIDです!!

このところ夏なのに、なんかあんまり夏らしくないですね・・・。  
(半分夏休みが終わったように感じる(涙))

コナン

「ハハハ・・・。俺は暑いのが苦手だからなあ・・・」

快斗

「俺も・・・。夏になるとさあ、みんな『海行こうぜ!』って言うんだよ」

コナン・KID

「・・・。。ああ! そういうことか(ね)」

→(魚のことを思い出すのに時間が掛かった二人・・・)

KID

さて、こちらはいよいよ修学旅行レポ最後になりまーす♪  
(なんだかんだで4話くらい書いてる?)

最終日はのっけからハプニングがありまして・・・。

コナン

「!! 今度はどうしたっ!？」

KID

いや……。

泡盛飲んだやつがいて、しばし泥酔してたんです……はい……。

(私じゃないですよ!？ 他クラスの男子生徒が……)

大体修学旅行の最終日とかによくあるんですよえ。

『何処かで飲んだら即帰り!!』なんて言われると、最終日に一気に飲むやつが……。

ちなみに彼はしばし歩けず、がたいのいい男子生徒にずっと背負われていました。

(体がめっちゃくちゃ細く軽かったのが、一番の救いだったかも……)

そんなハプニングの中、こちらは民宿からしばし徒歩で港へ向かいました。

そこから再び石垣へ。

この日の為に聴かずにいたウォークマンを取り出して電源を入れてみたら、まだ電池が3つもあって(^^)(ラッキー♪)

SUPER LIGHTの『海鳴り』やGARNET CROWの『水のない晴れた海へ』『君という光』などを聴いていました(和)(やっぱり海の曲は、船の上だと雰囲気違いますね)

その後は石垣空港までバスで移動!

その空港で、軽く2時間ほどお土産タイムでした♪



（なんだかんで一番の楽しみだったやつ!!（笑））

本当は昼食も買わないといけなかったんですけど、こちらは非常食のソ○ジョイ1本で済ませました（へーへ；）

コナン

「少な・・・っ!!」

快斗

「もっと食べよ」

KID

食えないんだよ!!

（朝と昼はほとんど食べない人だから!!）

そしてその空港で、地ビールと黒を購入!

（先生に頼んで買ってもらいました♪ ちなみに父のお土産（へへ））

その後はお土産商店街なる場所に向かい、沖縄のミンサー編みと呼ばれる伝統的な織物のポーチを二つ購入。

色は黄色と青で、こちらは祖父祖母用。

ちなみに母は、キャンプ中に若干大量に拾い過ぎた貝殻とサンゴを土産に（苦笑）

その後、少々父のお土産が地ビールだけというのもなんだったので、ミンサー編みのストラップも購入。

そして2000円で買ったヤモリのTシャツ以外何も自分のものを  
買っていない私は、少々アクセサリー類に意識が向き、周りを物色  
！（怪）

そこで目が止まったのは、アコヤ貝の貝殻を色んな形に切り、それ  
を磨いて作ったネックレスやブレスレットなどを扱っているお店。  
特にワシの形に作られていたペンダントが、どうにも頭から離れず・  
。。。

しかし、値段は割引で2640円。

そして残金は1240円・・・。

どうやっても足らん！！

そこでこちらは仕方なく、同じワシの形のストラップを購入。

（ちなみに値段は1000円）

ところがその後、2000円でビーズが少しだけ付いている紐を売っ  
ている店を発見！

そこで思わずその紐を購入し、それらを空港でチョキチョキゴソゴ  
ソやること約1分。

ペンダントにしちゃいました♪（^^）

（思わずハサミを貸してくれた男子友達に自慢（苦笑））

その後は飛行機で那覇空港↓そこから羽田空港に向かったのですが・  
。。。

そこでもまた思わぬアクシデントが・・・。

コナン

「どしたあ？」

K I D

他人事だな・・・。

いやね・・・。

ついつい飛行機の中で音楽を聴きながら寝てたら、何故か『銀翼』のキッドとコナンがコックピットの中で大慌てしてる場面が出てきて『なんだ？ この夢』と思って起きてみたら、消えてたはずのシートベルト装着を教えるライトが、何故か光ってて・・・。

空港にもう着くのかと思ったら、その後しばし大きく揺れてさあ。しかも一回思いつきり下に向かって落ちてたし（恐怖）

なんでも低気圧に巻き込まれたかららしいんだけど、その後機長までアナウンスをやるものだから、周りの不安状況が尋常じゃなく・・・。

（しかも乗客の抗議に遇うのが嫌だったのか、機長のアナウンス内容は上手い感じに機内サービスやグッズに流れたし（苦笑））

そんなこんなで恐怖のまま、飛行機から無事到着いたしました♪  
ちゃんちゃん♪

コナン

「なんか前兆みてえで怖い夢だな・・・（汗）でもあの時は、本当に危なかったよなあ、キッド？」

快斗

「オメーはまだいいよ！俺なんてしばらく腕動かなかったんだから！！  
利き手じゃないだけ・・・、マシだったけど・・・」

K I D

ハハハ・・・。

（ひょっとしたら、この後のことも後書きで書くかもしれませんが。  
まだ考え中ですが・・・）

さて、来週は？

コナン

「俺がリスト確認！ ついでにヤバイ相手とようやく遭遇」

K I D

予定です♪

そしてこちらは私情ですが・・・。

A Z U K I 七さん！

☆一日早めでH a p p y B i r t h d a y ！！☆

七

「ありがとう！」

コナン・快斗

「「それでは☆シ」」

## 16. List

午後6時32分 杯戸シティービル 3階 パーティー会場。

コナンと蘭がパーティー会場に入って数分後。

小五郎は佐山社長と原根を連れて、パーティー会場の中の方へと向かっていった。

佐山社長が会場入りした瞬間、周りの参加者達からはアツい拍手の音が鳴り響く。

そしてその音が、蘭達に小五郎達が入ってきたことを知らせるサインとなった。

「お父さん達、来たみたいね」

「うん……。僕、出入り口のお兄さん達から、参加者リスト借りてくるよ」

「あつ、気を付けてね。逸れないように。それから……」

「分かってるよ、蘭姉ちゃん。『犯人に気付かれないように』でしよ？ すぐ戻るから」

コナンは蘭にそう言い残して、参加者リストをもらいに出入り口の方へと向かっていった。

その間に、佐山社長はパーティーのスピーチのため、用意されていた壇上の上へと上がる。

ここにきてようやく、小五郎の姿が蘭の目にも見える位置となった。

「それでは、本日この盛大なるパーティーをひらいてくれました！

佐山薬品会社社長、佐山圭蔵さんからのご挨拶です！ どうぞ！  
！」

司会が佐山社長の方に手を向けると、佐山は軽く一礼をした後、マ

イクの方へと向かった。

その隣りには秘書の原根。

そして佐山の後ろには、護衛を頼まれている小五郎が、辺りに目を光らせていた。

「皆さん。本日は私の創立30周年記念パーティーにお越しくださり、誠にありがとうございます！ まあ・・・、中には招かれざる客もいるようですが・・・」

（えっ・・・？ それ言うんっすか？）

その佐山の発言に、小五郎はしばし驚いたのだが、それよりも驚いていたのはパーティーの招待客達の方だ。

一体今日何が起こるのかだなんて、彼らは全く以て知らない。

少々そんな佐山の発言に困惑していると、佐山は突然『ガッハッハッ！』と笑い出し、再び口を開いた。

「なあに！ 今夜はあの有名な名探偵。『眠りの小五郎』こと毛利小五郎氏も、このパーティー会場にやってきました。事件なんて、名探偵が居れば起こりっこありませんよ。ですよね？ 毛利さん」

「えっ？！ あ、ああ・・・。勿論です！！」

（お父さん・・・（ー；））

「ですから皆さん！ 今夜は思う存分、私の用意したこのパーティーを堪能していただくさい！！ 皆さんで、創立30周年を祝うこととしましょう！！」

こうして佐山のスピーチは、最後は招待客達の笑い声と拍手で幕を閉じた。

一方その頃、コナンは出入り口の受け付け員のところへ向かい、現段階での参加者リストを確認していた。

いや正確には、これから確認するところである。

「ねえねえ、お兄さん」

「ん？ なんだい？ ボウヤ」

「僕、小五郎のおじさんに『参加者リストをもらってこい』って頼まれたんだ。だからその参加者リスト、少しだけ見せてくれない？」

「ああ。それなら、こっちのリストは持っていってもいいよ」

と、何やら意外な答えが帰ってきて、コナンは一瞬『えっ？』と聞き返した。

「いいの？ 他にも参加者の人達が来ちゃったら、これにサイン出来なくなっちゃうよ？」

「それなら大丈夫。実は人数が思いの外多くてねえ……。これは1冊目で、今は2冊目に名前を書いてもらってるから、いいんだ」

（ああ……。そういうことか……。）

その説明でようやく納得したコナンは、手渡されたリストノートを持ちながらふっと、2冊目の方にも視線を向けてみる。

2冊目の方は、まだ見開きで2ページの半分程しか名前が書かれていない。

しかも全員、こちらは佐山薬品会社の社員だ。

（可能性は薄い……。か……。）

「あっ、でも。毛利さんに見せ終わったら返してね」

「うん。ありがとう！」

コナンは最後に受け付け男性に一礼をすると、1冊目のリストノートを両手で抱え、パーティー会場の中へと戻る。

中は相変わらずの人の数だったが、蘭を見つけるのにそう時間は掛からなかった。

何故なら、出入り口でコナンを見つけた蘭が、コナンの方に向かって右手を挙げながら『こっちよー！　こっちいー！』と叫んでいたからである。

コナンは蘭を見つけると、すぐさま蘭のいる隅の方へと、まるで人の足の間を縫うかのように走りながら向かっていった。

そうして隅の方に到着すると、コナンは即リストをペラペラと捲りながら、脅迫状を送りつけた犯人の対象となる人物を探す。

その隣りで、蘭も同じく目を光らせる。

「結構……、少ない？」

「うん……。思ったよりは多くないかも……」

やがて全てのページに書かれていた名前を確認し終わったコナンは『パタンッ』とリストノートを閉じた。

「どうだった？」

「……34人……。2冊目の方はまだシロの人達の名前しか書かれていなかったから、今のところは34人」

「えっ？　大分減ったじゃない！　こんなに人がいるのに……」

「薬品会社自体も大きいし、いくつか別の場所にも工場があるから、その人達の大半がやってくればこうなるよ」

「じゃあ、どうにか犯人割り出せそう？」

「ううん……。まだ誰が脅迫<sup>アレ</sup>状を送り付けたのかは、全然特定出来ないよ。ましてや34人もいたら……。まだ人数が多い」

「そ……。そうだよね……」

とりあえずこのことは、多かれ少なかれ小五郎に伝えた方がいいだろう。

そもそもこの『参加者リストから割り出す』というアイデアを考えたのはあの小五郎だ。



それにもかすれば、案外小五郎向こうが何かに気が付くかもしれない。

（とりあえず・・・。報告しといた方がいいか・・・）

「どうしよう、コナン君・・・。この後・・・」

「ん？・・・とりあえずおじさんに報告しようよ。おじさんは？」

「あそこ。今スピーチが終わって、壇上から降りるところ」

そう言って蘭が指差す先には、これから階段を降りようとしている佐山の後ろに付き、辺りに目を光らせている小五郎の姿があった。しかしあれでは、ある意味犯人にもバレバレのような気がする。

（もう少し一般人らしい目付きで護衛できねえのかよ・・・。俺が犯人だったら丸分かりだぜ？ おっちゃん・・・）

「あっ！ お父さん！ こっち！ こっちいー！！」

（そして蘭も堂々と呼ぶなよ・・・）

半分そんな父娘おやこに呆れていたコナンは、手に持っていたままのリストノートペラペラとめくる。

そしてその時、一瞬誰かの名前が、コナンの目にピタリと留まった。

（ん？！・・・今・・・、ちよつとマズイ奴の名前がなかったか！？）

『頼むから嘘であってほしい』と願いつつページをその名前の方に戻してみたのだが、残念ながら嘘ではなかった。

そのページの真ん中辺りの行にはっきりと、殴り書きで『金田 悟』と書かれていたのだ。

その名前を見た瞬間、コナンはただただ顔を青褪める。

（ゲッ！！ マジかよ・・・）

この時コナンは即座に、この男とは会わないようにしようと決めた。

## 16. List (後書き)

どーも☆

洋菓子よりも和菓子が大好きな

KIDでーす!!

基本朝ごはんをあまり食べられない私。

その為朝食がほとんど和菓子です( ^ | ^ ; )

(道明寺とか、すあまとか、柏餅とか・・・)

コナン

「ちゃんとパンとか食べよ(呆)」

KID

食いきれないんだよ!!

(夕食以外は完全な小食なんで・・・(汗))

さて、本日は修学旅行の帰宅日の話をしようかと・・・。

(あっちはあっちでかなり大変だったんです! なんだかんだで修学旅行よりも疲れ果てました!(笑))

快斗

「何があったの?」

KID

実は空港に着いた時、父親からメールが届いたんですよ。  
内容は

『会社帰りに東京駅に寄るから、東京駅で落ち合わないか？』  
というもの・・・。

それで東京駅に向かうことになったんだけど、それがまた大変で・・・。

まだ『空港』という場所もほとんど行ったことがないまま、東京駅  
行きのバスを探してあちらこちらフラフラ・・・。

途中2回もバス案内の人に聞いて、ようやく東京駅行きのバス停へ。

そこで待つこと20分。

ようやくバスが到着して乗ろうと思ったら、3000円の券を買わ  
んといかんっていう・・・orz

一応定期には3000以上入っていたけど、持ち合わせていたお金  
はたったの40円・・・（――；）  
仕方なくモノレールの方に移ることにして、その場を離れたのです  
が・・・。

父親と連絡しようと思ったら、携帯の電池がもうあと一本！！  
（待ち受け画面のキッド様も、幻覚で『充電してください』的な表  
情に・・・（笑））

さらに父親の携帯は、機種の子供じいちゃんも電波が悪く聞き取りずら  
いので、おそらくこの事情でも長電話になってしまおうと判断！

止む無く母親に電話をして、代わりに伝えてもらおうようにしました。  
・・・ズンッ（――；）

そしてモノレールに乗って、椅子に座ってみれば、周りからは『な  
んだ？ この大きな荷物を持つて客は・・・』と、言いたげな目  
を向けられ、さらいズンッ（落）

その後電車に乗って東京駅へ向かってみれば、もう電車込み過ぎ！！  
ホンマに帰宅ラッシュってクライ！！

七さんじゃないけど、人混みってホンマに嫌っ！！！！（笑）

長く電車に乗ってたわけじゃなかったけれど、かなりの圧迫感がありました。

（荷物も含めて（苦笑））

その後東京駅で降りた後、地下で父を待っていたのですが・・・。

何処や？！

ここ！！（爆）

（東京駅もあまり慣れとらんです。私・・・）

その後は目に付くものを片っ端からメールに書き込んで、父に送り付け（笑）

そこでもうにか合流し、さらに自宅に近い方の駅で母と合流。

その後は3人でデニー○で夕食を食べて、私の修学旅行は終了しました〜♪

コナン

「終わった後も散々だったんだ・・・」

KID

イエス！！（爆）

さて、来週は？

コナン

「容疑者候補みたいなの……？ 関係者がとりあえず出てくる予定！」

快斗

「そして今週から俺祭り♪（^^）」

KID・コナン

「『あくまで『キッド祭り』だろ！』」

KID

それでは☆彡

## 17. Person

コナンが『金田悟』の名前を見て顔を青褪めていると、丁度壇上から降りてきた佐山と原根を連れて、小五郎がやってきた。

蘭は早速やってきた小五郎に対し、容疑者が約34人もいることを伝える。

するとそれを聞いていた佐山は、頭に『?』マークを浮かべながら首を傾げた。

「どうして……。34人だど？」

「今回の犯人は、佐山社長の部屋ではなく、ポストの方に脅迫状を入れていた……。つまり！ 犯人は佐山薬品会社の社員ではない可能性が高いと、私は推理しました！」

（俺だよ！ 俺！ その推理やったのは……）

コナンはジト目と言うよりは睨み目で、小五郎をジッと見つめながら、その発言を胸中で訂正した。

もっともこれは、ほぼ誰にも届かぬ訂正になってしまっているが……。

「な、なるほど……。それでリストを確認したら、34人もいたと……」

「ええ……。ああ、まあ……。娘が言うには……。コナン。そのリスト、俺にも見せてくれ」

「はい……」

「んだよ……。そのドスの利いた『はい』は……。ガキらしく返事をしろっての」

（誰がやるかっ!）

その言葉に思わず『ケッ!』と言ってみても、小五郎自身は全く聞

こえていなかったようで、普通に『名探偵』を気取りながら話を続けていた。

「このリストに載っている34人の人物からさらに絞っていけば、犯人を特定することも可能ですよ」

「おおーっ！ 期待していますよ、毛利さん」

「なあーに、こんなこと！ この名探偵毛利小五郎に任せていただければ、お茶の子さいさい♪ への河童ですよ！ ガッハッハッハッ！」

（恥ずかしい・・・）

（見てらんねえ・・・）

「それでは早速、名簿確認を・・・」  
と、小五郎が参加者リストを開こうとした。  
その時。

「あっ、いた！ どうも！！ 佐山社長！」

「お久しぶりです！」

「ん？」

（誰だ・・・？）

ふっとその声の聞こえてきた方に視線を向けてみれば、そこには男女合わせて4人の人達が、佐山の方に手を振っていた。

その姿を見て、佐山も『おおーっ！』と言いながら、その手を振り返す。

「いやあー・・・。みんな久しぶりだねえー。おお、そうだ！ ついでだから、彼らのことを紹介しますよ。毛利さん」

そう言って佐山は、一人ひとりやってきた4人の紹介を始めた。

まず最初に紹介したのは、元内科医院で薬のアドバイスなどを提供している柳川貴彦。やながわたかひこ

現在35歳で、今は主に米花町にある佐山薬品会社の事務所管理を担当しているのだという。

次に紹介されたのは、随分昔に亡くなった佐山の友人夫婦の息子である加藤光。かとうひかる

年齢はまだ24歳で、ここにいる男性メンバーの中では一番若い。佐山薬品会社では、時々アルバイトのような要領で、薬のカプセルなどを作っている。

3番目に紹介されたのは、4人の中で唯一の女性職員の石神奏恵。いしがみ かなえ年齢は今年で26歳。

彼女は佐山薬品会社に兄妹で勤めていて、主にそこで作った新薬に異常がないかどうかを調べているのだという。

そして最後は、佐山の大学時代からの親友でもある闇沼紅史。やみぬま あかし年齢は当然、佐山と同じ46歳。

昔からの大親友というのもあり、佐山のパーティーなどにはよく顔を出す人間だ。

仕事は佐山薬品会社ではなく、昔から石好きだったのもあって、やや大きめの宝石管理の仕事に就いているのだそうだ。

「ほおー……。皆さん、色々ですなあー……。ああー！　こちらも紹介します。娘の蘭」

「ど、どうも……。」

「それからこっちが、居候の江戸川コナンです」

（だから取れよ！　『居候』は！！）

「あの……。『毛利さん』って、本物の毛利小五郎さんあんですよね？」

半分興奮が抑えられないかのような声で、柳川が小五郎にそう尋ねた。



尋ねられた小五郎は、シャツの襟の部分を両手で引いて直しながら、ややキメ顔で頷く。

「ええ！ もちろん」

「わぁ・・・！ 信じられない・・・。まさか本物にここで会えるだなんて・・・」

（中身ただのおっさんだけどな・・・）

「へっくしょん！！」

「えっ？ やだ・・・。お父さん、風邪？」

「いや・・・。誰かが俺を呼んでいる・・・」

（『嫌味を言ってる』の間違いだろ・・・（ーー））

「ところで・・・。君達はさっきまで一体何をしていたんだね？」

そう佐山が訪ねると、石神は自分達の左隣りにあったテーブルの方を指差した。

「あそこです。あそこのゲームを、みんなで一緒に」

そう言われた方を見てみれば、そこにはチェスやトランプと言った、いわゆる『ボードゲーム』が数多く置かれていた。

佐山によると、どうもお酒を片手に遊びの一環として置いたものなのだという。

「でも加藤はすぐにチェックメイトにしちまうし、闇沼さんはエースのフオーカードを出すし・・・。みんな強いんですよ」

「それってただ単に・・・」

「ああ。柳川さんがゲームに弱いだけなんじゃないですか？」

「んだとっ！？」

そんな参加者達の会話に、しばしコナン達は捜査のことも忘れて、笑い話に花を咲かせるのだった。

## 17. Person (後書き)

どーも☆

大好きなお店は『無印用品』の  
KIDでーす!!

あの何とも言えない素朴感や、  
流れている音楽などが溜まらず大  
好きです(笑)

(時には親が買い物に出かけている最中、  
ずっとそこにいることもあります(^^))

コナン

「そう言やぁ……。随分前に言っ  
てた好きな食べ物が確か……」

KID

はい!

無印のリンゴチップですけど? (笑)

(他にもアイスとか、最近  
はカレーや紅茶などもよく見ています)

快斗

「あそこ服とかも色々だしな」

KID

そうそう。

あっ!

『服』と言えませんが……。

実は先週の日曜日に、少し早いですが、卒業式に着るドレスを購入したんです。

（それも吉祥寺で・・・）

コナン

「早っ!!」

快斗

「えっ?　　ってか、ドレス?!」

KID

実は私の高校、卒業式の服装はドレス・着物・コスプレでないと浮く感じなので・・・。

（私服校なんで、制服がない分こんな感じに・・・）

去年はコスプレが少なく、ほぼ女子全員が着物かドレスだったんですけど、私はそこでドレスをチョイス!

サーモンピンクと黒のフォーマルドレスで・・・、まあ・・・。

ガネファンの方に伝わる感じで言うと、ゆりっぺが仁和寺ライブで着ていたのと少々似ている感じの・・・。

（まあ、膝より下くらいしかスカート丈はないですけど・・・）

コナン

「えっ?　　それは買う目的で吉祥寺に行ったのか?」

KID

うんにゃ。

随分前に吉祥寺で両親とブラリしていた時に、そのドレスを一目惚れしたんだけど……。

値段が39900円!! (@|@;) )

(まあ……。それくらいはするか……。 (汗) )

さらに店員からは『値引きの可能性は低い』と言われ、先週のオーブンキャンパスの帰りにとうとう購入!!

その代わり母から条件で『大学受験が落ちたら自腹ね!』と言われた……。 (汗)

さて、来週は?

コナン

「……………ん? あっ、俺か」

快斗・KID

( (他に誰がいるんだよおーっ!!!) )

コナン

「ええ…………… (カンペをチラリ) ………………かつ……。金田登場!!!」

KID・快斗

「「それでは☆シ」」

コナン

「おーい!!! (慌)」

## 18. Outsider

しばし佐山に紹介された関係者と話し込んだ後、ふっと小五郎は闇沼に対し、あることを尋ねた。

それは、唯一佐山薬品会社とは関係のない、闇沼の仕事場のこと。

「ところで『ジュエリー管理』って、美術館か何かでもされているんですか？」

「ええ。まあ……。ちょっとばかり大きめの宝石店をやっている……。普段はそこで仕事を……」

そう言いながら、闇沼は小五郎に名刺を手渡した。

その名刺には『杯戸町 原石屋』と書かれている。

名前は少々和風染みを感じだが、確かに名刺に書かれている内容や写真からすると、結構な大ききの店らしい。

「な、なるほど……」

「ほら。この指輪も、彼の仕事場に遊びに行った際、彼がくれたものなんですよ」

ふっと佐山はそう言いながら、小五郎達に青い大きな宝石の乗った指輪を見せた。

正直、購入するとなるとそれなりの金額が付きそうな感じのものである。

（うわー、高そう……。やっぱり金持ちが付けるものは違うよな）  
「これ……。ただですか？」

「ええ。もつとも、これは元々展示物として使われていたものだったようなんですが……」

（ん？ 展示物……？）

「止めてくれよ、佐山。そんな昔手放してあげた宝石の話なんて・・・」

そう闇沼が苦笑を浮かべた、その時だ。

「ケッ！ どうせ傷か何かが付いて、それで義親父おやじに渡したんじゃねえのかあ？ そんな高値が付きそうな宝石を、わざわざ義親父おやじの結婚記念日に渡すはずがねえもんなあ？！」

突然コナン達の後ろの方から聞こえてきたその声に、皆はハッと後ろの方を振り返ってみる。

そしてコナンは一気に青褪めた。

そこに立っていたのは、コナンが先程から気にしていたベント男、金田悟の姿だった。

こんな大物や著名人達が集まっている場だというのに、金田の上着は茶色がかった緑色のジャンパーで、下はところ何処が破けているデザインの黒長パン。

口に至っては、少々ビジュアルチックなものを履いていて、完全にパーティーの為に服を選んだようには見えない。

金田は時々ヘラヘラと笑いながら、佐山や闇沼の方を睨み付ける。その態度に、闇沼は少々顔を顰めた。

「何が言いたいんだね？」

「決まってるだろ。義親父おやじはただ単に、あんたの『ゴミ回収人なんだろ？』ってことさ」

「な、何いっ！？」

「まあまあ・・・、闇沼。落ち着け・・・。悟！！ 何故貴様がここにいる！？ 『パーティーへは絶対に来るな』と言ったはずだぞ！？」

珍しく佐山は小五郎達に怒鳴り散らした姿を見せたが、それを見ても金田の態度は変わらず、拳句の果てには普通に澄ました表情を浮かべ、口を開いた。

「息子をパーティーに入れねえだなんて、そんな話があつて堪るかよ。まあ・・・、あんたから言わせてもらえば、俺は『息子』じゃなくて『義息子』<sup>むすこ</sup>だがな」

ふっと視線を変えた金田は、自分のやや足元近くに、この間見掛けた子供がいることに気が付いた。

当然コナンも咄嗟に蘭の後ろに隠れてみたが、もう遅い。

「ん？　・・・お前あの時のガキの一人か？」

（ギクツ・・・！！）

「えっ？　・・・コナン君を知ってるんですか？」

「蘭姉ちゃん・・・！」

「えっ？」

「そんなこと訊かなくていいよ！！」

コナンは何度も金田の方を気にしながら、小声で蘭にそう伝えた。それを聞いた蘭は、コナンを自分の足の後ろに隠したまま、とりあえず後ずさる。

その様子を見て、金田は不気味にほくそ笑んだ。

「おや？　逃げてるなあ・・・。ま、そうだな。そのガキとは少し顔見知りだよ。少々俺の坎に触ったヤツなんぞね！！」

「えっ・・・？」

（うわっ、コワっ・・・！！）

「そんなことはどうでもいい！！　今すぐここから貴様は出て行くんだ！　今すぐに！！」

金田曰く『義父親』でもある佐山に怒鳴られ、金田は『渋々』と言った感じで、コナンを睨み付けるのを中断。

その行動にホッとするのもつかの間で、金田は最後に佐山を睨み付けると、少々笑みを含ませながらこんなことを口にした。

「安心しろよ、義親父。<sup>おやじ</sup>今日のパーティーの景品手に入れたら、一番最初に退散してやっからよ！ アツハハハ！！」

そう言いながら去っていく金田を、佐山はただ睨み返すことしかできなかつた。



## 18. Outsider (後書き)

どーも☆

いつもお風呂上りにゼリーを食べている

KIDでーす!!

一昨日の話になりますが・・・。

GARNETライブの音霊に行ってきましたー!! V (^ ^) V

コナン

「あれって砂浜だろ? 気温とかは?」

KID

うーん・・・。

蒸し風呂? (笑)

まあかなりの暑さの中、たった出番30分程度のライブでしたけど、一応はっちゃけてきました♪ (笑)

実は今回、音霊のライブハウスに行ってみたら、中からリハ中のゆりっぺとおかもっちの声が(おっ!!)

その後は裏口から二人が出てきたんですけど・・・。

実話私、たまたま裏口から『もう誰もいない?』と確認しているおかもっちと目が合ってしまった!! (ギャッ!!)

実は丁度追っかけファンの方達を粗方追い返したあとの出来事だっ

たんで、本当に父と私のみで目が合っちゃったんです（・・・）

おかもっちは思わずこちらに笑いながら『どうも〜』みたいな感じで頭下げました。

（それとも『あっ・・・。見つかってしまいましたね』って言う感じだったのだろうか）

しーかしっ！！

ファンであっても多少の恐怖感はある私。

思わず父の後ろにサッと隠れてしまいました・・・orz

その場にいたおかもっちは『えっ？ 何かやっちゃったかなあ〜』という感じの表情を浮かべていて・・・ホンマにスミマセン！！（笑）

『これは答えないと！！』と思ってもう一度おかもっちの方を見てみたら、丁度海水浴を終えたビキニ姿の女性人6人が目の前を通りかかりまして・・・。

完全におかもっちそっちをみてニヤけていました（コラ！！）

快斗

「ゆりっぺは何も言わなかったわけ？」

KID

はい、何にも・・・。

ちなみにゆりっぺは黄色い日傘差して、グッズのタオルを頭に被った状態で出てきました。

（日焼け対策抜群的な・・・）

ただ・・・。

あまりにも無言&無口&無反応過ぎて、少々『今日はご機嫌斜めなの?』と、内心心配してしまいました。

(後でファンの方から聞いた情報ですが、どうもすっぴんを見られたくなくて無反応だったようです・・・。正直素の顔の方がカワイイと思うんだけど(――;))

コナン

「じゃあ・・・。別に怒ってはいなかったと?」

KID

そ!

なんか今回のライブ、終わった後出待ちしてたファンの人達全員にハイタッチして帰ってたし。

(おまけに『イエーイ!!』の声が大き過ぎて、周りに丸聞こえ(苦笑))

でした♪

じゃあ、私はこの辺で♪

コナン

「えっ?」

快斗

「もう帰んの?」

KID

うん。

だって今日から祖父祖母の家に2泊3日なんだもん♪

コナン・快斗

「「あっ・・・そ」」

コナン

「俺達はどうする？」

快斗

「とりあえず来週のプレゼントメッセージの録音でもやるか」

コナン

「そうだな・・・」

K I D・コナン・快斗

「「「それでは☆彡」」」

## 19. Premium

「私が彼を追い返しましょうか？」

『ガッハッハッ』と笑いながらその場を歩き去る金田を見つめながら、原根は佐山の耳元で囁くようにそう尋ねた。

その提案に、佐山は首を横に振る。

「いや……。下手に何かをすれば、余計にマズイことをやらかすだろう……。今はそのままにしておけ」

「かしこまりました」

「誰ですかあ？ あの乱暴な彼は……」

小五郎が少々キツめのジト目で佐山に尋ねると、佐山は遠い目をしながら答えた。

「私の義理息子の金田悟です……。私の財産に甘え、最近はあるやこれやと威張り散らしよって……。！！」

（アイツ義理息子だったんだ……。そりゃあ、リストに名前が載ってるはずだよなあ……。）

コナンが呆れ返りながらそんなことを思っていると、原根は小五郎達に詳しく、金田が佐山家の義理息子になったのかを説明し始めた。

「悟様は、社長の離婚された奥様と別の男性との間に生まれたお子様で、その男性と別れ、またこちらに奥様が戻ってこられたのが20年前……。その6年後に、奥様がご病気により他界。その頃には別れた男性の出所も掴めなくなっておりましてので、止む負えず社長の息子として引き取られることに……」

「な、なるほど……。結構複雑だったんすなあ……。」

「そう言えばコナン君。あの人のこと知ってるみたいだけど……。どこで会ったの？」

先程の金田との会話を思い出した蘭が、コナンにそのことを尋ねる。尋ねられたコナンは、少々後ろに背を向けるように立っている金田のことを気にしつつも、つい4日前に起こったあの出来事のことを説明した。

「実は4日前に、あの人歩美ちゃんを車で轢き殺しそうになったんだ。自前の紺色のベンツで・・・」

「ええっ?! 歩美ちゃん、大丈夫だった!？」

「うん。高校生のお兄ちゃんが助けてくれたから・・・。もつとも、轢きそうになった金田さんは、全然反省してなかったみたいだけど・・・」

「危ないよね・・・。私だったら一発蹴りを入れたくらいだわ」  
(いや、蘭・・・。それをやったら全部終わる・・・)

思わず蹴りを入れる前のポーズを取った蘭に、コナンはただ苦笑する。

するとその話を半分聞いていた小五郎は、その『紺色のベンツ』という一言が引っ掛かったのか、コナンにそのことを聞き返した。

「なあ、コナン。お前今・・・『紺色のベンツ』って言ったか？」  
「うん」

「・・・それってまさか・・・。例の暴走ベンツのことか?!」

「うん・・・。あれ、金田さんのことだったみたいだよ?」

「そう言えば・・・。コナン君の小学校のプリントに、金田さんの車の運転のことが載ってたような・・・」

「私の方からも伝えてはいるのだが、一切聞き入れようとせんのだ! アイツは・・・!!」

「この間も会社の方に警察の方がいらして、少々騒ぎに・・・」

(おいおい・・・。皆から嫌われてんじゃねえか・・・。あの男・・・)

ふっと周りが金田のことを口にしてしていると、先程まで黙って話を聞

いていた柳川達も、代わる代わるに迷惑行為の噂や目撃情報などを口にし出した。

「あの人は正直、いろんな人に恨まれやすい人ですよ。車以外の事故なんかも多いですし・・・」

「近辺の飲み屋や居酒屋とかでも、かなり騒ぎ立てたり、店の前で文句を言ったり・・・この前も暴行被害で警察が来ていましたよね？」

「まあ・・・その辺のものぶち壊したり、恐喝なんかもやってるって噂ですから、警察が動くだけまだいいですけどね」

「全く！ 最低の義息子だわい！！ 私遺産は絶対にアイツにはやらん！！」

「社長のおっしゃる通りですね・・・」

（ハハハ・・・）

毎度事件に遭遇しているコナンとしては、これは少々避けたい状況だ。

こんな複雑且つ、恨みを買うような人間がいる時は、いつもロクなことがありやしない。

ただでさえ今回の依頼が『殺害予告』だったというのに、ここで余計に何かが起こってしまったら・・・。

個人的に冗談じゃない。

さらにそれとは別に、コナンは一瞬金田が去り際に口にした言葉が引っ掛かっていた。

確かあの時、金田は『パーティーの景品』と口にしていたが、あれは一体何のことだろう。

まさかこのパーティーで、何かのイベントでも行う気なのだろうか。コナンは佐山に、その金田の発言のことを尋ねた。

「ねえ、佐山さん」

「ん？」

「さっき金田さんが言ってた『パーティーの景品』って？」

「あ、ああ……。それは……」

そのコナンの問い掛けに答えようとした佐山は、ふっと視界に入っ  
た小五郎の顔を見て、手のひらを『ポンッ』と叩いた。

「！　そうだ！！　毛利さん！　何ならこれから行こう暗号クイズに、  
毛利さんも挑戦してみませんか！？」

「は？　暗号……クイズ？」

「ええ。名探偵の毛利小五郎さんなら、絶対に正解できますよ」

「は、はぁ……」

（またこの流れかよ……。こうなるとロクなことないんだよなあ  
……）

なんだかいつかのパーティーの時のような状況に、コナンはただた  
だ溜息を吐くのだった。



## 19. Premium (後書き)

どーも☆

かき氷はブルーハワイが大好きな

KIDでーす!!

でも今年はまだ1回しか食べてない・・・(T|T)ぐすん・・・。

(まだ今年食べられるかなあ)

ところで・・・。

コナンなんか暗い・・・、というかご機嫌斜めじゃない？

コナン

「別に!! (怒) どこぞのコソ泥が番組仕切ってたって、ぜんっぜん怒ってねえから!! >、へ、<」

KID

それを怒ってるって言うんでしょうよ・・・(ーー)

それで？

快斗は？

快斗

「どーも☆ 快斗でーす!! って、始まってた？」

KID

(遅い・・・。ついでに今ハイテンションはマズイ・・・(汗))

快斗

「あれ？ 名探偵なんかしょげこんでない？」

KID

（そして今コナンに声を掛けるのはよりマズイっ！！！！！！！！！）

快斗

「そう言えば、俺のアニメ見てくれた？」

KID

勿論♪

快斗

「よし！」

コナン

「ケッ・・・」

KID

ガネ様見逃すわけにはいきません！！

（音霊の為に一日で歌覚えました♪（何気に自慢・・・））

コナン・快斗

「「そっちかい！！」（苦笑）」

KID

・・・（^| ^;）

でも本編も観たよ♪

（ずっと『あーっ！』とか言いながら爆笑してましたけど（笑））

あのコナンの変装は面白かったね♪

（声は新一だったけど・・・（汗））

コナン

「俺が声やりたかったぜ・・・」

快斗

「んじゃあ・・・。またの機会な・・・（^| ^;）」

KID

じゃあ、本日はこの辺で・・・。

それでは☆彡

## 20. Quiz

「んで……。その暗号ゲームっていうのはどんな……？」

「ん？　なあに、簡単な遊びですよ」

そう言う佐山は、小五郎にその暗号ゲームの話を説明し始めた。

ゲームが開始される際、参加者には問題の暗号文が書かれた紙が手渡される。

そしてその中に書いてある問題の答えが分かったら、その答えになっているものをこのパーティー会場の中から見つけ出し、壇上で待っている佐山の元へと持っていく。

そしてそこで問題の正解を佐山に話し、それが正解であれば、豪華賞品を手に入れられるというもの。

ちなみにこのゲームは10周年ごとにパーティーで行われているものらしく、中にはその商品を狙って参加する人間も少なくないのだそう。

現にあの金田もその口である。

「ゲームはあと30分ほどで開始します。制限時間は10分で、回答は早いもの順。そしてこのゲームの景品は、そこら辺にあるような安物ではなく、ちゃんとした代物です。どうですかね？」

「ほお……。『暗号』と言えば、名探偵の十八番っすなあゝっ  
！！」

そう言って襟元を正す小五郎を、コナンと蘭は白い目で見つめる。さらにその小五郎の向かい側にいた佐山の方は、その秘書である原根がやや不安げに口を開いていた。

「しかし、社長……。毛利さんには、今回は社長の護衛をすると

いうお役目が・・・」

「まあいいじゃないか、原根君。探偵は見張りが全てじゃない・・・。暗号を解くのも大好きなものだ」

「ですが・・・」

「そうでしょう？ 毛利さん」

「あっ・・・、はい！ もちろん！！」

（おいおい・・・、否定しろよ！！）

そんなコナンの言葉など届くはずもなく、小五郎は毎度空回りになるはずの自信有り気な笑顔で、佐山の顔を見ながら大きく頷いた。その姿を見た原根は、半分溜息を吐きつつも、それ以上は何も言うとはせず、頭を下げた。

「かしこまりました。ではその時間、見張りは私が行います」

「ああ、頼むよ」

「もう・・・。お父さんったら・・・」

「おじさんきつと、その豪華賞品が欲しいんだよ・・・」

「はぁ・・・。でもどうせこのことお父さんに言ったら『カモフラージュの為の行為だ』って、言い訳するんだろうなぁ・・・」

（蘭、鋭い！）

「コナン君、私達そのゲームの間どうしょっか？」

「えっ？」

そう蘭に問われたコナンは、とりあえず辺りを見渡してみる。

だがこのパーティー会場で暇潰しが出来そうなのは、料理を食べているか。

トランプやチェス、ビリヤードなどで遊んでいるかしかない。

しかもゲームのほとんどは大勢で楽しむものばかりだし、料理の方は粗方食べてしまっていて、少々今は満腹状態・・・。

かと言って、ゲームをやるのに初対面の人に声を掛けるのも気まずい。

会場を一旦抜けるのは、一応捜査に協力しているのでご法度となれば、時間潰しするものは一つしかない。

「蘭姉ちゃん。僕達もその暗号ゲームやろうよ。こっちは二人だけでさ」

「二人だけ……。うん、いいかも♪ せっかくだし、二人でお父さんより早く解いちゃっか？」

「そ、そうだね……」

『んなすぐには……。』と一瞬口にしそうになりながらも、何となく小五郎には勝てる気がしたので、コナンは何も言わずにその蘭の言葉に頷いた。

小五郎には申し訳ないと思いつつも……。

「ねえ、佐山さん」

「ん？ なんだい？ コナン君」

「僕もその暗号ゲーム、参加してもいい？」

「えっ？ でも……。子供相手には……」

「いえ、私とコナン君の二人でやるんです」

「お、お二人で？ ……まあ、いいですよ。そのゲームのプリントは、大量にありますから」

「じゃあ、お願いします」

（フッ……。なんだかんだで興味があつたんだよね。このゲーム……）

そんなことを胸中で呟きながら、コナンはいつもの微笑を浮かべながら目を輝かせた。

まさかこの暗号ゲームが、これから起こる惨劇の始まりになるとも知らずに・・・。

## 20. Quiz (後書き)

どーも☆

ヒール靴が大好きな

KIDでーす!!

理由としては何となくカッコイイのと・・・。

身長錯覚? (笑)

(かなり身長低めなので、ヒールを履くと『一般人と同じ背丈』みたいな感じになるので、よく好んで履いてます(^^))

そう言えば第一話からずっと、コナンのドラマ見てるんだけどさぁ・・・。

コナン

「ああ・・・。んで？」

KID

いや。

『目暮警部欲しいなあ』って、高木&佐藤ペアを見る度に思うんだよねえ(苦笑)

あの二人だけでの捜査って、正直15年以上やってて数えるくらいでしょ？

しかも警部役の人は3回やってるんだから、連ドラの方にも出てもいいと思うんだけど？

コナン・快斗



「「確かに」……」

K I D

あと……。

噂で言ってた平次がまだ出てこない……（落）

（一応ちゃんとしたところの記事だったから、出てくるのは確実だ  
と思う。となれば、やっぱりラストか?!）

コナン

「いいよ、色黒は……。今この時期暑苦しいし……。――」；」

快斗

「でも最近寒いじゃん。そう言えば、まじ快は？」

K I D

勿論読んだ〜♪

まさかの盗一と淑女ペアで来るとは思わなかったけど……。  
（『どうせなら快斗のみで』と思った眩きはさておき（笑））

お二人若いね（爆）

今度のコナンOPの小五郎と英理も若いけど（へーへ；）

コナン

「はいはい。白いコソ泥の話題はここまで！　　んで、来週は？」

K I D

来週はあまり進まず（というか話はやたらとスローペース？（汗））  
、ゲームの商品紹介と、ゲームスタート話になるかと思ひます。  
（そしてコナンには謎の気配が・・・！！）

それでは☆彡

## 21. Game

午後7時17分 パーティー会場。

「じゃあ・・・、そろそろだな」

ふっと、佐山は自分の腕に付けているゴルドの腕時計を確認しながらそう呟いた。

その呟きと共に、隣りにいた原根も時間を確認する。

「よし、原根君。壇上に行くぞ」

「はい」

（おっ・・・。どうやらゲーム開始みたいだな・・・）

偶々佐山の方に視線を向けていたコナンは、二人が再び壇上に向かっていったのを見て、ようやく暗号ゲームを開始させるのだと感じていた。

時間帯が微妙なところを考えると、スタートは午後7時20分からだろうか・・・。

そんなことを思っている内に、佐山と原根は壇上へ。

そして会場内の明かりが全て消えた後、佐山はスポットライトに照らされながら、マイク片手に口を開いた。

「はい！ 皆様！ 壇上の方に注目してください！ これより、皆様が大変楽しみにしていたビッグイベント、暗号ゲームを行いたいと思います！」

その瞬間、会場内からは『ワーツ！！』という歓声と共に、けたたましい拍手が鳴り響いた。

確かに『会場の人間全員が楽しみにしていたイベント』というのは、

どうやら本当のことらしい。

「こんなに人が騒ぐってことは、商品はかなり凄いものなのかなあ？」

「んなの決まってるんだろ。大手会社の社長さんが持ってきた景品なんだから……。きっと、最高級の時計とか、最高級の指輪とか、最高級の食いモンとか」

「全部『最高級の』じゃない！」

（まあ、庶民には似合いそうにねえのが出てくるな……。これは……。）

これまでもコナンは、両親の関係でこの手のパーティーには何度も参加してきた。

そしてその手のパーティーに登場する景品は大体小五郎の言った通り……。

安物が出てきたことは一度もない。

まあ……。それに2等の景品が安物だったことはあったが……。

（もらう人がいねえんだよ。2等の景品って……）

「では、これから行う暗号ゲームの説明を、手短かに説明します。まずは、このゲームに参加される皆様に、私の社員。もしくは秘書の者が、ある暗号の書かれた紙をお渡しします。そしてその暗号の答えに当てはまるものを、このパーティー会場内から見つけ出し、早く私のいる壇上に持ってきた者の勝ちです。答えとなっているものは、必ずこの会場内にあります。くれぐれもそれらを探そうとして、外へは出ないように……」

「「アハハハッ!!」「」」

さっきまでの不安&お怒りムードは何処へやら、いつの間にか佐山は、単なるゲームの説明で笑いを取っていた。

一方の小五郎はと言うと、こちらもいつ間にやら、あの佐山と親しい柳川や石神の3人と組み、なんとか景品を貰おうと執念を燃やしている。

本当に抜け目がない……。

そして残された闇沼と加藤は、どうやらゲーム自体に参加する気があまりないらしく、二人で隅の方に移動していた。

あの様子からすると『ゲームは参加してもしなくてもどっちでもいい』と言った感じだろうか。

（まあ……。加藤さんはまだ若いから、将来手に入れられそうなものなんて山ほどあるし……。逆に闇沼さんは、佐山さんから景品の紹介をされてるんだろーな……。）

「なお、優勝者の景品はあちらになります!!」

原根は壇上の上でそう言いながら、空いている左腕で自分の左側の方を示した。

その瞬間、壇上のやや左下の床。

つまり原根が示したところの一部が円状に開き、黙々と白い煙が立ち上り始めた。

さらにその床からは、何か大きなものがせり上がり始め、やがてその黒っぽいボディが姿を現し始める。

煙と共に床下から出てきたものは、黒に近い紺色の車だった。

見るからに新品そのものの車体で、さらにその見た目は『高級な外国車』としか言いようのないデザインが施されている。

皆がその車に目を輝かせていると、原根は再び景品の説明をし始めた。

「優勝者の方には、こちらのネイビーブルーのロールスロイス『ナイトファントム・1966』を差し上げます」

「「「おおっ！！」」」

「日本円にして通常約4000万円以上は下らない、まさに貴族の皆様に対応しい最高車です！ 今回は、この佐山薬品会社創立30周年記念にあやかり、車の番号も創立時の年代数字のものをご用意致しました！」

「「「おおっ！！」」」

一方その頃、蘭とコナンは他の参加者同様、その景品の金額レベルにただただ圧倒されていた。

特に蘭に至っては、少々自分達のような人間が、小五郎の推理でコレを手に入れていいものかと不安がるほどだ。

「あんなのお父さんが貰っちゃっていいのかなあ・・・」

（『手に入れられれば』だけだな。実際・・・。んでもってあの『1966』って、車の名前だけか。どうせならナンバープレートの方も同じ数字にすりゃあいいのに・・・）

そうコナンが言うように、車自体のナンバープレートには『1966』という数字ではなく、全く別の『4212』という番号が書かれていたのだ。

この数字からすると、おそらく高級な車で両方の番号が合っているものが無かったのだろう。

「でも凄い車ね。コナン君、あの車知ってる？」

「うん。前に博士とキャンプに行った時に見たことあるから・・・。確かあの車・・・。エンジンを点けてもほとんど震えないし、音もしないんだよ。おまけに走ってる時は全く揺れないように細工してあるから、車内で秘書の人との話で、メモも取れるようになってる

んだって。一般的には、大手の社長さんとかが持つてる車のはずな  
んだけど・・・」

『なんでそんな高級車が景品に?』というコナンの疑問は、今回は  
胸中にだけ伏させてもらった。

そんな中、例の居眠りの小五郎はと言うと・・・。

「おおーっ!! よし! あの車は私が頂きます」

「ええーっ!? 本当ですか!？」

「あんなものが景品なんですから、きっと今回の問題は相当難しい  
ものですよ?!」

「なあに! この名探偵毛利小五郎の手にかかれば、そんな問題造  
作もないことですよ! 『名探偵を甘く見るな』ってことです!  
ガッハッハッハッハッ!!」

一人勝手に名探偵気分につけ汁に、どっぷり浸かり込んでいた。  
その隣りにいる二人の方は、哀れなことに小五郎の推理力に期待を  
膨らませている。

大方、小五郎の推理を盗み聞き、景品を手に入れようとしていると  
ころだろうか。

(駄目だこりゃ……。完全に今日の目的忘れていやがる……。)

「それではこれから、暗号の書かれた紙を皆様に渡します。原根君、  
君も配るのを手伝ってくれ」

「はい」

「やれやれ……。まあとりあえずやるか……」

一人そう愚痴りながら、コナンは近くにいた社員の人から、その暗  
号の書かれた紙を受け取った。  
その時だ。

ゾクッ!!

「ッ!!　・・・・・・・・」

ふっと突然、コナンは何故か背筋が凍りつくような、まるで誰かに見られているかのような錯覚に陥った。

だが驚いて後ろを振り返ってみても、怪しい素振りを見せる人間は誰もいない。

周りを何度見渡してみても、自分達の方を見つめている人達は何処にもいなかった。

（なんだ・・・？　なんだ？　今の気配は・・・）

「？　コナン君・・・、どうしたの？」

「えっ？　あつ、ううん・・・。なんでもない・・・」

「そ、そお？　ならいいけど・・・」

「うん。気にしないで・・・」

そう蘭に伝えながら、コナンは再び辺りを見渡した。

だが結局この時も、特に不審な行動を見せる人物は誰一人としていなく、この時はただの『勘違い』だと、コナンは思うことにした。

この時感じた謎の気配が、誰かの『殺気』であつたにも関わらず・・・。



## 21. Game (後書き)

どーも☆

白目が若干青い

KIDでーす!!

冗談ではなくホンマです (笑)

生まれつき、少々白目が青みがかっているんです ( ^ | ^ ; )

(ちなみに、血縁関係に外人は一切いません。完全な日本人です)

私の唯一母と似ている箇所なのですが、前に母の白目を見てみたところ、私よりかは薄い青で・・・。

(なーんでこっちだけ、濃い感じの青白目になっちゃったんだろう・・・ (ーー))

コナン

「俺は逆に黒目が“蒼い”と言われるんだけど・・・」

快斗

「俺達のキャラは大体そんな感じだよな・・・ (シミジミ)」

コナン

「お前は何色？」

快斗

「こっちは紫だけど・・・」

平次

「俺なんて緑やぞ? 緑!」

快斗

「それってどこのひと・・・？」

平次

「知るかつ!!」

K I D

そう言えば話変わるけど、ドラマ版の平次の名前。  
やっぱり誰かが報告したみたいで、3日目くらいで直されてたね。

平次

「それが全部直ってないねん。和葉の紹介のところ、未だに『平治の幼馴染』になってんねん・・・」

コナン・快斗

「「はいっ?!!」」

平次

「たぶん・・・。誰も気い付いてないんちゃうか? 字も小さいし・・・」

快斗

「お前はそれでいいのかつ!?!」

K I D

(何キレてんだよ・・・)

さて、来週は暗号ゲームの出題問題登場！

（これだけで正解できたらスゴイ（驚！））

それでは☆彡

## 22. Password

暗号文の書かれた紙を受け取ったコナンと蘭。

そして離れたところに立っていた小五郎は、ほぼ同時にその内容に目を通した。

紙にはこんなことが書かれている。

ある日倉庫の中で、一人の男性が死亡しているのを発見。

男性は死ぬ間際にダイニング・メッセージを書き残していたのだが、そのメッセージは近くに居たであろう犯人に知られてしまわぬよう、かなり解読しづらいダイニング・メッセージにしていた。

男性は利き手でもある右手で、このような血の文字を書き残している。

2 2 2 2 1 1 4 1 1

2 6 4 3 5

なお、その男性を殺すことが出来た容疑者は、以下の計5人の男女。

・ 壺二 従互

(いちじ じゅうご)

・ 区夜実 真弧

(くよさね まこ)

・ 渦傍 瑳那

(うずそば よしふゆ)

・沙汰里 梨根

(さたり りね)

・妃歩賺 刃夜

(ひふすか はや)

さあ！

この暗号を解く鍵と共に、この事件の真犯人を答えよ！！

この暗号内容を読んでみて、コナンが一番に思ったこと……。

(ハハハ……。まさかの殺人事件のお題の暗号かよ……。)  
前にもあの阿笠博士が似たような問題を出して呆れたことがあったが、こっちの方がそれよりも遥かに内容が重い。

正直言って、あの森谷帝二の出した推理ゲームの方が一番真面だ。まじも

「うーん……。なんかやっぱり難しそうだねえ……。コナン君、どう？ この答え分かりそう？」

蘭がやや心配そうに問い掛けてみると、コナンは半分苦笑いを浮かべながら返事を返した。

「まだ見たばかりだから……。でもとりあえずやってみるよ」  
「……。そうだよね。何事も挑戦！ 挑戦！」

と、蘭はまるで気合いを込めるかのように、両腕を動かした。  
しかしその動きは、まるで空手の受けの時の構えにも見えて、少々隣りに立っているコナンからしてみれば心臓に悪い。

（頼むから……。毎度のパターンで何処かに『ズコーンッ!!』とかは止めてくれよ……）

そんなことを苦笑いで思いながら、コナンは暗号文の文章と文字を繰り返して見つける。

その際、早くも最初の手掛かりのようなものが、コナンの脳裏に浮上した。

「ねえ、蘭姉ちゃん……。もしかしたらなんだけどさ」

「……。えっ!？　もうコナン君、何か気が付いたの?!」

「あ、いや……。大したことじゃないんだけど……。この容疑者達、みんな名前と苗字がヘンじゃない?」

「えっ?　……。そう言われてみれば……」

確かにこの暗号文に登場する容疑者達は、何故か全員あり得ない苗字のものばかりだ。

名前にしても名前の読みはともかく、この漢字は少々あまり使われないものだろう。

中には見たこともない漢字もいくつか登場している。

「こんな風なことをする場合、考えられる線は二つある……」

「ふ……。二つ?」

「うん。一つは、犯人の名前があまりないような名前で、その名前だけが浮いてしまうのを防ぐため……。例えば容疑者の名前なまえで田中なかさん、斉藤さいとうさん、鈴木すずきさん、那倉なぐらさんの4人が出てきたら、蘭姉ちゃんどの人が犯人だと思っちゃう?」

「えっ?　……。うーん……。……。那倉さん?」

「どうして?」

「何となく……。あんまり聞かない苗字だったから……。あっ!」

「そう。そういうこと。特にこういうゲームとかで、あんまり聞か

ないような苗字の人間が出てくると、人間は思わずその人を犯人として疑っちゃうんだ。だからこれは、あえてそれを隠すためのカモフラージュ」

実際多くの推理物などに登場する容疑者達も、大半はこのように名前を有りえないものにし、誤魔化しているものが多い。  
これは推理物の基本的な部分だ。

「じゃあもう一つは？」

「もう一つの線は、暗号の内容と容疑者の名前を似通わせ、推理を攪乱かくらんさせるため。ほら、この問題で頻繁に出てきた数字が名前か苗字、または読みに入ってる人、なんか多いでしょ？」

「確かに、言われてみれば……。えっ？　じゃあ、解くのは難しいの？」

「ううん。こういうのをいくつか頭の中に入れておいて、それから予想していくんだよ。例えば、この数字全てを足したり引いたりして、それらの答えが当てはまってる人間を探すとか……。こんな風にね」

「なんかコナン君……。まるで新一みたい……」

「エ、ッ？！　……。そ、そんなことないよ……」

ここに来てようやく、コナンは今の自分が立てた仮説内容が小学生レベルではないことに気付かされた。

毎回毎回こんな風なことをやっていてバレ掛かるのだから、流石に推理類を控えることを覚えておかねばならないのに……。

哀しいことに、いつも江戸川コナンとなっている自分には出来ないのである。

（気を付けよ……）

その頃一人推理を始めていた小五郎は、自分達とは別行動で暗号ゲームに挑戦している蘭とコナンを見て、ふっとあの森谷帝二の時のことが脳裏を過ぎった。

あの時は小学生でもあるあのコナンに負かされ、小五郎はとんでもない赤っ恥をかかされたのだ。

今回も似たようなことになるわけにはいかない。

（今度こそアイツよりは先に・・・！！）

「な、なんかお父さん・・・。こっちを見て睨んでない？」

「へっ？ 気のせいじゃない？」

「そ、そお・・・？」

（たぶん・・・）

「制限時間は今から約10分です！！ それでは、スタートです！！」

佐山のゲーム開始発言と共に、原根は右手に持っていたストップウォッチのSTARTボタンを押した。

その横で、怪しげな笑みを浮かべその場を歩き去る、金田の存在にも気付かずに・・・。



## 22. Password (後書き)

どーも☆

右利きの

KIDでーす!!

なんだか最近天気予報で台風情報が多いと・・・。

(ハァー・・・(溜息))

実はあと2日後に、現在コナンのOPにも使われているGARNETの『Mistery Mystery発売イベント in千葉』に参加する予定の私。

内容はミニライブ&トーク&ポスター手渡し会(前回同様ゆりっぺからと思われる)

しかもそのポスターの数枚には、メンバー全員のサインが書かれているプレミアもあるとのこと♪

(こちらは2回貰いに行く予定なので、チャンスは2回! しかしこういうのはくじ運悪い私!! (爆))

コナン

「でも台風なんだろう?」

KID

そうなんだよぉ (ーー)

多分ゆりっぺとおかもっちは(今回はお二人のみ)、前日にラジオがあるんで、一日早めに東京こっちに来るんだと思うんだけど・・・。

快斗

「えっ!? 台風上陸って確か、明日だよねぇ!?」

KID

ねぇ!?

明らかに新幹線に何か起こりそうでしょっ?! (@|@;)

だから内心心配です・・・。

(一応野外ではないのだけれど、雨天中止とかマジ勘弁・・・or  
z)

コナン

「これは……………。岡本さんのせいかな? (苦笑)」

KID

さあ?

でも当日、多分ゆりっぺ『台風男』とか呼びそう・・・ (——;) (ちよっと可哀想だけど・・・)

さて、来週は?

コナン

「暗号ゲームでおっちゃんボツ予定!」

快斗

「・・・・・・・・・・ようはまたヘツポコ推理をしたんだな・・・・・・・・」

K  
I  
D

それでは☆  
△

## 23. Estimation

暗号ゲームが開始されてから早3分・・・。

小五郎は柳川や石神達と共に、その紙に書かれていた暗号文を何度も読み直す。

だが最初の時点で色々な部分に気が付いたコナンと、今現在何にも思いつかない小五郎とでは、かなりの差がひらいていた。

「みんな・・・、苗字がバラバラだなあ・・・。くそっ！ 分かりそうで分からねえ！」

小五郎があまりにも難問過ぎる問題にイライラしていると、先程まで会場の壁側にいた加藤が、3人の様子を見にやってきた。

「どうですか、毛利さん。何か分かりましたか？」

「いや、まださっぱり・・・。あれ？ 加藤さんは参加されないんですか？」

「えっ？ ええ・・・。別に僕はあんな高い車を持ち回せるような人じゃないんで・・・」

「あっ・・・、そうっすか」

（まあ・・・。おっちゃんもある意味似た立場だけだな）

しかしそれでも『それに引き替え、自分は・・・』と思わないところが、妙に小五郎らしいとコナンは思った。

そうこうしている内に、時間は少しずつ過ぎていく・・・。

そんな会話をしている間にも、既に残り時間が7分を切っていた。

徐々に徐々に小五郎の中から焦りが生まれる。

（あゝああっ！！ くそっ！！ このままじゃコナン達を越すよりも先に、ゲーム自体がタイムオーバーになっちまう！！）

「柳川さんは？　どうですか？」

「全然……。苗字もこの数字の意味も全く分からず……」

「石神さんは？」

「私です。せめて……。この数字の意味が分かりさえすれば、解くのは造作もないと思うんですけど……」

ふっとその言葉を聞いた小五郎は、もう一度問題文にある数字を見つめ直した。

例の紙に書かれている数字は、全部で2段に分けられている。

1段目の方には『222211411』。

そしてもう一つの2段目には、それよりも少しだけ少なめの『26435』という数字が書き残されていた。

小五郎はまず最初に、その数字を全てゴロ合わせにしてみただが、当然1段目も2段目も言葉にはならない。

そればかりか、あまり容疑者の名前の接点らしいものも見当たらない。

（だとすると……。この数字を計算すりゃあいいのか？）

そんなことを思いながら、小五郎はとりあえず思いつく計算方法で、この文章に書かれている数字を式に並べてみる。

そして途中までやった辺りで、小五郎は『ハッ!』と閃いた。

「そうか！　分かったぞ!!」

「えっ……。？」

（はっ？）

「「「えっ!?!」」」

「どうしたんですか、毛利さん!!」

「何か分かったんですかっ!?!」

その小五郎の発言に、石神と柳川は小五郎の元へと急いで駆けつけ

る。

そんな二人の姿を見つめつつ、小五郎は何とも言えないキメ顔で口を開いた。

「分かりましたよ……。犯人はこの『壹二 従互』です!!」

「「!!」………壹二………、従互………?」「」

答えは聞いたものの、一体どういう推理でこの人物になったのか。3人には全く以て分からない。

一方の蘭やコナンにも、その小五郎の自信有り気な声は耳にハッキリと届き、蘭はなるべく小五郎に気付かれぬよう、コナンの耳元で尋ねた。

「ねえ、コナン君……。その人で本当に犯人合ってるの?」

「いや……。まだ何にも閃かないけど……」

「大丈夫かなあ……。お父さん……」

（自信有り気なおっちゃんほど厄介なのはねえからな……。ハハハ……）

そんなことを呟いている内に、小五郎はたった今閃いた推理を説明し始めた。

「はい! これはこの暗号文に載っている数字を、1段目。2段目と分けて足していけばいいんです!」

「た……。足すんですか?!」

「はい!! そうすると、上の数字は2+2+2+2+1+1+4+1+1なので『12』。一方の下数字は2+6+4+3+5で『15』になります。つまり犯人は、数字の合計が順番通り名前に当てはまっている、この『壹二従互』さん以外、考えられないんですよ!!」

「た……。確かに……」

「凄いわ！ 毛利さん！！」

「なーに！ こんな大したことは……。ガッハッハッハッ！！」

二人の人間に同時に褒められ、小五郎はまるで勝ち誇ったかのような高笑いを上げたのだが、この推理には大きな欠点が存在する。

それは、このゲームの条件……。

「で、でも毛利さん……」

「ん？ なんですか？ 加藤さん」

「その毛利さんの推理の場合……。『事件を解く鍵のモノ』は、一体何なんですか？ 僕はそれが全然思いつかないんですけど……」

「あっ……。！！」

「た、確かに……」

「それがないと正解には……」

皆の視線が、一斉に小五郎に向けられる。

一方の小五郎は、一気に最高潮の気分から転落したかのような状況になり、慌てて内容を再度読み直した。

しかしいくら読み返してみても、道具 犯人に結びつく物は中々思いつかない。

せめて容疑者候補の欄のところに、それぞれの職業や趣味などの記述があれば、そこから事件と関係している道具を探すことが出来たかもしれないのに、そう言った記述も一切ないのだ。

「いや……。絶対に何かヒントがあるはず……」

「あゝあ……。やっぱりお父さんハズレちゃった……」

（いや……。正確にはハマったんだ……。おそらくあのおっちゃん推理は、佐山氏がわざと引っ掛けように要素として含ませたもの……。おそらく他にも似たのがあるはず……。だとすれば、

その中で道具が関係しているものを推理で導き出さなければ、正解はできない・・・！！・・・。結構手が込んでんじゃないか！ 佐山社長さんよおっ！！）

コナンは胸中でそう叫ぶと、再び暗号ゲームの紙に視線を向けた。少々その顔に、いつもの微笑を浮かべながら・・・。



## 23. Estimation (後書き)

どーも☆

季節では夏が大好きな

KIDでーす!!

少々日にちが経ってしまいましたが・・・。

GARNET CROWの千葉・イクスピアリイベントに行ってきましたー!! (^^)

(もう信じられない人の数で・・・。正直ディ○ニーラン○の人達は度肝を抜いたカモ? (笑))

コナン

「何人くらい?」

KID

うーん・・・。

軽く5000人以上はいたかと・・・。

(まあ、一日2回公演だったんだけど、ほとんどの人帰ってなかったしね (^^;)) よく分かんないや・・・)

快斗

「んで? どうだった?」

KID

それが幸運なことに、リハしてるゆりっぺとおかもっちを真近で見れて (\*^。^\*) (うっとり・・・)

しかも途中、ゆりっぺがマネージャーにマイクの方を指差しながらゆりっぺ『これで大丈夫だと思う？』

とか言ってたし（貴重！）

（さらにその後、マイクがいきなり『キーン！！』と鳴ったのを聴いて、思わずゆりっぺの顔が『（@～@；）！！』みたいな感じになってるのも観れたし・・・（かなり貴重！！））

でも第一回目は、いきなり雨が途中で降ってきて、1分間だけ中断になりました（苦笑）

コナン

「丁度台風だったもんな」

快斗

「それでポスターは？ もらえた？」

KID

うんうん♪

貰えた♪ 貰えた♪

さらにこちらゆりっぺのファンサービスで、CDを貰っちゃったんですよ！！！！（キャーッ！！！！（＜―＞））

快斗・コナン

「「えっ!?!」」

KID

いやね。

2回目の公演が終わって『これからポスターお渡し!』っていう時に、私もう一枚CD買ったのよ。

(もう初回と通常持ってたし、一回目で2枚もポスター貰ってたんだけど、やっぱり名残惜しくなったから・・・)

ちなみに、ポスターお渡しでゆりっぺとおかもっちが立ってる場所は、その物販の机を真ん中で割った感じで。

(ようは左側がポスター。右側がCD物販だったんです)

それで物販の方でCDをもう一枚購入したら、ポスターでスタンバイしていたゆりっぺがいきなり物販の方の机にやってきて

ゆりっぺ「コレ(私が買ったCD)渡してもいい?」

店員「(驚!) あっ・・・、はい」

なんて会話が聞こえてきて『えっ!?!』と思ったら、CDの入った袋の両端を持って

ゆりっぺ「はい、どうぞ♪」

観客「おおおおー!!」

KID「／(◎◎◎)／!! (うそおおおお~~~~~っ!!! !! !)」

コナン

「スゲー、ファンサービス! (驚)」

KID

でしょ?!

こっちもうゆりっぺに何回『ありがとうございます!! (早口)』  
言ったのか分かんない・・・ (^^;)

(だって予定にないんだよ!? CD手渡しって・・・!!)

その後は近くに居た母の元へと走って行って

KID『ゆりっぺからCD貰っちゃったあ~~~~ツ!!!! (大興奮)』

と叫んでしまったんですけど、その直後に観客とメンバーお二人に  
思いつきり笑われて、少々お恥ずかしい形となってしまいました (苦笑)

さらにその直後に5人くらいの歴代ファン達 (笑) がCDを買いに  
行ったんだけど、ゆりっぺは軽く無視してた・・・ (^^;)

快斗

「ファンサービスは一回きりってわけね・・・」

KID

みたいな感じですかね?

(未だにあの興奮おさまっていません (ニコニコ笑))

それでは☆彡

## 24. Answer

小五郎の迷推理から約1分後。

コナンはひたすら頭を抱えていた。

小五郎の推理内容を聞いて、この暗号の中には複数の罠要素があることは判明した。

だがそれらをいくら取り除いても、残ったものだけで推理が出来るないのである。

特にこの数字の意味が意味不明だ。

『1』から『9』までの数字の中で、おそらく犯人に繋がるものだけを並べたのだろうが、それを解く鍵が全く思いつかない。

そうしばしコナンが頭を抱え込んでいると、隣りで同じく考え込んでいた蘭が、半分心配そうに尋ねてきた。

「どう？ コナン君……。ずっと考え込んでるみたいだけど、なにか分かった？」

「ううん……。全然……」

「そう……。でも無理しないでね？ 元々これは大人用の暗号なんだと思うし……。コナン君には……。限界もあると思うし……。……」

（いや。俺、中身高校生だから……。ってか、本物のダイイング・メッセージ解いたりしてるから……）

「ううん……。何が共通点なんだろう……。あえて言うなら、上の数字は同じ数字がいくつかあって、下の数字は逆に、重なった数字がないってことくらいだけど……」

「ん……。？」



「えっ!?! この携帯電話が!?!」

「うん。あの数字は、メールを打つ時のボタンを意味してたんだ! その証拠に、あの文字の通りに上の数字をひらがなにしておいて、打ってみると……」

そう言いながら、コナンは人差し指と親指を器用に使い、文字を打ち込んでみる。

最初は『2』が4つなので、携帯で言うところの『か・き・く・け・こ』の『け』。

その次は『1』が2つなので、携帯の『あ・い・う・え・お』の『い』。

さらにその次は『4』が1つしかなかったので『た・ち・つ・て・と』の『た』。

そして最後の数は、2番目と同じ『1』が2つなので『い』。

最後にこれらを全て上から読んでみると……。

「け・い・た・い・い・い……!! 携帯っ!! 『これを使え』ってことなのね……! ……でも……、この後の数字は?」

試しに下の行の数字を打ち込んでみたのだが、そこに映し出されたのは全くあの容疑者リストに載っていた人物とは関係なさそうな名前……。

「『かはたさな』……? そんな名前の人、容疑者の中にいたっけ? ……」

「『かはたさな』は、漢字の訓読みだよ。本来その人の名前は音読み……。それを犯人に見られて消されない為に、あえて訓読みの暗号にしたんだ」

「えっ!?! ……じゃあ犯人って……」

「うん……。いるでしょ? その容疑者の中に、訓読みで『かは

たさな』って読める人が・・・」

そうコナンに言われ、蘭は容疑者リストの名前を上から順に確認してみる。

その『かはたさな』の名前になった人物は、幸運にもたった一人しかいなかった。

「渦傍・・・。3番目の『渦傍瑳那』ね！ この漢字、全部訓読みで読むと『かはたさな』になるもの！！」

「うん！ 正解だよ、蘭姉ちゃん！！」

「すごい！ コナン君！！・・・でも事件を解く鍵は？」

ドテッ！！

「蘭姉ちゃん・・・」

あまりにも普通に尋ねてくるので、コナンは一瞬その場に倒れながら、右手に持っていた携帯電話を蘭に見せる。

「あっ・・・。そっか、携帯電話ね・・・。ごめん、コナン君。灯台下暗しだったね」

（俺まで一緒にするな・・・）

「で、でも。携帯電話って、自分のでいいのかなあ？ 見た感じ、パーティー会場にはなさそうだし・・・」

「ううん。ちゃんとあるよ。このパーティー会場内に」

「えっ？」

「こっち。付いてきて！」

そう言ってコナンが駆け出しに行った先にあったのは、パーティー



会場内に設けられていた小さな受け付け場。

実はこの中に、パーティー会場内で落としたものを入れるための『落し物BOX』があるのである。

コナンは一番最初にここに目を付けた。

佐山社長が最初のゲーム説明時から『必ずこのパーティー会場内に、事件を解く鍵がある』と言っていたのだから、おそらくそれがハッキリなどでないことは確か……。

そしてこのゲームを解くための道具が『携帯電話』だったとなると、それらが置いてありそうな場所は、この落し物BOX以外に考えられない。

コナンの探偵としての『感』が、そう告げていた。

「きっとこの中だよ」

「そっか！ これなら佐山社長さんが言ってたのも当たってるね。  
・分かった。聞いてみる」

意を決し、蘭は落とし物BOXの管理者に声を掛けた。

「すみません」

「はい。なんででしょう？」

「その箱の中に、携帯電話ってありませんか？」

「……携帯電話。……ひょっとして……、このこと  
でしょうか？」

「「！」」

管理者がそう言って取り出したのは、数字の『1』から『6』にまで赤い血のりがベツトリと付けられた、白い携帯電話だった。

その携帯電話に、思わず蘭は悲鳴を上げそうになり、一歩だけ後ろに下がる。

すると管理者の男は、蘭を見ながら苦笑し、言葉を続けた。

「だ、大丈夫ですよ……。これはただの赤いインクですし、もう渴き切っていますから……。それとも、本当に携帯電話をお探しに？」

「あ、いえ……」

「その携帯電話だよ。あの暗号に出てきたのと同じ数字だけ、赤いインクが付いてるし……。これ、血痕に見立てて付けたんだよね？」

コナンがそう聞き返すと、管理者は一瞬哑然とした表情を浮かべ、二人を関心するかのような視線を向けた。

「君たち凄いねえ……。毛利さんだって、まだ全然解けそうにないのに……」

「「……えっ？」」

そう言われて振り返ってみれば、そこには一人、問題文に穴を開けてしまおうかと見つめている迷探偵の姿が……。

「お父さん……」

（駄目だ、こりゃ……）

「じゃあはい、ボウヤ。例の携帯電話」

「ありがとう！」

「君達以外にはまだ誰も取りに来てないから、きっと一番のりだよ。賞品ががんばって」

「あ、ありがとうございます！」

「行こう！　蘭姉ちゃん！」

「うん」

二人は親切な管理者に頭を下げつつ、佐山社長のいる壇上へと向かった。

## 24. Answer (後書き)

どーも☆

チーズが大好きな

KIDでーす!!

ヨーグルトとかは苦手なんです(そればかりか、牛乳とマヨネーズは一口も口に出来ないのですが) チーズだけは大好物なんです♪  
昨日あたりテレビを点けっ放しにしてたら『嵐にしやがれ』で偶然チーズが出ていて、思わず『ギャアアアッ!!』と悲鳴を上げてました(笑)

コナン

「チーズって、よくあるまがいモンの?」

KID

違うわいっ!! (怒)

(むしろあの辺はNOです! NO!!)

最近では、父がワインを開けたと同時にオードブルとして出てくるカマンベールを取り合いです(笑)

そしていつも8切れを二人で4個ずつ取り合っているの、母の分がなかとです(爆)

(酷えー・・・)

最近では青カビチーズのピザとか、あったらよく食べてます。

(あれにハチミツ掛けるとまた上手いのよ(笑) (^^))

快斗

「『オッサン』は『オッサン風』でも『洋風のオッサン』なんだな？ お前・・・」

KID

でもGARNETのイベントの日、夕食普通に居酒屋だったけどねえ」（苦笑）

（しかも普通にホッケとか、アジのたたきとか、手羽先とか・・・）

コナン

「バリバリ『和風のオッサン』じゃねえかよ！！」（笑）」

KID

どうでもいいけど二人とも・・・。

大学受験を必死にやってる女子高校生に『オッサン』はねえだろ！！  
『オッサン』はっ！！」（怒）

快斗

「あれ？ おたく『女子』でしたっけ？」

コナン・KID

「「今更っ?!」（驚）」

KID

さて、来週は・・・。

コナン

「とうとう大事件発生編!!」

快斗

(やっとここに来たか・・・(一一))

KID

悪かったね!

長くて!!

それでは☆彡

## 25. Incident

午後7時52分 杯戸シティービル 3階 パーティー会場。

コナンと蘭が壇上の方へ向かっていると、その様子を見ていた原根は、佐山の方に合図を送った。

その合図を見た佐山は、コナン達の方に視線を向けて、マイクに向かって口を開く。

「・・・おや。どうやら、もう早速一組目の正解発表者がいるようです」

（ん？ ・・・んっ！？ あ・・・あれは蘭とコナン！！  
一体何故?!）

「あれ？ あれって・・・毛利さんの娘さんと息子さんなんじゃ・・・」

「いや。息子はいないんですが・・・！！ まさかあの二人・・・！！」

そう叫んだかと思えば、小五郎は大急ぎで蘭達の元へと走り出していった。

そんな小五郎の行動に、柳川と石神も慌てて小五郎の後を追う。

一方のコナンと蘭は、二人で佐山にのみ、クイズの正解と説き方を事細かに説明。

そして、先程受け取った血のり付きの白い携帯電話を、佐山社長の手に手渡した。

「つまり犯人は、3番目に名前の載ってた『渦傍瑳那』さんってことだね？ 佐山社長」

「これが、私とコナン君の推理です」

その二人の回答に、佐山はしばし無表情で表情を隠していたのだが、やがて『クスリ・・・』と小さく微笑を浮かべると、二人に対してこう口にした。

「お見事・・・」

「やったー!!」

「コナン君、車！ 車当たっちゃった!!」

「うん！」

「蘭ー！ コナンー！」

「ん？」

「・・・お父さん？」

ふっと後ろから聞こえてきた小五郎の声に振り返ってみれば、そこには小五郎だけでなく、一緒に柳川や石神。

そしてゲームに参加していなかった、加藤や閻沼も駆けつけていた。

この小五郎による『人寄せ行為』によって、一気に壇上下の空気は暑苦しくなってきたしまったのだが、それよりもコナン達が呆れ返ったのは、駆けつけてきた小五郎の言葉。

「お前らまさか・・・。数字を足して犯人を当ててるんじゃないだろうな!？」

「「・・・はっ?」」

「やっぱりっっ!! 言っておくがなあ! あれはハズレだぞ!?!? 俺はそれで犯人を見つけることは出来たが、その事件を解くための道具が見つからん・・・。つまり! その推理はハズレだからな!?!?」

どうやら小五郎は、コナンと蘭の推理が自分と全く同じものだ勘違いしたようだ。

その小五郎の言葉に、コナンはそのまま黙っていかうかどうしようか迷っていたのだが、蘭の方は流石に黙り続けていることは出来な

かったらしく、何とも冷たい視線を小五郎に向けながら一言……。

「……お父さん……、何言ってるの？」

「僕達……、おじさんとは別の推理だけど？」

「……えっ？」

「しかも正解だったし……」

「……あゝっ!? ……ってことは……、賞品の車は……」

「貰ったよ」

「な……っ、なっ……、なっ……!! 何いっ!?」

どうにか車を貰おうと考えていただけに、余程ショックが大きかったのだろう。

小五郎は思わず絶叫しながら、その場にヘナヘナと座り込んでしまった。

一方の柳川達と言うと、それを聞いたと同時に暗号の書かれていた紙をその場に丸めて放り投げ、こちらはこちらで地団駄を組み始める。

石神に至っては、その暗号用紙をビリビリに破いてしまったほど……。

「くそっ!!」

「あの車! どうしても欲しかったのにいっっ!!」

「コラコラ……。二人とも、毛利さんに頼ろうとするからだよ。」

こういうのは、自分の力で解いていかないと……。ねえ? コナ君」

「あっ、うん……。そうだよ、闇沼さん」

と、その時だ。



チャリンッ!!

「」「えっ?」「」

「何の音・・・?」

ふっと何やら車の方で聞こえてきた小さな音に、皆はその音が聞こえてきた方向に視線を向ける。

するとそこには、何やら白い煙が黙々と吹き出ている車の下で、慌てて何かを拾っている加藤の姿が目に入ってきた。

そんな加藤の姿を見て、空かさず柳川が加藤の元へと向かう。

「加藤。何やってんだ?」

「それが・・・。小銭を車の近くに落としちゃって・・・。拾うの手伝ってくれませんか?」

「ったく・・・。しゃあねえなあ。だからいつも、ポケットにそのまま入れるなって、こっちは言ってるのに・・・」

そう文句は言いつつも、柳川は律儀に加藤の小銭拾いを手伝った。そんな柳川を見て、加藤は申し訳なさそうに苦笑いを浮かべる。

「すみません・・・。毎回毎回買い物とかでお会計やる時、いつも出し易いんでつい・・・」

「まあ、いいけど・・・。でさあ! この煙ちよっと多くねえか? もう車も登場してるんだし、出してる必要ねえと思うんだけど・・・」

「た、確かに・・・。ちよっと落とした小銭も・・・、分かり難いなあ」

確かに柳川と加藤が言っている通り、車の周りから出ている煙の量は、先程の賞品登場時の時とあまり変わっていない。

いや。

むしろその時よりもやや多くなったような気がする。

この煙は、基本的によく雰囲気を出すために使用されるドライアイスの煙なのだが、それにしたって、人のひざ下が全て白一色になってしまいう量と言うのは多過ぎだ。

正直な話、これだけ煙の量が多いとなると、この参加者全員の人体影響はないのかどうか気になってしまう。

流石のコナンも『これは出し過ぎだな』と思ったらしく、佐山にそのことを伝えた。

「佐山社長。これ、ちょっと煙の量多いんじゃない？　もう少し減らした方がいいよ」

「……確かに、ちょっと私が設定した量になってないな。

原根君。少し煙の量を少なめにしてきてくれ」

そう佐山に頼まれ、原根が煙の量を少なめにしようとした、その時だ。

突然ずっと会場横で止まっていたはずの車が、ゆっくりと……。しかし確実に動き始めたのだ。

よく目てみれば、車にはタイヤ止めがされていない。

その車の異変に、危険を感じた加藤と柳川は慌ててその場を離れた。

「う……動いてるぞ!!　車が動いてるぞ!!」

「誰か!　誰か早くタイヤ止めとサイドブレーキを……!!」

「……ッ!!　おじさん!　前!!」

「ん?　あっ!!」

慌ててコナンが指差す先。

そこには、これから車が向かってくるであろう方向に一人佇む、あの金田悟がいたのである。

「馬鹿！！逃げろーっ！！」

「うわあああああーっ!!」

車は立ったままの金田を押していくと、そのまま会場の壁の方へと突っ込んでいった。

車が大きな音と共に壁にぶつかった瞬間、辺りに真っ赤な鮮血が飛び散る。

そこには、クリーム色の壁に真っ赤な鮮血が大量に飛び散り、壁にぶつかった車に押し潰される形で絶命している、金田の姿……。盛り上がっていたはずの記念パーティーが、一瞬にして地獄と化す。

女性達が上げたこの悲鳴が、全てが『現実』であることを、その場にいた人々全員に告げていた・・・。

## 25. Incident (後書き)

どーも☆

好きな寿司ネタは子持ち昆布・とびっこ・カンパチ・イカの  
KIDです!!

このところよく近くの小僧寿しに行くのですが、基本的に今例で挙げた大好物の2品しか食べられません(涙)

(『子持ち昆布』最近寿司ネタで見ないけど、まだやってるお店あるんかなあ)

快斗

「おえっ・・・(吐) 俺気持ちワルイ・・・」

コナン

「どれだけ魚ダメなんだよ!(呆) いい加減慣れろよなあ。それくらい慣れとかねえと、いつかコナンで当たり前にお前が登場するようなことになった時、交流的なものできねえぞ?(↑仕事場での話・・・)」

快斗

「焼肉屋でもいいじゃねえかよっ!!! お好み焼き屋でもいいじゃねえかよっ!!!」

由利

「あっ。私、その辺大好き♪」

七

「えっ・・・。ウチ食べられへん・・・」

古井

「ああゝ……。お肉食べませんもんねえゝ」

由利

(o r z . . .)

岡本

「あえてのフランス料理とかは？」

コナン

「ああゝ……。だったらカルパツ」

快斗

「それを言うなあーっ！！ どう考えてもそれは海鮮だろおーっ？  
！ ついでにそれはイタリア料理だあーっ！！ (笑)」

K I D

「. . . . . そうだっけ？ (ウロ覚え. . .)

それでは☆彡

## 26. Search

午後8時07分 杯戸シティービル 3階 パーティー会場。

蘭からの連絡により、事件発生から5分後。

顔馴染みでもある目暮警部と高木刑事が、現場へと到着した。

到着して早々、高木刑事は資料として書き留めた警察手帳を開き、目暮警部にこの事故の状況を説明する。

「死亡したのは、今日このパーティーに参加されていた金田悟さん。28歳。死因は、車との衝突による追突死……。状況から見て、ほぼ即死だったと考えられます」

「うむ……。死亡推定時刻は？」

「はい。蘭さんからの電話がその直後だったようですから……。午後8時02分頃ですね」

その情報を聞いた後、目暮警部はふっと視線を変え、ある人物をジト目で見つめた。

「で？ また第一発見者が、例にもよって君なのかね？ 毛利君」

「ええ、ああ……。まあ……。どうやら、事件はこの名探偵を呼んでしまうようですなあ！？ ハッハッハッ！！」

「……。連れてきてるの間違いじゃないのかね？」

（しかもそこは『名』じゃなくて『迷』だろ？ おっちゃんの場合は……）

そんな雑談はさて置き、目暮警部は再び事件の方へと話を戻した。

「ところで……。どうして毛利君が、こんな薬品会社のパーティーに参加しているんだね？ また睡眠薬のCMか？」

「あ、いえ……。仕事ですよ」

「ん？ 仕事？」

「はい。実は8日前に、こちらの佐山圭蔵社長宛てに、殺人予告のような手紙が届けられておりまして……。それで佐山社長の援護を依頼されたんです」

小五郎はそう言いながら、背広のポケットに仕舞っていた例の予告状のコピーを手渡した。

何かあった時の為に、佐山社長にお願いをして取ったものだ。

目暮警部はしばしその内容に目を通すと、それを小五郎に返しながら尋ねた。

「この手紙は、一体何処に入っていたものですか？」

「私の職場のポストの中に……。私の秘書の原根君が、それを見つけて……」

佐山がそう答えると、原根は首を縦に一回だけ動かし『その証言の通り』だと主張した。

「しかし……。実際に死んだのは佐山社長ではなく、この『金田』という男の方じゃないか」

「ええ、まあ……。ですから私も驚いてて……」

ふっとここまで事件の内容を黙って聞いていた高木は、少々あることが気になり、参加者達に尋ねた。

「あの……。どうしてパーティー会場の中に車があるんですか？

ここ、薬品会社のパーティーだったんですよ……。ねえ？」

「暗号ゲームの賞品です」

「ん？ ……『暗号ゲーム』？ なんだね、蘭君。その暗号ゲームというのは……」

「佐山さんが考えたゲームです。紙に書かれた暗号クイズを一番早く解いた人に、この車を賞品として渡すことになっていたんです」



蘭がそう答えると、その後続くように柳川・石神・加藤・闇沼が、事件の状況を説明し始めた。

「で、その時車の下から出てた煙の量が凄かったんで、原根さんが止めに行こうとしたんですよ。そしたら何故か、ポップアップの台座から車が走り出してしまっただけ……」

「それで前の方を見てみたら、あの金田さんが車の前に立ってて」

「毛利さんが『逃げろ！』って言ったんですが……、間に合わず……」

「そのなれの果てがこれですよ」

「な、なるほど……」

その内容を聞いて考え込んでいると、突然小五郎はこんなことを口にした。

「警部殿……。これは状況から考えても、単なる事故ですなあ……」

「ん？ 何故そう言い切れるんだね？ 毛利君」

「まず、今回死亡するはずだった人間は、佐山社長だった……」

しかし、佐山社長は今回襲われていないどころか、殺されてもいない……。つまり、まだ佐山社長を狙っている犯人は何も行動を起こしていない。もしくは、最初から殺す気などなかったということになる……。狙っていたのは別の人間を殺すなど、わざわざこんな脅迫状まで作っておいて、やることではないでしょう。それに今回は、ポップアップ台が微妙に傾いていたことにより、車が勝手に動き出してしまった。タイヤ止めはされていたにしろ、これは単なる設計者の不注意です……。事故と考えるのが打倒なんじゃないっすかねえ」

「……。うーん……。まあなあ……」

「本当に単なる事故なのかなあ……。これって……」

そのコナンの小さな呟きに、小五郎はジト目で反発した。

「んっ？！　なんか文句あんのか、コナン？！　いいか？　こういう風に車が勝手に動き出すっていうのは、『サイドブレーキの掛け忘れ』つつつてな。よくある話なんだよ！　んな小さなことに一々疑問持ちまったらなァ！　すぐに解決できるはずの事件だって解決できなくなんだぞ！？」　毎回毎回事件性の疑い掛けんじゃねえ！！」

「僕だって『事故じゃない』っていう証拠を見つけたわけじゃないよ！？」　だけど・・・」

「？　『だけど』？　・・・どうしたの、コナン君？」

「・・・・・・なんか・・・・・・、なんか似てない？」

「何が？」

二人が同時にそう尋ねると、コナンは静かにこう口を開いた。

「あの脅迫状の・・・・。文章に・・・・」

## 26. Search (後書き)

どーも☆

車やバスに乗るのが大好きな

KIDでーす!!

別に鉄道とかのファンではありません。

ただ乗り物に乗って、静かに外の景色とかを見るのが好きなんです  
(^^)

特に車とか電車とかの窓の外を見るのは一番好きです♪

よく母に『車とかに乗ると静かになるわねえ』と言われますけど・  
・。

(逆に騒がしいと、イライラして機嫌が損なわれることが多いです。  
私・・・(苦笑))

コナン

「ところでとうとう・・・。投稿日金曜にズラしたか・・・」

KID

うん、だってさあ!

- ・ 日本語(国語)・・・小論文9月中
- ・ 選択火曜3・4時間・・・評価表9月中
- ・ 選択火曜5・6時間・・・同じく
- ・ 選択木曜3・4時間・・・同じく
- ・ 選択木曜5・6時間・・・同じく

・数学・・・同じく  
・理科・・・同じく  
・英語・・・同じく

（今後も社会とか体育とか音楽で出そうだし・・・）

そしてその他に、毎週水曜日に塾の宿題！

（入試の時の小論文練習）（＋０＋）

さらに来月の学校の行事やら、選択授業で作成しているものやらのこともあつて、どう頑張っても（・・・）φしている暇がなく・・・。

仕方なくです・・・はい・・・（涙）

（去年とか一昨年とかは早めに終わらせてたんだけど、今年に入って内容ムズくなってきたんだよねあゝ・・・（１ー１）

まあ何がともあれ、落ち着いてきたらまたいつものペースに戻ります♪

それでは☆彡

快斗「ちよっと！！ 俺コレ出てるのに！ 俺の出番はっ!？」

## 27. Contact

「た、確かに・・・」

「言われてみりゃあ・・・」

「あの脅迫状に書かれていた『貴様を自身の血で真っ赤に染めてやろう』という下り・・・。コレとそっくりですね・・・」

コナンのその一言で脅迫状の文章を読み直した目暮、小五郎、高木は、口々にそう言葉を漏らした。

確かにこの脅迫文に書かれていた『貴様を自身の血で真っ赤に染めてやろう』という部分は、まるっきり今回の現場の状況とそっくりだ。

それにこの脅迫状には、狙っている相手が『佐山社長』だとは一言も書かれていない。

目暮警部は再度脅迫状を読み直すと、小五郎達に問い掛けた。

「まさかこの脅迫状・・・。本当は金田氏に対して送ったものなんじゃないのかね？」

「さ、さあ・・・？ まあ・・・、確かに『佐山社長を殺害する』とは、書かれてないっすけど・・・」

「だったら何故・・・、私のポストの中にこんな手紙が？」

「・・・何故でしょうねえ・・・？」

（おいおい、聞き返してどうすんだよ・・・）

「そもそも・・・、これがまだ『他殺』なのか『事故死』なのか、それすらも分かってないですしねえ・・・」

高木がそう口にしながら後ろ髪をペンで搔いていると、ふっとその言葉を聞いた蘭とコナンは、あることを思い出した。

それは、金田が車によって死亡するほんの少し前・・・。

「そう言えば、あの人……。何か車の前でやってたような……」  
「……うん……。僕もそんな気がする」

「ええっ!？」

「なんだ、蘭!! コナン!! 一体金田さんは何をやってたんだっ?！」

「『何を?』って訊かれても……」

「ほとんどあの煙のせいで見えなかったよ」

「それに目を合わせたら怖いと思って、あんまりよく見ようとしなかったし……」

実は車で潰される直前、金田はその問題のロールスロイスの前の方で、何かを頻りに確認しているかのような行動を取っていたのだ。感じとしては、何となく車体の前の方を観察していたようだったが、そこまでハッキリとは見ていない……。

ただ、そこで何かをやっていたのは確かだ。

「それだと、自然と『自殺』という線も出てくるなあ……。問題の車で何かをやったのだとすれば、車をあえて自分の方に走らせようにすることも出来るだろう」

「そうっすな……。ん? 蘭、コナンのヤツはどこ行った?」

「えっ……。? あれ? さっきまでここに……。……。コナンくん?」

その頃コナンは、一人血まみれとなった車体の近くへと向かい、車の前の方を見に行っていた。

とは言っても、車体の前の方は壁に半分めり込んでいて、正直前の方を確認することは出来ない。

ちなみに遺体はというと、どうやらもう既に別の場所に移されてし

まっているらしく、車の下にはスーツの一部と血痕しか残されていなかった。

（絶対に・・・、絶対に何かあるはずだ・・・！ 金田さんが取っていた行動の秘密を探るための何かが・・・）

ふっとコナンの目に止まったのは、女神を象ったロールスロイスのエンブレム。

そのエンブレムの取り付けられている箇所、小さな線のような溝が付いていたのだ。

しかもその溝は、きれいにエンブレムの周りを一周している。

（なんだ？ この溝は・・・）

「コラーッ！ コナーン！！」

「えっ？・・・おわっ！！」

「勝手にちょこまかちょこまかすんじゃねえー！！ 捜査の邪魔だろーがっ！！」

そう言ってコナンを持ち上げながら怒鳴る小五郎に、コナンは酷く顔を顰めつつも、問題のエンブレムを指差した。

「ねえ、ねえ！ 見てよ、おじさん！ あのエンブレムの下に、なんか小さくて細い溝があるよ？！」

「バーカー！！ 車のエンブレムってのはなァ、外れるヤツもあるんだよ！ 基本的にネジ式だから、これもその類だろ？・・・」

「うわぁーっ！！・・・イテッ！」

「コ、コナン君・・・！！」

慌てて小五郎に放り投げられたコナンの元へ向かいながら、蘭は心配そうに様子を窺った。

「大丈夫？ コナン君・・・」

「う、うん・・・。もう慣れたよ、投げられるの・・・」

「蘭！ ソイツから目を離すなよ！ ほっとくとすぐまたどっかに消え・・・。」

「もう！ 毎回毎回コナン君を投げ飛ばさないでよ！ お父さんっ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・？ お父・・・、さん？」

ふっと何故か無言になってしまった小五郎に、蘭は小首を傾げた。そんな蘭の足元に座ったままのコナンも『今度はどうした？』と、小五郎を怪しげな目で見つめる。

（ひょっとしておっちゃん・・・、まさかまた変なことに・・・・・・）

案の定、コナンのその悪い予感は的中した。

「そうか・・・！！ 分かりましたよ、警部殿！！ 金田悟氏の死亡原因が！！」

（ほーら・・・。やっぱりマズイ・・・）

あまりにも自信有り気にそう口にする小五郎に、コナンは本日何度目かの頭痛を感じた。



## 27. Contact (後書き)

どーも☆

海と山だと海が好きな

KIDでーす!!

特に磯が好きです(^^)

(いろいろな生き物いますしね。フグとかヒトデとかウニとか・・・)

運がいいとウツボやチョウチョウオもいたりなんかして(笑)  
今年は逗子海岸にライブで行ったつきり、海には行っていません・・・。

(来年の夏は絶対に行ったらー!(爆))

そして話は変わり、ドラマ版のコナンが昨日で完全終了。

『小さくなった後の話はまた別の機会に』と言っていたけれど、何となくやらん気がするのは私だけ?(笑)

(やったとしても、また声優さんが吹き替えかなあ)

←以下ネタバレ(含)

そして最終回のあの新一の信じられん場面には正直(困惑!!)

(小説の方はどう書くつもりなんやろ・・・)

そして何気に、コナンと新一のキャラ掟を破る部分もスラッと出て来ちゃったし・・・。

（泣くの早いよ!!↑（ネタバラしてスンマセン・・・。でも実際  
そう思ったんだもん!!（爆）

ここも小説の方では是非チェックしたい部分（・・・）（どれどれ  
？）

ただ平次と和葉はもう申し分なし！

特に和葉、めっちゃ様になってました（笑）

（あれは蘭より恐い・・・）

以上、ドラマ感想でした♪

（何故この場で？（笑））

来週はおっちゃんの推理が・・・っ!!

それでは☆彡

コナン・快斗

「「俺らの出番は?!」」

## 28. Accidental death

「分かりましたよ！ 警部殿！！ 金田氏の死亡原因が！」  
小五郎が自信有り気にその声を発すると、目暮警部は『待ってました！』と言わんばかりに、その話に食いついた。

「おお！ やっと分かったか！！ それで！？ 君の推理はどんな内容だったんだね！？」

「ズバリ、金田氏は自殺でも他殺でもありません……。事故死です！！」

「じっ……。事故死？ 結局は……。事故死なのかね？」  
なんだか半分期待し過ぎたような反応を見せる目暮警部に、小五郎は構わず自分の推理の話を続けた。

「はい！ おそらく金田氏は、あの暗号ゲームの答えがこの車であると推理をした。きっと、この車種自体が答えであると思い込んでしよう。今回のこの暗号ゲームは犯人を当てると同時に、その事件を解く鍵となっている物も持っていないといけない……。おそらく金田氏は、それでこの車を壇上前まで持っていたとしたんです」

「そんな無茶な……。それに、それなら車のエンジンを掛けて動かした方が……」

そう目暮警部が言い掛けると、小五郎は右手の人差し指を左右に動かしながら『チッ チッ チッ チッ』と口にしながら、ふっとズボンのポケットの中から何かを取り出す。

小五郎が徐にズボンのポケットから取り出したモノ……。それはあの、ロールスロイスの車のキーだった。

「これはあのロールスロイスの車のキーなんですが、こちらは事故当時、車には差し込まれていませんでした。実は事故が起こるその瞬間まで、秘書の原根さんがずっと管理していたんです。そうですね？」

「え、ええ……。車をポップアップの台からせり上げる際は、演出上の関係でライトを点ける為にしばしエンジンを。ですがそのあとは一度も……」

「つまり、車にエンジンを掛けて動かすことは一切出来なかったわけです。それに、金田氏はかなりの乱暴者で、よく交通違反的な運転などもしていた……。そんな人間が、あんなゲームの賞品とは到底呼べないような高級車に乗り込んでいたら、我々だって黙っていませんよ！」

「確かに……。だが、それなら車の前に歩いていった時点で、周りの誰かが気付くんじゃないのかね？」

「ええ、普通であれば……。しかし事故当時は、この車の下からかなりの量の煙が出ていました。その煙に包まれた状態で屈んでしまえば、誰にも姿を見られることはないでしょう。現に我々も、ギリギリまで金田氏が車の近くにいたことに、一切気付きませんでしたから……。しかしその車を引っ張ろうとしていた時に、佐山社長が『煙のスイッチを切ってくれ』と、原根さんに指示を出した。それで焦り過ぎた結果がこれです」

毎度のように状況だけは合っている小五郎の迷推理に、コナンは小首を傾げる。

いくらなんでも無理やり過ぎる内容が多すぎる……。

そもそも車を壇上の真ん前に引っ張っていくこと自体が無理だ。どう考えても危険すぎる……。

ふっとコナンがそんなことを考えていると、たまたまその煙のスイ

ツチを調べていた高木刑事が、現場の方へ戻ってきた。  
どうやらまた新たな痕跡が見つかったらしく、高木刑事は目暮警部  
達の方に戻ってくるや否や、すぐさま警察手帳を開き、情報を読み  
始める。

「目暮警部！ たった今、その問題の煙のスイッチを見てきたん  
ですが・・・」

「うむ。それで、どうだったんだね？」

「それが・・・。実はその煙を出す装置が、何者かの手によって壊  
されていたようなんです」

「何っ!？」

「「「えっ!？」」」

さらに高木刑事が調べた情報によると、そのスイッチには電源を切  
った時に付いたと思われる原根の指紋しか付着しておらず、それ以  
外の人物のものは全て拭き取られていたのだという。

また、そのスイッチなどの管理を行っている場所には誰も人がいな  
く、目撃情報は一切ないとのことだった。

「ということは・・・。誰かがその装置を壊し、煙の量を増やした  
ということになるな・・・」

「ほら！ これぞ私の推理通り!!」

そう言って手のひらを『ポンッ』と叩く小五郎に、蘭はふっと宙を  
仰ぐ。

「でも・・・。車を手で引っ張ってたり、動かしてたりしたら、  
逆にそっちの方が目につくと思うけど？」

「うん。そもそも普通は一人じゃ動かせないよね？ 蘭姉ちゃんみ  
たいな人でない限り・・・」

「うーん。確かにって・・・。私も無理だよ?! コナン君!」

（嘘吐け・・・）

「それに・・・。その車が勝手に動き出した原因は？」

高木刑事が先程から気になっていたかのようにそう問い掛けるので、小五郎は半分嫌々ながらに答える。

正直、コナンにも最初の段階で似たようなことを訊かれていたので、この問いで答えるのは2回目だ。

「ただ単に、サイドブレーキかなんかを掛け忘れたんだろ？ この手のはよくあるからなあ・・・」

「何言ってるのよ、お父さん！ 車のタイヤには、ちゃんと車止めが挟まってたじゃない！」

「だから・・・。『車止め』っていうのは、嵌める位置を間違えると勝手に動いっちゃうものなんだよ！」

「それはそうかもそれないけど・・・」

イマイチ納得がいかない蘭と高木刑事は、お互いに顔を見合わせる。一方の小五郎の方かというと、徐々に自分の推理が崩れていくような気がして、思わず額から出てきた汗をハンカチで拭き始めた。

そんな小五郎をジト目で見つめつつ、コナンは最後に、小五郎の迷推理の矛盾を突き出す。

「その前に・・・。もし車がこの暗号ゲームの事件を解く鍵なら、これはパーティーには向かないんじゃない？ 車を人の手で引っ張るだなんて、そもそも無理があり過ぎるし・・・。仮にアレを壇上の方に持っていこうとしたのであれば、金田さんが引っ張ってた方向は壇上のある方とは逆だよ！」

「た、確かに・・・」

「これで根本的に、毛利君の第一推理はハズレだな・・・」

「そっ・・・、そんな、警部殿・・・！！」

（ハハハ・・・。そもそも最初の無理がある時点でハズレだろうが）ただこの推理で、いくつか気付いた点もある。

まず第一に、何者かが煙の装置を壊し、あえて煙の量を増やしていたこと。

その人物は、指紋を拭き取るなどの完璧な隠蔽工作を行うなど、ある程度のことを計画的に行っていたこと。

賞品の車はサイドブレーキだけでなく、車止めの止め方も不十分だったこと。

そして何より、死亡した金田悟はその車の近く、もしくは車で何かをしていたということだ。

ただその煙の装置を壊した人物が、今回死亡した金田悟だと断定することはできない。

いや、むしろ・・・。

先程から上がっていた『自殺』なのだとすれば、その指紋を消す必要性は何処にもない。

となれば、残された可能性は『事故死』か、あるいは何者かによる『殺人』のどちらか・・・。

（どうやら・・・。この『車が』という線は、強ちハズレでもなさそうだな・・・）

何処までも蒼い大きな瞳を揺らしながら、コナンは未だ壁にめり込んだままの車を、ただただ無言で見つめた・・・。

## 28. Accidental death (後書き)

どーも☆

眼鏡よりもコンタクトレンズ派の

KIDでーす!!

ちなみに、こちらは普段ソフトコンタクトです。

『眼鏡も似合う』とよく周りから言われるのですが・・・。

どうにもあれは鼻の付け根に重量を感じるので(苦笑)

その代わり、夜寝る前にはコンタクトを外してしまうので、外した後はあまり度の合っていない眼鏡を掛けています(^| ^;) (結構近いものを見るだけなので、多少度が合っていないことも丁度

いいんです)

コナン

「ってことは・・・。実際はめっちゃくちゃ目が悪いんだな？」

KID

うん・・・。

とりあえず目の前のものみんなピンボケ? (苦笑)

普通に人の顔とかだと、目と眉は肌色のモヤが掛かり過ぎてよく見えませんね。

(キッド様なんて何処からが首なのか衣装なのか・・・)

コナン



「ま、まあ……。あれは身体の90%が衣装で隠れてるからな（呆）」

快斗

「おい！　そこまで隠れきつてはいねえよっ！！　しかもそんだけ隠れてたら、俺変質者じゃねえか！！」

コナン・KID

「「の前に泥棒だろ……。」」

KID

それでは☆彡

## 29. A m n r d e r

「ま、まあ……。多少のゴタゴタはありましたが……。いずれにしろ事故でしような。目暮警部殿」

「……。うむ……。そうだな……。多少現状で引っ掛かる箇所はいくつかあるが、みな『事件性』というよりかは『事故』の方が近いような状況だしな」

「ええ。それに、実際に亡くなられた金田氏自身が、この事故を起こした車の近くで何かをやっていたのだとすれば、それはこの人自身が招いた不運な事故か自殺、と見るべきでしょうね」

「うむ……。よし、高木！」

「あつ、はい」

「捜査員全員に、周りの後片付けをさせるように伝えておいてくれ。本件は事故死だ」

「ああ、はい！」

そう口にして捜査を切り上げようとしている目暮警部達を、ある人物は顔に出さぬよう気を付けながら、胸中で安堵の表情を浮かべた。

（これで事件は事故として片付けられる……。これでいいんだ！　これで……。）

そんな表情が、真犯人でもある人間の本性から徐々に湧き上がってくる……。

しかし、そんなあまりにも早く捜査を切り上げようとする警察に、彼は迷うことなく待ったを掛けた。

「ええーっ!?　もう捜査止めちゃうの?　まだ腑に落ちないところがあんなにあるのに?!」

（!?!　……。あの子供っ……。!）

ふっと胸中で安堵の表情を浮かべていたその人物は、コナンの口から出てきた思いもよらぬ発言に、思わず表に出ている方の顔までもを曇らせた。

だが一方のコナンの方は、顔は満面の笑みを浮かべてはいるものの、その目は未だに鋭く光ったまま。

まるで今すぐにでも、犯人を捜し当てていまおうか、という表情だ。そんなコナンの表情に、真犯人は表情をさらに引きつらせる。

（なんだ・・・？　・・・あの何もかも見透かしているのかのような目は・・・）

「もし僕が警察官だったら、その腑に落ちないところなくなるまで、この場所の捜査はやるよ？」

「ちょっ・・・、ちよつと、コナン君！」

「コラーッ！！　コナン！　またお前は勝手にい・・・！！」

そう叫びながら自分を捕まえようとする小五郎の手を、コナンはひよいひよいと軽くかわし、目暮警部の顔をジッと見上げた。

そのコナンの視線に、思わず目暮警部は苦笑いを浮かべる。

「いやなあ・・・、コナン君・・・。確かに、この事件にはちよつと不可解なところはあるがね。毛利君がさっきの推理で言っていたように、暗号の答えがこの車であると思い込んで、金田氏が何らかの行動を取ろうとして失敗してしまったという推測は、強ち間違いないと思うんだよ。それなら一応、煙のスイッチが壊されていたことも、金田氏が車の近くで何かをやっていたのも、全て説明がつくから」

「でもさあ。この人最初からこの暗号ゲームの答え知ってたみたいだったよ？　ねえ、蘭姉ちゃん？」

「えっ？」

いきなり話を振られ、蘭はキョトンとした表情を浮かべるばかり。

そんな蘭に、コナンはパーティー会場にいた時の金田悟の様子を話した。

「金田さん。『パーティーの景品を貰ってから帰る』って言ってたよね？ それって・・・、最初からこの暗号ゲームの答えを知っていたから、あえてそう言ったってことでしょ？ そうでもなくちゃ、まだ暗号の内容も確認していないのに、そんな威張ったこと言えないもん！ 言って外しちゃったら、おじさんみたいに恥かくだけだし・・・」

「おい・・・。最後の一言は余計だ」

そう小五郎が突っ込んでみても、コナンは一切お構いなし。さらにはこんな関係のない話まで、コナンは目暮警部達に話し出した。

「それにこの人、絶対に車なんか持たせちゃいけないよ！ だってこの人、この前歩美ちゃんを車で轢き殺そうとした、すごく悪い人だもん！」

「ん・・・？」

「『車で』・・・？」

そのコナンの証言を聞き、目暮警部と高木刑事は思わず顔を見合わせた。

「と言うことは・・・!!」

「もしかしてこの『金田悟』って言う人・・・！ あの乱暴運転で問題になってた、あの金田悟さんなんですか!？」

「あっ、はい。前にコナン君がそう話してて・・・。その時は、たまたま通り掛かった高校生の少年に助けてもらったみたいなんですけど・・・。あともう少しで本当に轢かれていたって」

「んで、コナン？ それと今回の事故が一体どんな関係あるって言うんだよ！ オメーの発言の方が支離滅裂じゃねえか!!」

「だからさあ……。そういう人って親戚とか。職場とか。その周りとか。色んな場所が多いと思うよ？」

「「何が？」」「」」

中々結論を言おうとしないコナンに皆が問い掛けると、コナンは両腕を首の後ろに回して組ませ、柳川達を含めた6人に対して、こう言い放った。

「金田悟さんを、心の底から恨んでる人……」

## 29. A m n r d e r (後書き)

どーも☆

米・モモ・リンゴ・味噌汁の大根は固めが好きな

K I Dでーす!!

ちなみに柔らかいのは苦手なのが多いです ( ^ | ^ ; )

(おかゆとか・・・、バナナとか・・・)

コナン

「ところで、受験はどんな感じ？」

K I D

小論文ムズい!! (本音)

(今はその学校の推薦で過去に出てきた小論文やってるんですけど、古い内容に行く度にムズくなってきてます。なんか文章もザックリした感じになってるし (苦笑))

快斗

「まあ・・・、いざとなれば一般つつう手も」

K I D

無理・・・。

英語はウチ、アカン・・・ ( \_ | \_ ; )

(他の4教科も得意なの一切ないけど、でも英語に関しては絶望的・  
・・)

コナン

「じゃあなんでこの小説の1話ごとのタイトル、英語でやってんだよ?!」

KID

いや、勉強がてらにちよつと・・・。

(もうほとんど最初の方の意味は忘れ掛かってますけどね(へへ；))

快斗・コナン

「ダメじゃん・・・」

KID

そ、そんなテンション←にしなくてもええでしょ!?(怒)

コナン

「・・・・・・・・・・それよりも次回予告やらねえ?」

KID

はいはい・・・(ーー)

来週は容疑者6人の、金田悟に対する恨み暴露予定です!

(でもあんまり犯人当てる決定的な内容はないかも・・・)

それでは☆彡

### 30. Suspect

午後8時26分 杯戸シティービル 3階 パーティー会場。

「金田さんを心の底から恨んでる人……。ここにも大勢来てたよね？」

そう口にするコナンに、蘭は慌てて駆け寄る。

「ちよっ……。ちよつとコナン君！ ダメでしょ！ そんなこと言っちゃ……。」

「そういえば蘭姉ちゃん。今日この会場で金田さんと喋ったりしてたのって、ここにいる6人だけだったよね？」

「えっ……。？」

「あの人僕達から離れた後、誰とも会ってなかったし、喋ってもいなかったみたいだから。接触したのはこの人達だけだよ？」

「なんだと！？ このガキ、俺達を疑ってるのかぁ！？」

ふつといきなり容疑者のような感じに話を持っていかれ、柳川はキレ顔晒しっ放しのまま、コナンに怒鳴り散らす。

だがコナンはそんなことで怯むことは決してない。

現に今も、泣きもせず、喚きもせず、隠れもせず、普通の小学生なら考えられないような鋭い視線で、逆に柳川の方を睨み返していた。その視線に柳川の方も『チッ』と舌打ちをする。

「コイツ……。本気で俺達のこと疑ってやがる……」

「まっ……。まあまあ、柳川さん。どうせ子供の言うことっすから……。おい、コナン！！ もう少し言葉には気を付け」

「だが確かに……。コナン君が言ってたことも一理あるなあ……」



その目暮警部の言葉に、小五郎を含めた7人は『えっ?』という声を漏らした。

だが冷静に考えてみれば、相手はかなり荒れた乗り方をするベンツドライバー。

そして米花町や杯戸町では度々トラブルを起こしていた人間だ。

迷惑をこうむっていた人間や、恨んでいるであろう人間がいることなどを考えると、まだこの事件をただの『事故』として処理するのは早い。

それに、未だに引っ掛かる箇所もいくつもある・・・。

『他殺』という線が浮かんだあとの目暮警部は、素早く行動に出た。

「念のための参考捜査ですが、あなた方から事情を聞いてもよろしいですか? コナン君が言うには、被害者と接触したのは、あなた方6人だけのようですので」

「ハア?! 警察もガキの言ったこと信用すんのかよ!?!」

「だからあくまでも『参考捜査』と言っているでしょう? それに・・・。何かとコナン君の一言は、いつも事件解決のヒントになっているからねえ」

そう目暮警部が横目でコナンの方を見て言うと、コナンはニカッとした笑顔を浮かべた。

だがそんな言葉で納得がいかないのはこの6人だ。

「そ・・・、そんな・・・っ!?!」

「ガキの言葉を信用すんのかよ!?!」

「それにたとえ『参考捜査』であったとしても、これじゃあまるで犯人扱いですよ!?!」

「まあまあ・・・。とにかく事情を聞くだけです、よろしくお願いします」

「それとも……。何か調べられてはマズイものでも？」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

その最後の一言が効いたのか、6人は渋々ながらも捜査に応じてくれた。

まず最初に行われたのは、6人の金田に対する事情聴集。

実際皆それぞれ恨みのようなものを抱えてはいたようだが、その詳しい内容までは把握し切れてはいなかった。

そこでまずはそれらの情報を全て把握することから捜査を行うことになったのである。

最初に事情聴集を行ったのは、金田の引き取り手でもあった親戚。佐山からだった。

「悟は、私の義理の息子です。私の妻が一旦別れ、別の男との間に生まれた子なんです……」

「何故、あなたが引き取ることに？」

「はい……。実はその妻が私の元に戻ってきたんです。その男と別れて……。ですがその3年後。その妻が病気により他界し、男の住所も掴めなかったということもあって、私が父親代わりに……」

ふっとそこまで話した辺りで、突然佐山の表情が全く別のものへと変わり始めた。

「しかし悟は、私の金を湯水のように使い、挙句の果てには乱暴運転などで死傷者までも出し始めたんです！！ ついには警察沙汰にまで……。ですが、流石に殺すだなんてことはしませんよ？！

精々……。勘当くらいで縁を切るだけです」

「……。そうですか」

次に行われたのは、佐山の秘書でもある原根。

「私は秘書の身ですので、それほどの恨み等はございません。ですが……」

「？……『ですが？』 なんですか？」

「いえ……。ただ社長自身の努力等を知ろうともせず、その財産を使い遊んでいる悟様を見ていると、時々憤りを感じることがあるのです。勿論、殺そうとまでは思いませんが……」

「そ、そうですか……。分かりました」

3番目の事情聴集相手は、先程から怒鳴りっ放し&キレっ放しの柳川。

「俺は、前に自分の車を傷付けられたり、居酒屋にいた時に『ここは俺様の席だぁーっ!!』って酔ったアイツに怒鳴られて、思いっきり蹴り飛ばされたことはあったけど……。殺すほど恨むだなんて……」

そんな柳川の発言を聞いていた小五郎は、ふっと最初にこの6人と会った時のことを思い出した。

確か柳川はこの仕事に就く前。

そこそこ腕のある内科の医者だったはずだ……。

では何故その内科を止めてしまったのだろうか。

ただ単に金銭的な問題なのだろうか。

それとも……。

「失礼ですが、柳川さん……」

「ん？」

「以前、あなたは内科に勤めていたとお聞きしたんですが、辞められたのは一体どういった理由で？」

「!」

それを聞いた瞬間、柳川はかなり驚いたような表情を浮かべ、ゆっくりと理由を話し出した。

「・・・腹が痛いから、早く順番を回して診ろ!」って、アイツが俺の病院で暴れ回ったんだ・・・。それで、客足がどんどん減っちゃまって・・・。ただの酒の飲み過ぎによる腹痛だったのによ・・・。あっ! だけど俺はこの会社に勤められて、今は何不自由なく暮らしてる。だから、あの野郎を殺す気はねえからな!? たとえ他殺だったとしても、俺は犯人じゃねえからな!」

「それを決めるのはあなたではなく・・・。我々警察の方ですよ」

その次の相手は、6人の中で一番年の若い加藤。

「ぼ・・・、僕は普段カプセル作りのバイトのような仕事しかしてないので、全くと言っていいほど、あの男には会いませんよ?

まあ、時折乱暴な運転をしているところは見たりはしましたけど・・・」

「本当に恨んだりはしていませんなあ?」

バリッパリの疑い眼で目暮警部は加藤を見つめたが、加藤はこめかみ近くを指で掻きつつ『そうですねえ・・・』呟くだけ。

最終的に出てきた言葉は、前の柳川と似た内容だった。

「まっ・・・、まあ・・・。柳川さんと同じように、車に悪戯のような傷を付けられたことはありませんけど・・・。今になって考えてみると、あれが金田さんがやったっていう証拠もないですね」

「・・・うむ。なるほどな・・・」

その次はとなったのは、兄と二人でこの佐山薬品会社で働いているという石神。

「私は……。現場あの男に、お尻を触られたことがあります・・」

「「「ええええーっ!!」」」

あまりにも衝撃的過ぎる石神の発言に、目暮・高木・小五郎の3人はただただ声を上げた。

「完全なセクハラ行為じゃないですか!」

「何故それを警察に?」

「言っても無駄じゃないですか! 警察はすぐには動いてくれないし・・・。それに、そんなことをしたら余計に酷くなる!」

「だから殺したんですか?」

「違います!! 流石にそれだけじゃあ、人は殺しません・・・。殺したいとも思わないので・・・」

そして最後の一人は、6人の中で一番年齢が上の闇沼。

「私の場合は、あの男の噂によって、店の評判を落とされたことはあります。ですが、今でも美術館は健在ですよ? お客さん達は、評判よりも美しい宝石や美術品などを見たがっていますから・・・。だから恨んであの男を殺しても、何にもならないでしょう?」

「ま、まあ・・・。それはそうですが・・・。評判を落とされたというのは?」

「まあ・・・。ちょっと『模造品』だとか『ガラクタ』だとか『レプリカ』だとか・・・。その手の噂を流されたり、美術館内で暴れたのが原因ですね」

「・・・。ほう。分かりました。どうぞ、退席してもらって結構です」

「はい」

最後の事情聴集人でもある闇沼が出て行ったところで、目暮警部達

は椅子の背凭れに寄り掛かりながら、溜息を吐いた。

「どうだね、毛利君……。誰かピンツと来る人物はいたかね？」

「いえ、全然……。全員恨んではいましたけど、なにせその度合いがマバラすぎるんで……」

「そうだな……」

「もう少し、あの6人のことを調べておいた方がよさそうですね」

「ああ……。これはワシの勘だが、おそらく今言った恨みの内容は、この男に対しての恨みの全てではないだろう……。いくつか、隠しているような気がする……」

そんな目暮警部達の会話を、小五郎のネクタイに付けた小型盗聴器で隠れて聴いていたコナンは『同感だな……』と、胸中のみで呟いた。

### 30. Suspect (後書き)

どーも☆

コップの飲み物は基本一気飲みの

KIDでーす!!

特に自宅で毎日飲んでいる爽○美茶は、冷蔵庫でキンキンに冷やしたものをいつもゴクツと一気に飲んでます(笑)

(体冷やすとは分かっているんだけど、毎度これが止められない・  
・( ^ | ^ ; ) )

コナン

「ところで……。なんかこの週末に哀しい話があったんだって？」

KID

はい。

実は私が5年も飼っていたカメが、日曜日にベランダから落ちて死んでしまったんです。

家の中で放し飼いにしていたんですけど、まさか網戸を自分の力で開けるとは気付かずに……。

発見したのは日曜のお昼頃で、たまたま私が自宅に帰ろうとしている時に、割れた甲羅から血を流して蹲っているのを見つけました。この時は普通に生きていたんですけど、動物病院で治療をしてもらった翌朝に病院で……。

若干まだ何処となくポツカリと穴が空いているような感じの私ですが、時期も時期で。  
状況も状況で……。

今はもう一匹のカメや、ベランダを出歩いている猫の為にも、ベランダのあのカメが落ちた隙間を埋めています。  
(虫かごとか……、プランターとかで……)

と、何やら文もちゃんと纏まらずへんな感じになってしまいました  
が(苦笑)  
以上、おしまい！

それでは☆彡



### 31. Key

容疑者6人の事情聴集も終わり、目暮警部達は先程の事件現場の方へと戻っていった。

そこには、ややご立腹な様子の6人が、静かに目暮警部達を睨み付けている。

その視線に少しドキリとしながらも、目暮警部は冷静に事情聴集の結果を伝えた。

「先程は事情聴集にご協力いただき、ありがとうございました。ここで皆さんの事情聴集で分かったことですが……。あなた方6人は全員、多少の程度差はありますが、金田悟さんのことを恨んでいたようですな」

「そんな……。!! だから私言ったでしょ!? 『あの程度なかじゃ、人は殺さない』って!!」

「それは僕も同じです! 石神さんにどんな事情があったのかまでは分かりませんが……。僕は車に少々悪戯をされただけなんですよ?! たったそれだけで、僕が人を殺すって言うんですか!?!」

「ま、まあまあ……。だから『多少の程度差はある』って、警部殿もそうおっしゃってたじゃないすっか。何もそんなにムキにならなくても……」

「……………」

その小五郎のやや軽い感じのなだめ言葉に、二人はイマイチ納得がいかないような表情を浮かべる。

だがこれ以上怒鳴ってしまっても意味がないと理解したのか、それ以上は何も口を開こうとはしなかった。

一方、先程からやや暗号ゲームの問題文のことが気になっていた目

暮警部は、ふっとそれが書かれている用紙を取り出しつつ、そっぽを向いていた佐山に問い掛ける。

「ところで佐山さん。この暗号ゲームの暗号文や賞品等は、社員の人間は皆知っていたんですか？」

「えっ？ い、いいえ……。知っていたのは私と、秘書の原根君だけです。他の人達には一切……。内容も内容なので」

「暗号文は皆、社長の引き出しの中に入れてありました。その引き出しも、普段は鍵が掛かっているので、開けるのは不可能かと……」

「じゃあ……。その鍵はいつも何処に？」

「いつもは、事務室の鍵掛け盤のところに……。その事務室も、営業時間を過ぎた頃には、閉めていますけど……」

原根が言うには、事務室は消灯時間である午後8時30分には完全に鍵も掛けられ、全ての電気も消されてしまうのだという。勿論外からの侵入等も、鍵が閉まっている状況では不可能だ。

「じゃあその鍵を、事務室が開いている時間帯に盗み出す……。なんてことは？」

「さあ……。ただ事務室から盗み出すとすれば、事務室にいる人間が行うしか……」

「!!」

そう口にした原根が、さり気なく柳川に視線を向ける。

すると柳川は、やや慌てつつもいきなり原根の前の方へと移動し、目暮警部達の顔を代わる代わるに見渡しながら、身の潔白を主張し始めた。

「あ……。っ、いや！ 刑事さん！！ 俺はやってねえからなっ！  
？ 勝手に事務室から、鍵が盗まれたこともなかったし……」

「そういえばあんた……。あそここの事務室管理者の一人だったなあ……。ってことは、盗み出して鍵をまた元の場所に戻すってことも……」

「だから違うって……。っ!!」

ふっとその時、たまたま柳川の視界に、こちらをジーツと疑うかのような視線を向けている佐山の姿が飛び込んできた。

まるで『コイツが犯人だったのか』と言いたげなその表情に、思わず柳川も口を開く。

「なんだよ……。おい……。おい!! おい!! おいっ!!  
なんなんだよ! その目は!! 証拠もねえのに、俺を疑うのか?  
! ああ!? 俺が殺したって言うのか!?」  
「いやっ……。私は別に、そんなつもりは……。!」

そう否定してみても、柳川の態度は変わらない。  
結局そのまま、柳川は佐山の襟元に掴み掛かっていってしまった。

「嘘吐くな!!」

「嘘なんかじゃない! 本当だ……。!」

「違うだろ? 本当は自分達の自作自演で、俺を犯人扱いにする計画だったんだろっ!」

「そ……。そんな……。!」

「止めてください! 柳川さん!!」

「そうやって毎回毎回コソコソとやりやがって……。! いい加減に……。!!」

と、柳川の握り拳が佐山に命中し掛けた、その時だ。

バキッ!!

「うっっ・・・!!」

「「「「!!」」」」」

ふっといきなり聞こえてきた鈍い音と呻き声に視線を向けてみれば、そこには自分の頭よりも上に足を上げている原根と、その原根から一直線上にやや離れたところで倒れている、柳川の姿があった。しかもよくよく見てみれば、柳川の口元からは少々血が出ている。

実は柳川が佐山に殴り掛かろうとした瞬間、あの秘書の原根が、驚くべき速さで柳川を蹴り飛ばしたのだ。その蹴りの威力は、明らかに蘭の回し蹴りと同じレベルである。

「原根さん・・・、すごい・・・」

思わず蘭の口からそんな声が漏れる中、原根は相変わらず無表情な表情を浮かべて、倒れたままの柳川に対し、口を開いた。

「申し訳ありませんが、今は私の社長です。余計な手出しは伏せておいてください」

（なるほど・・・。ただの秘書というだけではなく、佐山社長のボディガードでもあったわけね・・・）

今更ながら『恐ろしい女性秘書さんだよ』と思いつつ、コナンはジト目の苦笑いを浮かべた。

### 31. Key (後書き)

どーも☆

お祭りに行くと、必ずあんず飴（あんず無しの（笑））とチョコバナナを食べる

KIDでーす！！

実は私、バナナは果物の中ではかなりの苦手食材なのですが、何故かチョコバナナになると食べられるんです。

（なんでだろ？ 触感変わるせいかな？）

そしてあんず飴は、言うまでもなく水あめ好きだからです（笑）

よくある透明のとか、青いのとか、ミカンとかパイナップルとかが入っているものを中心によく食べます。

特に上野動物園の出口付近で売ってるやつはかなり水あめの量が多かったんですけど、今でも売られているんでしょうかねえ？

（最近行っていないからよく分からん・・・）

そしてそして！！

明日は高校生活最後の学園祭♪

（ウギャーッ！！（絶叫））

毎度お疲れになる行事ではございますが、とりあえず頑張っていきます！

気合入れて・・・。

コナン

「おい！ 最後の『・・・』はダメだろ?!」

K I D

だつてえゝ!!

今回2つもお店掛け持つてるから、今まで以上に疲れそうなんだも  
ん!!

(ヘトヘトのクタクタみたいな・・・)

快斗

「でもしょうがなくなね？」

K I D

しかも『まじっく快斗』をリアルタイムで見られないというこの現  
実！

快斗

「それはしょうがない!!」

コナン

「なんでだよ・・・(ーー)」

K I D

それでは☆彡

## 32. Evidence

午後8時41分 杯戸シティービル 3階 パーティー会場。

「申し訳ありませんが、今は私の社長です。余計な手出しは伏せておいてください。・・・社長、お怪我等は？」

「いや・・・大丈夫だ。すまないね、原根君」

「いいえ。社長を守るのも、私の役目ですから・・・」

そう口にして乱れた服を直す原根に、小五郎は恐る恐る声を掛ける。

「はっ・・・、原根さん・・・？ 格闘家だったんすっか？」

「ええ、まあ・・・。少し前に『カポエラ』という格闘技を・・・」

「そ、それより！ 柳川さん、大丈夫ですか？！」

ふっと倒れたままの柳川に慌てて駆け寄る目暮警部と高木刑事だったが、二人掛かりで立ち上がらせたと同時に、右口元を赤くした柳川に『ギロリ』と睨み付けられてしまった。

そして終いには、柳川はその傷口の血を舌で舐め取りながら、刑事二人に対し・・・。

「大丈夫なわけねえだろッ！！」

「ま、まあ・・・」

「そうですよねえ・・・」

（ハハハ・・・。そりゃそうだ・・・）

『流石にあれば痛いに決まってるだろう』と思いつつ、コナンはふつと隣りに立っていた蘭の方を見つめ、再び苦笑した。

（そーいやあこっちにも、蹴られたらかなり痛い人間が・・・）  
「ねえ、コナン君」

「えっ!? な、何? 蘭姉ちゃん・・・」

「コナン君は『カポエラ』って知ってる? 私、よく分からないんだけど・・・」

「えっ? あっ、うん」

『なんだ。このことか』と、コナンは自分の苦笑いが見られていないことにホッとしながら、カポエラの大まかな内容を説明し始めた。

「『カポエラ』って言うのは、南の方の格闘技で、基本的に足を中心に使うんだ。蘭姉ちゃんの回し蹴りみたいに、足を上の方まで持ち上げて回転したり、そのまま突き飛ばすやり方もあるんだよ」

「ふーん。つまり・・・」

といいながら、蘭はいきなり右足を自分の後ろにある壁の方へ。

『ヤバい!!』と思ったコナンが止めようとするも、時既に遅し。

バキッ!!

(ゲッ!!)

「こういうこと? コナン君」

半分右足が壁にめり込んだ状態ですまし顔のまま尋ねてくる蘭に、コナンは一気に顔を青くした。

一応言うてはおくが、今の蘭は別に怒ってなどいない。

ただ単に『カポエラ』と『空手』の技の違いを知ろうと、足で思わず蹴ってしまっただけのことだ。

それで壁に穴を空けてしまったことは『ちょっとした事故』ということ・・・。

「どう? こんな感じ?」



「あ、いや……。も、もうちよつと……。足は垂直な感じ……」

「えっ？ 今のよりも垂直って、それじゃあ……」

「コラーッ！！ 蘭っ！！ 何やってんだ！ お前！！」

「何って、カポエラがどんなのかなあゝって……。基本的に足なんでしょう？」

「そういう問題じゃねえだろーっ！！ どうすんだ？！ この穴！！」

「えっ……。？ ！！ ヤダッ！！ 軽くやったつもりなのに！！」

（（何処がぁーっ？！））

とにかくにも、またしても修理代が掛かりそうだと涙を零す小五郎を尻目に、蘭は原根の方に視線を戻す。

「でも……。原根さん、スゴイ威力ですね」

「あれは完全な手抜きです。本気でやったりなどしたら、それこそ骨が砕けてしまいますよ。もっとも、もうあまり本気でやったりすることはありませんが……。何なら試してみます？ 毛利さん」

「いいえ……。私は結構……」

「もう。お父さんも試せばいいのに……」

「んな、お前みたいに防げるわけねえだろ？！」

「だってお父さん。柔道の腕あるんでしょ？」

「それとこれとはまた違うだろ！？」

と、何やら妙な親子の言い争いを横目で見つつ、コナンは原根に少々疑いの目を向ける。

（……。妙だな……。彼女の咄嗟の体勢や力加減……。それにあの素早いスピード……。どう考えても『久々に』っていう風には見えなかったけど……）

「と、とりあえず……。その社長室の引き出しの鍵は一回、ちゃんと調べておいた方がよさそうだな」

「そうですね……。もしかしたら、犯人の指紋が出てくるかもしれないせんし……」

「高木君。すぐに、鍵を鑑識に回してくれ」

「あつ、はい！」

（まずいなあ……。これは他殺に違いねえが、それを立証付けられそうな証拠がねえ……。このまま鍵の方から何にも出てこなかったら、おそらく高木刑事と目暮警部は捜査を打ち切る。もう少し『他殺である』という証拠を見つけねえと……。）

そう思ったコナンが第一に向かった場所は、ようやくめり込んでいた壁から引っぱり上げられた車の近辺。

一応鑑識人達は数名ほど調査を行ってはいたが、何せコナンが小さいのと鑑識が捜査に集中していたということもあり、車の方には容易に近付けた。

車の近くにやって来るや否や、コナンは車の周りを薄いハンカチで包んだ手で触りながら見回る。

するとそのコナンの手が、車の後輪辺りである違和感に気が付いた。

（あれ……。？　なんかここだけ異様に冷たいな……。）

気のせいかと思いい直に触れてみるが、やはりその後輪の一か所だけが異様に冷たい。

しかもその冷たい箇所のタイヤのゴムをよくよく見てみると、どうも少し歪んでいるようだ。

さらによく調べてみると、冷たいのは後輪の左右のタイヤのみで、前輪は何処もそんなに冷たくはなっていなかった。

（どういうことだ……。？　パーティー会場内は、気温が高めに設定されてるんだから、こんなに冷たいはずがねえのに……。）  
次にコナンが気になったのは、先程もチラリと話題に出てきた、ロ

ールスロイスのエンブレムの付け根に掘られた溝。

実は既にコナンの中では、これは今回の事件に何らかの関わりがあるものであると決めつけていた。

そしてもしそれがそうだとすれば、これは今回の事件の真犯人が付けたものに違いないということも・・・。

（ただ問題は……。一体どういう目的でこれを付けたのか……。だな。今のところ……。考えられそうなのはこの暗号ゲームの問題文くらいだけど……）

そんなことを呟きながら、軽い気持ちで問題文を開くコナン。

だがここで、コナンはあるとんでもない事実気が付いた。

それは、暗号文に登場する人物の名前と、同じく暗号文に記されている数字。

（……………！！こっ……！これは……っ！！

そうか！犯人はこのもう一つの答えを利用したんだ！！）

「ん？　こら、ボウズ」

「えっ？」

ふっと頭上から聞こえてきたその声に視線を向けてみれば、そこにはいつもコナンの調査に協力してくれるあの鑑識課のトメがいた。どうやら、これから後輪の方の調査を行うつもりだったらしい。

「何か見つかったかい？」

「あっ、いや……。！　そうだ、トメさん。トメさんにちょっと、調べてほしいことがあるんだ。おじさんからのお願いなんだけど……」

「えっ？　……毛利さんから？　なんだい？　その調べてほしいことって」

「あのね」

勿論、小五郎からは何にもその手のことは頼まれていない。いやむしろ、小五郎の場合は自分一人で頼み、子供にやらせることは決してないに決まっている。

そんなことをちよつとばかり想像しながら、コナンはトメに即急に調べてほしいことを説明。

さらにその後は、車を登場させる際に使用したポップアップ台の方へと移動し、その周りをもう一度だけよく調べてみる。

するとやはり、あの後輪のあったであろう箇所が、何故かやや広い範囲で冷たくなっていた。

まるで、ここに氷でも置かれていたかのように・・・。

（この冷え方・・・！なるほど・・・。そういうことか！そうか、分かったぞ！！今回の事件のトリックも！そして、誰が犯人なのかという、決定的な証拠もな！！！）

ようやく事件のトリックを全て解き明かしたコナンの手の下で、一部冷え切っていたカーペットは、徐々に元の温度へと戻っていった。

## 32. Evidence (後書き)

どーも☆

ブドウは基本種無しを選ぶ

KIDでーす!!

結構面倒臭がり屋です・・・。

種があるとなちよつとイラつとします(笑)

しかし私の母はマスカット好き♪

でもってマスカットは、基本種アリ(ハァー・・・(溜息))

ここで妙に母娘すれ違うわけです・・・、はい・・・。

さて、先週の土日は人生最後の高校学園祭だったわけなのですが・・・。

やはり後片付けが一番疲れます・・・。

結構色々なところからモノ引っ張ってきたりすると、戻すのが面倒で余計に疲れます(＋０＋)(クヘー・・・)

コナン

「おい！ 何回後書きで『面倒』出す気だよ!!」

KID

んなこと言われても・・・(指と指をツンツン(笑))

それにこっちはサークルの関係で、生きたペットども連れていったから、余計に・・・。

快斗

「ああ……。もしかしてあのトカゲとかも？」

K I D

そうそう♪

カイトなんだかんで一番人気だったよ♪

（まあ基本的に、ご飯食べて寝てただけなんだけどね。お客さんはそれでも満足だったみたい）

コナン

「『飯食って寝るだけ』って、それってこっちの快斗と同」

快斗

「似てない!!」

K I D

それでは☆彡

### 33. M o t i v e

午後8時52分 杯戸シティービル 3階 パーティー会場。

(・・・・・・・・・・)

一人事件を引き起こした車の傍から離れたコナンは、再び顎に手を当てながら考え込む。

気になる部分での個人的な搜索はほぼ終了し、ようやく犯人の正体とトリックを解くことが出来たコナンだったが、実はまだイマイチよく分からないことがあったのだ。

それは、事件であれば必ずあるべきはずのもの……。

(でもどうしてあの人、金田さんを殺害したりなんかしたんだろう・……。さっきの話じゃあ、そんな殺すほどの動機には思えなかったけど……)

そう。

殺人事件を起こすほどの割には、動機の内容がかなり弱いのである。勿論、極稀に面白さゆえに殺人を起こし、動機が一切として場合などもあるのだが、今回の犯行は動機がないとは到底言えないパターンだ。

(ってことは……。あの人はまだ本当の動機を隠して)

「コラ!!」

「うわっ……!」

いきなり頭上から聞こえてきた蘭の怒鳴り声に、コナンは思わずその場で大きく飛び退く。

さらにゆっくりと顔を上に上げてみれば、そこにはまるで頭に角を

生やしたかのような鬼顔の蘭が、両脇に手を当てながらコナンを睨み付けていた。

「もう！ 勝手にあっちに行ったり、こっちに行ったり……。急になくなったたりしないの！！」

「ご、ごめんなさい……」

「全く、目を離すとすぐこれなんだから……。あつ、高木刑事……」

「へっ……。？」

ふっとそれを聞いて後ろを振り返ってみれば、そこにはやや分厚めな書類を脇に抱えた高木刑事の姿があった。

どうやら、あの事務室にある鍵の調査が終わったらしい。

コナンはさり気なく高木刑事の方に手を振りながら、声を掛けた。

「高木刑事ー！」

「ん？ やあ、コナン君。蘭さん」

「どうだったんですか？ さっきの鍵……」

「ああ、それが……。佐山社長と原根さん以外の指紋は検出されただけど、この中の人達の指紋は検出されなかったから、多分事務室の他の人の指紋だろうね」

「そう……」

「また……。振り出しですね……」

「うーん……。あつ、あと。ちょっと不思議だったのが、例の脅迫状のことなんだけど」

「「えっ？」」

と、高木刑事がコナン達に疑問点について話していた頃、その奥の方にいた目暮警部達は、徐々に怒りを募らせる柳川達の対応に困り果てていた。



いつまで経っても事件なのか事故なのか。

犯人がいるのかいないのか。

そしていつまで、自分達をここに留めさせておくつもりなのか。

そんな鬱憤が募りに募り上げられ、容疑者達の問題はもはや我慢の限界だった。

「警部さん！ 一体いつまでこんな捜査を続ける気なんですか！？」

「そもそもこれが『殺人』だと決まってもいないのに、私達を犯人扱いして……！！」

「そんなに僕らが疑わしいのなら、その証拠を見せてくださいよ！！」

「余計な捜査は、無駄な行為に他ならないのでは！？」

「まあ……、まあ……。皆さん落ち着いて……」

『これはどうしたものか』と汗を掻きながら、目暮警部はふっとコナン達と話している高木刑事の方に視線を向けた。

一方の高木刑事は、未だにコナン達にその疑問点を説明している。

「なあ？ おかしいだろ？ 佐山社長も原根さんも、そんなことは

一言も言っていないかったのに……」

「確かに……、変ですね」

「うーん……」

「あつ、ねえ。その手に持ってる書類みたいなのは？」

「えっ？ ああ、これかい？ これは例の金田さんが起こした殺傷事件をまとめた資料だよ。ちよつとこの厚さには驚いたけど……」

「えっ！？ こんなに沢山も……？！」

「おーい！ 高木！！ 早く検査の結果を見せんか！！」

「ああ……、はい！！ ちよつと呼ばれちゃったから、僕はこれで……」

そう言ってコナン達の傍から離れようとした高木刑事に、コナンは慌てて声を掛けた。

「高木刑事!!」

「・・・ん？ な、なんだい？ コナン君」

（もし俺の推理通りなら・・・、きっとあの中に・・・）

別に確信があったわけではない・・・。

ただ何となく、あの資料の中にあるような気がしたのだ。

事件の真相が・・・。

犯人の本当の動機が・・・。

「その資料・・・、ちょっと見せてくれない？」

しばしその要望に悩んだ末、高木刑事は『すぐに返してね』とだけ口にして、コナンに資料を手渡した。

### 33. Motive (後書き)

どーも☆

生クリームよりもチョコクリームが大好きな  
KIDでーす!!

快斗

「おっ! 一緒じゃん♪」

コナン

(うわっ……。ここ二人揃って甘党かよ……)

KID

ハハハ……。 (苦笑)

まあこういうタイトルにしたのは、たまたまいつもの高校男子友人達とクレープの話になったことが理由なんですけどね。

『KID (↑作者名なんで (笑)) って、クレープってどんなの食べる?』と訊かれ、こちらは

『バナナ (元々嫌い) とアイス (好きだけど、クレープだと食べにくい) と生クリーム (何となくダメ) が入ってないやつ』

と答えたら、もろ『全滅じゃねえかよ!』とツッコまれてしまったんです……。

( (ーー) ええ……。 )

でも普段私が好き好んで食べているのは  
チョコ生クリーム・イチゴ・カスタード  
が入っているクレープなんですよ？

（っというか、結構色んなところにあるタイプのやつなんですけど・  
・・）

しかーし！！

友人の話では『チョコのクリームは少ないよ？』とのこと・・・。  
まあ、そこまでクレープ求めているような人間じゃないんで、別にど  
うでもよかったんですがね（爆）

ちなみにその男子友人の一人は、その時途轍もなくチョコパフェが  
食べたかったらしく『売店でパフェ売らないのかなあ』と、ずっと  
ブツブツ呟いていました（笑）

ひょっとして最近、甘党男子って多くなった？（・・；）

コナン・快斗

「「さあ？」」

さて、来週はまだほんのちよつとだけ捜査を・・・。

コナン

「そして再来週は、いよいよ登場！ 居眠りの小五郎！！  
・・・・・悪いー・・・。微妙に間違えた・・・」

快斗・KID

「「コラーッ！！」（怒）」

K  
I  
D

それでは☆  
△

### 34. Sufferer

コナンに資料を手渡した後、高木刑事は目暮警部の方へと小走りで行った。

「すみません……。ちょっと遅れて」

「一体コソコソと何をしとったんだね？」

「いや、そのお……。コナン君に頼まれて、ちょっと資料の方を……」

「ああ……。そう……」

「ああっ！？ ……ったく！ コナンのヤツ、また勝手なことを……！！！」

そう小五郎がコナンの方に怒鳴り掛かろうとしたのを止めながら、目暮警部は小五郎の現在の様子について尋ねる。

無論、内容は眠くなってきていないかどうかである。

「ところで毛利くん……。まだ眠くなったりはせんのかね？ そろそろ、時間的には良さそうな頃だとは思うのだが……」

「はっ？ 『眠く』ですか……。？ って言っても、目暮警部。時間はまだ9時過ぎくらいですよ？ まだまだ私らが寝る時刻じゃないじゃないですか」

「そ、そうか……。じゃあ、逆に犯人が分かったりせんのかね？」

「はい？ ……いいえ、まだ……。チンプンカンプンです……」

一方その頃、少し離れたところにいたコナンと蘭の二人は、高木刑事から受け取った資料の内容を読み漁っていた。

その資料に書かれていたトラブルは、もはや有名となってしまった交通事故や悪戯の他に、飲酒運転、暴行、泥酔した上に暴れたなどなど……。

その数は実に30件をゆうに超えるほどだった。

しかしコナン達が一番に驚いたのは、これだけの問題を起こしているにも関わらず、金田が一度も刑務所へ入ったことがなかったことである。

『そんなはずは……』と思いもう一度読み返してはみたのだが、警察に一時連行され、取り調べ室で3日間ほど過ごしたという記述は稀にあったものの『刑務所』という記載は何処にも書かれていなかった。

「どうして刑務所に入らなかったんだろう……。こんなに色々起こしてるのに……」

「たぶん……。賠償金とか、慰謝料とか、罰金とか、そういうのを全部毎回払っちゃってるからだよ。だから刑務所へ入らなかったんだ」

『読んでてかなり呆れるけどな』と胸中でそう呟きつつ、コナンはまた無意識にパラパラと資料ページをめくってみる。

ふつとその時、何気なくその資料を1ページ1ページ眺めていた蘭の目に、ある文章がピタリと止まった。

「あっ、ちょっと待って！ コナン君！！」

「えっ？」

「……………うそ……。見て、コナン君！ 金田さんの交通事故で、女性が一人亡くなってるんだって！」

「えっ！？」

「ほら！」

そうやって蘭があるページを開いてみると、確かにそこには『金田悟氏所有のベント（紺色車種）にはねられ、女性が一人死亡』と書かれている。

さらにその文字の下には、そのはねられた女性の顔写真と一緒に、前のガラスが粉々に割れ、ボンネット全体が血まみれ状態のベントの写真が2枚、上と横から撮ったものが貼られていた。

「亡くなった女性は、杯戸町に住む水河桜さん（27歳）で、死亡したのは1993年の10月27日の、午後11時13分頃。金田氏が一人で車を走らせていたところ、女性が道路へ歩き出しそのまま衝突。女性は病院に担ぎ込まれたが、間もなく出血ショックにより死亡。事故当時は目撃者がいなく、金田悟氏の証言から、女性が信号無視をして飛び出したものと警察は断定・・・」

「ってことは、これは単なる『交通事故』で処理されてるってこと？」

「みたい・・・でもこれ・・・本当に合ってるのかな？ だってあの金田さんが証言しただけなんでしょ？ それにこの人が亡くなった日付・・・、丁度1年前よ？」

「うん・・・。偶然にしては出来過ぎてると思う・・・。それにこの人の名前も・・・」

コナンはふっと脅迫状に書かれていたあの名前を思い起こした。

この事故の被害者の名前は『水河桜』・・・。

そしてあの脅迫状に書かれていた犯人の名前は『紫電の桜』・・・。これも偶然のようには思えない。

（もしかして・・・これが犯人の動機なのか？）

「？・・・どうしたの？ コナン君」

「えっ？ あっ、ううん・・・。なんでも・・・。そうだ。これ、



高木刑事に返してくるよ」

「そ、そうね。お願い、コナン君」  
「うん」

そう返事を返すと、コナンはすぐさま高木刑事に資料を返しに向かった。

資料を高木刑事に手渡すと、高木刑事は眉を少しだけ上の方に動かしながら『あれ？　もういいのかい？』と聞き返す。  
どうやら、思いの外早めに資料を返しにやってきたことが気になったようだ。

「うん、もういいや。資料見せてくれてありがとう！」

「ああ、いいよ。別に・・・」

「じゃあね」

「うん」

そう言って高木刑事に手を振ると、コナンは去り際にさり気なく容疑者6人の方に視線を向け、胸中で呟いた。

（これで全部分かったぞ！　真犯人の正体も、トリックの方法も・・・。そして・・・、金田さんを殺害した動機もな！！）

#### 34. Sufferer (後書き)

どーも☆

本日、大学の不合格が決定した  
KIDでーす・・・

ズーン・・・・・・・・（―――；）

って、そこまでじゃないんですけどね（苦笑）

コナン・快斗

「「初っ端から重すぎるわっ！！」（怒）「」

コナン

「しかもなんだ！！ この『不合格ゼーんねーん！』みたいな始まり方は！！！」

KID

いや、別に・・・。

残念ってわけじゃ・・・。

実のこと言うときゃあー。

本当は専門学校の方が、こっちの将来の職的にはピッタだったんだよねえ。

（爬虫類専門だったしいー（爆）。尊敬してる先生が特別教師やつてる学校だったしいー（笑））

快斗

「だったら入りゃあよかったじゃん」

K I D

でも専門は2年で社会にポーンだし・・・。

親の方も『大学！ 大学！』って、結構言ってたし・・・。

（まあ、最後の方は『あの専門が一番ピッタリではあったけどね』なんて、ボヤいてたけど・・・（^| ^;））

そんなこんなで内心『これでよかったのかも』なんて思ってるんだけどね。

（そのせいなのか何なのか、あんまし普段と機嫌だとか、気分とか変わんないし（オイオイ・・・））

そういうやあ、快斗とコナンは大学とかどうすんの？

快斗

「俺はその時々だろうけどおー・・・。一応マジックが出来そうな大学にでも（そもそもあんなのかなあ？（爆））」

K I D

コナンは？

コナン

「・・・・・・・・・・俺、今『進学』よりも『進級』が怖い・・・」

快斗・K I D

「「論外だよっ！！」」

K  
I  
D

それでは☆  
△

## 35. Look

（さてと……。今回はどう行こうか……。）

ようやくいつもの推理を披露する条件が揃ったところで、コナンは右手を顎の下に当てながら『うゝん』と小五郎の方を見つめる。

一方の小五郎は、怒り狂う容疑者達を宥めるのにもう必死だ。

しかもその中に見事に紛れ込んでいる真犯人は、どうやらトリックの証拠を隠滅したいのか、この場からどうにかして立ち去ろうとしているらしい。

そんな周りの様子を無言で見つめること、約1分。

「やっぱこうするしかねえか……」

コナンはジト目になりながらそう呟くと、素早くパーティー会場に置かれていたテーブルの下に隠れ、例の時計型麻醉銃のターゲットを上げる。

隠れているテーブルから小五郎までの距離は、軽く3メートル強ほどあったが、もう撃ち慣れてしまっているコナンからしてみたら、この距離は造作もない。

（おっちゃん……。悪いな）

胸中でそう呟いたのと、コナンが麻醉銃のボタンを押したのは同時だった。

パシユッ！

「はひっ」

「「えっ……？」」

「ん？ ……も、毛利君？」

（よし！）

コナンの撃った麻醉銃は見事小五郎の首元に命中。

その瞬間、小五郎は『ひやあゝ』などと言った妙な声を上げた後、あの車が最初乗せられていたポップアップ台の上に座り込んだ。

「ど、どうしたんだね？ 毛利君……」

「毛利さん？」

ふっといきなり座り込んだまま動かない小五郎に、目暮警部と高木刑事は心配そうに声を掛ける。

だがこの時、この2人は小五郎の正面の方だけを見ていて、後ろの方には一切目を向けていない。

コナンはそれを確認すると、素早くテーブルの下から飛び出し、小五郎の後ろ襟に小型スピーカーを取り付けた。

後はまた適当に、何処かに身を潜めて隠れるだけ……。

スピーカーを取り付け終わると、コナンは小五郎の座っている場所から2メートルほど左側にある柱の後ろに隠れ、蝶ネクタイ型変声機のダイヤルを小五郎の声にセットする。

そして自分の声が小五郎のものになったのを確認した後、コナンは変声機に声を発した。

「いいえ、ご心配なく……。むしろ『良かった方』かもしれない。やっと今回の殺人事件の真相を、解き明かすことが出来たんですから……」

「おおっ!! 毛利君!! やつとこの事件が解けたのかね?!」  
「ええ、勿論……。今回の殺人事件の犯人も、そのトリックの方法も……。謎は全て解けました」  
「「「「「!?!?」」」」」

コナンが小五郎の声でキツパリとそう口にする、容疑者でもある6人の顔に衝撃が走る。

そんな衝撃の中、まず最初に小五郎に対して口を開いたのは、一番初めに犯人ではないかと疑われていた柳川だった。

「おいおい……。『犯人が分かった』とか『殺人事件』とか言ってるけど……。これって単なる『事故死』なんじゃなかったのかよ?!」

「ええ。これは決して単なる事故なんかじゃありません……。金田さんは事故死ではなく、事故に見せ掛けられて殺害されたんですよ。……この中にいる一人の人間の手によってね!」

「「「ええっ?!」」」

「「「なんだって!?!」」」

「「事故に見せ掛けられて……。殺された?」」

コナン  
小五郎の口から発せられた衝撃発言に、皆はただただ口を開きながら驚愕する。

と、その時だ。

ギロツ!!

(っ!!! ……えっ?)

ふっと突然背後に感じた視線に、コナンは『ゾクッ』と震えた。  
その視線は、まるでこちらの様子を静かに観察しているような・・・

全てを見透かすかのように見張っているかのような、そんな視線・・。

しかし慌てて柱から顔を覗かせては見るものの、皆の視線の先にいるのは小五郎のみ。

逆に言ってしまうえば、誰もコナンの方を見ている人間はいないのだ。

(・・・・・俺の気のせいか・・・？ それとも・・・)

「それで？ 一体誰なんですか！？」

「誰が真犯人なんだね！？ 毛利君！！」

「えっ・・・？ ああ、いえ・・・、その前に・・・。私が導き出した結論を、これから順々に説明します。それで全てが明らかになりますから・・・」

やや事件解決を急ぐ目暮警部と高木刑事にそう答えると、コナンは先ほどの視線を気にしながら、推理を続けた。

まさかそんな自分の姿を、隠れて見つめている人間がいるとも知らずに・・・。



### 35. Look (後書き)

どーも☆KIDです!!

学校での社会のレポート面談で、すっかり投稿が遅くなりましたー  
!! (苦笑)

今日はMCはこのくらいで・・・。

(次回、トリック説明パート1に入ります!)

それでは☆シ

## 36. Scheme

午後9時22分 杯戸シティービル 3階 パーティー会場。

「では早速推理を始めようかと思いますが、その前に……。目暮警部」

「ん？ なんだね？」

「今回のこの事件ですが、これは全て、パーティーの冒頭で出された暗号ゲームが、非常に深くかわっています」

「何っ！？ この最初の余興ゲームがかね?!」

目暮警部はそう聞き返ししながら、ガサツと懷に仕舞っていた暗号ゲームの暗号文を取り出した。

これはついさっき、高木刑事から受け取ったものである。

「はい。蘭。この暗号ゲームの答えを、今この場で話してくれ」

「あ……。はい。えーっと……。コナン君が言ってたんですけど、この上に書かれている数字は、あるヒントになってる道具の名前を示してるんです」

「「？」 『道具』？」」

その意外な蘭の発言を聞き、目暮警部と高木刑事は声を合わせながら、蘭の方を見て言葉を聞き返す。

どうやらこの二人は、この数字が示しているものが『犯人』だと思いい込んでいたらしい。

そんな二人の聞き返しに少し戸惑いつつも、蘭は説明を続けた。

「あっ、はい……。これは、携帯電話のことを言ってるんです。携帯電話の文字入力を数字にして『携帯』って打つと、この『222211411』という数字になるんです」

「た、確かに・・・」

「なるほど・・・。『け』は『か行』から4番目だから『2』のボタンを4回。『い』は『あ行』の2番目だから『1』のボタンを2回。『た』は一番初めだから『4』のボタンを1回だけ・・・。最後の『い』は、最初の時の『い』と同じ数字」

「だから数字が同じ数で並んでいたのか・・・」

目暮警部は改めてそう呟きながら、もう一度暗号文の文章に目を向ける。

ということは必然的に、こちらと同じやり方なのだろうということ  
は気が付いた。

が、そこから浮かんでくる文字はというと、ご存じの通り『かはた  
さな』・・・。

しかし容疑者リストの中に、そのような名前の人物は設定上いない。

「んん？　・・・　妙だなあ」

「は？　何がですか？」

「いや・・・。てっきり他の数字も同じように解くのかと思ってお  
つたんだが・・・」

「違うんですか？」

「・・・ああ・・・。出てきた文字が『かはたさな』っていう名前  
なんだよ。しかし・・・、この問題にはそんな容疑者は存在しない  
んだ」

「た、確かに・・・」

「ホント・・・。いないわ」

「おい！　これ設定間違えてんじゃないか？」

「まあ・・・。人の名前ではありそうな感じですけどねえ」

と、何やら暗号文を見ていた目暮警部達や容疑者達までもがそう口  
にしたので、コナンは蝶ネクタイの前で溜息を吐きながら、蘭に代

わり説明を続行した。

「・・・違いますよ。そこまでは合ってるんです」

「あっ・・・『合ってる』?」

「ええ。あとはその『かはたさな』という名前をどうするか・・・。  
答えは簡単です。その名前を容疑者リストの人間の名前と比較し、  
訓読みでそう読める人物を探せばいいんですよ」

「ん? 『訓読み』?」

「『訓読みで』って・・・。。。。あゝっ!!」

ふっと容疑者の名前を1から順に確認していた高木刑事は、3番目に書かれていたある名前のところで、一旦両目を一時停止させる。  
そのすぐ後に他の容疑者リストの名前も確認してみたのだが、該当するのは3番以外誰もいなかった。

「そうか!! つまりこのゲームの犯人は3番の」

「『渦傍<sup>うずそば</sup>瑳<sup>は</sup>那<sup>な</sup>』だよ」

「こ・・・、コナン君!」

「これで合ってたんでしょ? ねえ、佐山のおじさん」

ふっと柱から出てきたコナンが、笑顔で佐山に聞き返す。

ちなみに柱から出てきたのは『自分はちゃんとこの場にいる』という  
ことを蘭達に見せるため・・・。

こうでもしなければ、毎回毎回蘭に不信感を抱かせてしまうことになるのだ。

おまけに先程の妙な視線のことも考えれば、尚更の話である。

コナンが聞き返して尋ねてみると、佐山は数回戸惑い混じりに頷く。

「この暗号ゲームの正解は、この二人が言った内容で合ってますが・

・・」

「しかし……。その問題の答えと、金田氏殺害には一体どういう接点があるというんだね？　まさかこの問題の答えを、変に間違えたとも言うのか？　毛利君！」

（ヤベッ……。！　急いで柱に……。！。！）

と、また先程と同じように柱に隠れようとしたコナンだったが、状況悪く高木刑事が柱の近くで小五郎を見ていたので、コナンは少し離れたところにあったテーブルの下へと隠れた。

一応小五郎の襟元にはスピーカーを取り付けているので、そこまで近くなくても声は届くはずだ。

コナンはテーブルの下から周りの様子を伺いつつ、こう口にした。

「いいえ、目暮警部。金田氏はこの問題の答えを間違えて受け取ったではありません……。同じ車狙いの共犯者に、嘘の答えを吹き込まれたんです！」

### 37. Trap

「同じ車狙いの共犯者に、嘘の答えを吹き込まれたんです！」  
小五郎のその発言に、目暮警部は再び目を見開いた。

「何っ！？　じゃあ金田さんはその相手の手によって、事故に見せ掛けられて殺害されたということかね！？　毛利君！」

「はい、そういうことになります」

「ちよつ、ちよつと待ってください、毛利さん。『嘘の答え』って言っても、この暗号ゲームは一つの答えしか導き出せないはずですよねえ？　元々そういう風に作られたわけですし……。そんな暗号文から、一体どんな『嘘の答え』を？」

確かに高木刑事がそう言うように、この暗号ゲームの暗号文は基本、最終的な答えでもあった『携帯』『かはたさな』『渦傍瑳那』以外のものは出てこないように作られている。

そもそもこの暗号ゲームを行う際にいくつも答えが出てしまったら、それはそれで混乱の元となってしまう。

勿論引っ掛け程度で、条件の中にあった『もの』が導き出せない答えもいくつか紛れ込ませはしたが、完全に『容疑者』と『必要なもの』の両方が出てくる答えは混ぜてはいない。

最終的なチェックとしては、わざと混ぜ込ませたものの以外でも、答えが2通りになってしまうものは出さないようにした……。そのはずだった。

だが色々な方向性から考えてみた結果、コナンはこの暗号文の中に、全部で『2通り』の答えがあることに気付いてしまったのだ。

それも、片方はまさに事件に関わるような内容であったということ

にも・・・。

「今から説明するのは、あくまで私の予想でしかありませんが・・・。半分無理矢理的なやり方で、当て嵌まりそうな答えなら1つあります。まず、最初の『222211411』という数字。この数字の答えを、共犯者は別のものに例えた。例えば・・・、書かれている数字の重なっている数を、数字に置き換えたりとか・・・。」

「えっ・・・？ この数字を？ うーん・・・。あっ！！ 同じ・・・！ この『222211411』を、重なっている数字にしたら『4212』・・・。あの車のナンバーと同じよ！！」

「な、なんだって！？」

「えっ？ でもあの車のナンバーは『1966』のはずじゃあ・・・。」

「それは車の名前に入っているナンバーで、製造の際のナンバープレートに数字じゃないんです！ 現に、そこにハッキリと・・・。」

「どれどれ・・・。うーん・・・。」

その言葉を聞き急いで車のナンバーを確認してみれば、少々壁に突っ込んでしまった衝撃で変形してはいたものの、確かにナンバープレートには『4212』という番号が付けられていた。

「なるほど・・・。書かれている数字は基本的に無視して『重なっている数だけを導き出せ』という答えに変えたということかね？」

毛利君

「ええ・・・。まあ普通であれば『そんなわけあるか』と言いたくなりそうな予想ではありますが、この一つ目の答えに『車』というキーワードが入ってくれば、自然と『合っている』と思い込んでしまいます。・・・きつと金田さんも、同じ状況だったんでしょ。そしてここでキーワードの一つが『車』ということになれば、犯人

も車に関わっている人物だと思い込む。この場合の答えは、一番最後に書かれている『妃<sup>ひふすか</sup>步<sup>は</sup>賺<sup>や</sup> 刃夜』でしような」

「えっ？ どうして？」

「『ひふすかはや』を、携帯のアルファベット機能で打ってみろ。ローマ字じゃなく、仮名で打ってるつもりで」

「う、うん・・・」

とりあえず小五郎に言われるがまま、蘭はメールの機能から『文字』を選び、英語に設定する。

そして仮名の時と同じようにボタンを押しながら、文字を入力し始めた。

「えっ・・・。『ひ』は2番目だから『M・N・O』の『N』。『ふ』は3番目の『O』。『す』は3番目だから『D・E・F』の『F』。『か』は『A・B・C』の『A』。『は』は1番目の『M』。最後は『や』が1番だから『T・U・V』の『T』ね？ 全部合わせて・・・『NOFAMT』？ これでいいの？ お父さん」

「ああ、コマはな・・・。あとはその答えを、アナグラムとして並び替えれば、答えが完成する」

「あ・・・『アナグラム』？」

『アナグラム』とは、いくつかの導き出された文字や記号などの配列を並び替え、答えとなっている言葉やものなどを解読する、一種の暗号問題のこと。

コナン達からしてみれば、一番暗号やダイニング・メッセージなどで目にしていたものだ。

そして今回導き出されたアルファベットは『N』『O』『F』『A』『M』『T』の6文字。

それを並び替えて出てくる言葉は、たったの一つ・・・。



ファントム

「『FANTOM』・・・。そう言いたいのですか？ 毛利さん」

「「ファントム・・・？」」

「ちょ・・・、ちょっと待って！！ 『ファントム』って、まさか・・・っ！！」

「・・・！！ あの車かっ？！」

闇沼のその導き出した『答え』に、石神と柳川は同時に車の方に視線を向けた。

今回ゲームの賞品となっていた車の名前は『ロールスロイス ナイトファントム 1966』・・・。

そのアナグラムの『答え』通り、車にはその名前が入っていた。さらに驚くべきはそれだけではない。

「ついでの暗号文の上の欄に残っているもう一つの数字・・・。それも先程と同じように、アルファベットにしてみてください。今度はアナグラムなどにはせず、そのままの配列で・・・」

「同じようにやるとお・・・えっくと・・・。A・・・、N・・・、G・・・、E・・・、L・・・。『ANGEL』・・・。えっ・・・？ エ・・・『ANGEL』！？」

「『エンジェル』って・・・」

ふっと蘭が見つめた先にあったのは、ロールスロイスの先端部分。そこには金色に輝く翼の生えた女性の像が、まるでこの車と自分の存在を強調させるかのごとく光り輝いている。

そしてその像が表している人物は、紛れも無く天使や女神の図・・・。

「えっ・・・？ もしかしてあの『エンブレム』？」

「まさか・・・。金田はこれを『事件を解く道具だ』と言われて・・・」

・!!」

「ええ、そうです。この二つの内容を解き明かせれば、答えは『妃<sup>ふすか</sup>歩<sup>はや</sup>賺<sup>は</sup>刃<sup>は</sup>夜』となる。そこまで辻褄の合った答えを言われれば、誰しも『本当』だと思ってしまうからねえ……。しかもそれをより確信付けさせるために、犯人はエンブレムの下の留め具に、丸く円を描くような傷を付けている。これを見てしまえば、あたかもこのエンブレムが取り外しできるように見えてしまう」

「た、確かに……。あります！　まるい小さな溝のような傷が……。!!　エンブレムの下に！」

高木刑事はそう言いながら、薄らとエンブレムの留め具の下に付けられた丸い傷を指差した。

「それだけではありません……。トメさん、鑑識の結果を教えてください」

「えっ……。？　あつ、はい。ええ……。毛利さんから頼まれて調べていた、エンブレムの周りから検出された指紋ですが……。亡くなられた金田悟氏の指紋が、エンブレムの周りから大量に検出されました。この分からすると、おそらく両手で強く引っ張ったことにより付いたものかと……」

そう話すトメの鑑識記録には、死亡した金田悟の両手全ての指の指紋とその数が、これでもかというほど詳細に記されていた。

その結果、どうも金田悟はエンブレムを取ろうと、少なくとも3回ほど引っ張る位置を変えたいらしい。

そしてその行為が、今回の事件の全貌を表していた……。

### 38. Trick

「さて・・・、ここからは事件のトリックを説明するとしましょう」  
粗方犯人を追いつめる為の駒も揃い、いよいよ小五郎<sup>コナン</sup>は推理本番へと話を突入させた。

「まず始めに・・・。犯人は車止めの代わりとなるあるモノを、まだ会場に出す前の車のタイヤの下。それも前輪の部分にだけ挟んだ。おそらく蘭が見たタイヤ止めが挟まれていたのは、前輪ではなく後輪だったはずだ。そうだろ？ 蘭」

「えっ？ あっ、うん。前の方は全然煙で見えなかったけど、後ろの方はハッキリ見えたから・・・」

「で？ 一体何なんだね？！ その前輪に挟ませたあるモノ<sup>・・・</sup>というのは・・・！？」

目暮警部がそう小五郎に対して聞き返すと、コナンは蝶ネクタイ越しにある物体の名前を口にした。

「ドライアイスですよ」

「ド・・・、ドライアイス？！」

「はい。あらかじめ小さなタイヤ止めと同じ形、大きさに作っておいたドライアイスを、犯人はクーラーボックスのような物の中に入れて持ってきた。そしてそれを、会場に出す前の車のタイヤに挟み、元々挟まれていた前輪のタイヤ止め2個を、その場に不自然ではない程度の場所に転がせた」

「えっ？ でもそれじゃあ・・・、すぐに見つかってしまうんじゃない？」  
「いいえ。ドライアイスを気化したものと共に車が下からせり上がるのであれば、当然下の方は煙で何も見えやしない・・・。タイヤ止めがその辺に転がっていても、誰も気付きませんよ」

さらに煙の設定を最大数値にでも上げてしまえば、確実に小さなタイヤ止めは見えなくなる。

と同時に、代わりに挟めているドライアイスの煙とも同化し、すり替えられたタイヤ止め型ドライアイスの煙をカモフラージュさせることも出来る。

「そして最後に、小さな溝を彫刻刀のような物でエンブレムの留め具に入れば、それで準備はOK。ドライアイスや氷などと言った冷たいものは、水のないところでは触れているものに張り付く習性があります。それを利用したんでしよう」

「た、確かに……。それならドライアイス本来の白い煙も、同じ成分の煙幕と同化して、誰も何とも思わんだろうなあ……。それに、多少冷却効果でタイヤに変な跡は残るだろうが、車がぶつかった痕跡としての誤魔化しは効くし、ドライアイスは水にはならん……。かなり考えられた犯行というわけか……。」

「でも……。ドライアイスって、そんなに早く溶けるものでしょうか？」

確かに高木刑事がそう口にした通り、ドライアイスや氷も、早々早く溶解するようなものではない。

特にパーティー会場自体が暑過ぎればまだしも、この会場は差ほど熱くはないし、車の周りから気化したドライアイスの煙が出ているのであれば、ある程度は低温になってしまっていただろう。

おまけにいつゲームが始まって、どれくらいで金田がその車の近くにやって来るのかも、解ける時間帯などを正確に計算しなければ無理だ。

まさか金田がエンブレムを抜き取りにやってきた瞬間、ドライアイスを素手で剥がすなどということはできないし、むしろしっかりと密着してしまっている状態では剥がれるはずがない。

「まさか毛利さん……。『ドライアイスの上にカイロを乗つけた』  
とでも言うつもりですか？」

「確かにそれならすぐに溶けるだろうが、化学物質同士では何が起  
こるか分かりませんよ？」

「かと言って火を近付けたら、臭いと明るさですぐにバレてしま  
うし、お湯じゃあ濡れた後が残ってしまうし……。そんな都合のい  
いものって」

「あるんですよ。冷たいものの上に乗せるだけで、そのものを本来  
持っている熱で溶かしてしまう、皆が必ず持っているであろうもの  
でね」

「「「えっ?!」「」」」

小五郎<sup>コナン</sup>はやや自信有り気にそう口にすると、ふっとポケットの中か  
らそのあるモノを取り出し、小五郎の肩の近くから目暮警部達の方  
へと飛ばす。

その瞬間、目暮警部の足元へと落ちたそれは『チャリンツ……。』  
という甲高い音を上げ、コロコロとゆっくりと転がりながら、目暮  
警部の靴先でピタッと止まった。

それを恐る恐る拾い上げた目暮警部は、目を見開く。

「こっ……。これは……。!! 普通の10円玉じゃないかね？  
! 毛利君!」

「ええ、そうですよ。10円玉を始め、銅には微量の熱を持ち、氷  
などを早めに溶かす性質があるんです。それを利用して、犯人はド  
ライアイスの上に4、5枚ほど、10円玉を乗せた……。そして、  
金田氏も現場へ到着し、ドライアイスも丁度いい感じに溶け切った  
ところで、わざと落とした小銭を拾うのと同時に、誰にも見られぬ  
ようにその10円玉を回収した……。あとは金田氏が勝手にエン

ブレムを取ろうと留め具部分を引っ張り、自ら引き金を引くだけ・  
・」

「ちよっ・・・、ちよっと待てよ・・・」

「じゃあまさか、犯人は・・・！」

それを聞いた途端、容疑者でもある5人はある人物の方へ、ゆつくりと振り返る。

そこには身体を小刻みに震わせ、顔面蒼白で目を見開いている一人の男性・・・・・・・・。

その相手に、コナンは敗北を知らしめるかのように口を走らせた。

「ええ。それが出来る人間はたった一人しかない・・・。わざと車の傍で小銭を落とし拾っていた、加藤光さん！　あなた以外に考えられないんですよ！！」

### 38. Trick (後書き)

コナン・快斗

「どーも★再び司会を任せられたコナン＆快斗」

と

ゆりっぺ・おかもっち

「ゆりっぺ＆おかもっちですー!!」

コナン・快斗・ゆりっぺ・おかもっち

「「「(爆笑!!)」」「」」

快斗

「はい。んなわけで・・・『今回は4人で♪』という」

コナン

「あのお気楽作家さんは何やってんだ？」

快斗

「いや、それが・・・明日からほら。GARNET CROWのカウントダウンライブが、大阪でやんじゃん。その荷物詰めで忙しいから、まあ・・・俺達に『後書きラジオ頼む』っていう」

おかもっち

「勝手やなあゝ(・・・笑)」

ゆりっぺ

「前回の投稿の時ねえ。バイトから帰って即投稿だったから、後書

き書くのも忘れてたけど……。今回予告なしだもんね」

コナン・快斗

「「確かに」（ー）」」

コナン

「あっ……。ってか、由利さん達大丈夫なの？」

ゆりっぺ

「何が？」

コナン

「ほら。明日大阪でライブなんでしょ？　なのに関東に居ていいの？」

ゆりっぺ

「ん？　ダメだと思う」

ドテッ！！

快斗

「ちよっ……。おい！！（笑）」

ゆりっぺ・おかもっち

「「（爆笑）」」

コナン

「えっ?!　作家さん、お二人見に大阪行く用意してんの?!」（



笑） 当の本人達は関東にいて、しかも『ダメ』って……！！（笑）」

快斗

「しかもこの放送場所……。一応東京だけど田舎の方だからな？  
！（笑） 作家さん認めてねえけど、かなり田舎ですよ?! ！ここ  
！！（爆）」

おかもっち

「公園に田んぼがあるっていうね……。 （笑）」

快斗

「つい最近まで米収穫してたっていう情報がこっちに……。 （爆）」

コナン・ゆりっぺ

「（爆笑）」

快斗

「あ、あと……。 もう一つ情報で、何かライブのチケットが10  
番台だったらしい」

おかもっち

「おおおっ！」

ゆりっぺ

「すごい!!」

快斗

「まあ……。 あの作家さんのことなんで、数字一桁見間違えてる  
んだろうとは思い」

コナン

「んなわけねえだろ!! (笑) この間、思いっきり自慢げに見せ  
びらかされたじゃねえか (悔) 例のチケット・・・」

快斗

「まあね・・・。あつ、そういえば作家さんが、あのライブでのカ  
ウントダウンが終わった後に、ちょっと大きめの風船が天井? な  
んか上から落ちてくるらしいんだけど、アレを毎回毎回ゆりっぺが  
蹴り飛ばすから、それを顔面で受け止めたんだっていう・・・。  
なんかすごい難易度の高いものに挑戦しようとしているという・・・、  
情報が回ってきて・・・」

おかもっち

「ああ・・・。えっ? アレに!? あれ結構痛いですよ?!  
顔面に受ける・・・」

コナン

「やっぱ痛いんだ・・・」

ゆりっぺ

「あれは凄いよ・・・」

快斗

「えっ? 真面に喰らったらヤバイ感じ?」

ゆりっぺ

「うん、もう・・・。コナン君のサッカーボールみたいなの」

コナン・快斗・おかもっち

「「んなわけあるかぁッ!!」」」」(爆)

ゆりっぺ

「(笑)」

コナン

「そんな『俺ぐらいのボール』って・・・(汗) それ意識戻った  
時会場閉まってるぜ?!」(笑) いやむしろ、顔面の骨折れるか三  
途の川行くかどっちかだよ?!」(爆)」

ゆりっぺ

「(爆笑)」

快斗

「新年早々の大騒動だよ!! もう、下手したら外から『ピーポー  
ピーポー』言ってる何か来るぞ?!」

コナン

「赤と白の? 元旦に相応しく紅白の車が?」(爆笑)」

ゆりっぺ

「(爆)」

おかもっち

「どっちにしろ・・・、ライブどころじゃない・・・」(撃沈)」

コナン・快斗

「「(撃沈)」」

コナン

「はい。んなわけで、そろそろお開きにしてしまおう・・・、か？  
人数多いと時間も文字数も増えるしな（笑）」

快斗

「それにあんまり話し過ぎると、またあの作家さんに『放送事故』  
って言われるし・・・（本音）　じゃあ今回はこの辺りで♪　つい  
でに少し早えけど」

コナン・快斗・ゆりっぺ・おかもっち

「」「新年あけまして！　おめでとうございます！！」「」「」

コナン・快斗・おかもっち

「」「それでは☆彡」「」

ゆりっぺ

「? , l l b e b a c k ! ! !」

### 39. Offender

「加藤光さん！ あなた以外に考えられないんですよ！！」

小五郎コナンはそう口にしながら、蝶ネクタイ越しで加藤に推理を突きつける。

その瞬間、一瞬加藤はワケが分からなくなったかのように言葉を失っていたが、すぐに自分の置かれている状況を理解したのか、慌てて小五郎に反論し始めた。

「ちょ……、ちょっと待ってくださいよ！ 毛利さん！！ どうして僕が、金田さんのことを……？」

「『どうして』？ ……何故そんなことを訊くんです？ あなたは最初から、金田さんを殺害するつもりだったんでしょ？ あんな脅迫状まで届けていたんですから……」

「……ッ！！」

「脅迫状？ ……しかし毛利君。あれは確かあ……、佐山社長宛てに送られたもののはずじゃあ……」

「いいえ、警部殿。そこにそもその誤解があったんです……あの脅迫状は佐山社長宛てに送られたものじゃない……。あれは元々、金田さん宛てに送られたものなんですよ」

「何っ！？」

その小五郎の口から飛び出してきた意外な事実、目暮警部は思わず声を上げた。

だがこの推理がもし本当なのであれば、佐山社長がパーティー当日に殺害されなかったこと。

その代わりに金田が、何故か脅迫状の予告通りに殺害されてしまったこと。

そして、金田が死亡する直前などに見せていた不審な行動や、あえて犯人が金田とグルになったように見せ掛けて近付いたことなど、全ての疑問が一発で解決してしまうのである。

さらにその推測には、こんな裏付けも発見されていた。

「高木刑事。先程コナンから聞いたんですが、例の脅迫状に残されていた指紋は、一体誰の者だったんでしょうか？　もう一度、今度は皆さんに聞こえるように説明を・・・」

「ああ・・・、はい！　えっくと・・・。例の脅迫状から発見された指紋は、佐山社長と秘書の原根さんに、毛利さんのもの。それと・・・、被害者の金田悟さんのものも検出されました」

「そこがそもそもおかしい・・・」  
「えっ？」

『一体これの何処がおかしいのだろう』と言いたげに、高木刑事はふっと小首を傾げる。

だがどう考えても、この鑑識結果はおかしいのだ。

この脅迫状を受け取った佐山社長と、それをポストから取り出した原根の指紋が付いているのは、勿論当たり前のこと。

そして今日の朝、調査の為にやってきた小五郎も脅迫状を手にとったので、指紋は当然のようにべっとりと付いている。

だが問題はその指紋の持ち主ではなく、金田の指紋が付着していたことなのだ。

というのも・・・。

「原根さん。私は今朝あなた方の部屋で、例の脅迫状を拝見させていただきました。その際、脅迫状はあなた方の机の引き出しの中に仕舞われていたようですが・・・。アレは届いてからずっと、あそ

ここに仕舞っていたんですよねえ？」

「はい。絶えずあの引き出しの中に……。鍵も掛けていました」

「じゃあ、質問を変えます。それを誰かに見られたり、触れられたりということとは？」

「……。いいえ。鍵は私が預かっていましたし、私を通してからでなければ、たとえ悟様でもお通しは……。それに、悟様は一回もこちらの方には来られませんでしたし……」

「えっ……？」

「一回も？」

ナラバ……。コノ指紋ハ一体何処デ……？

「そう……。殺害された金田さんには、一回も脅迫状に触れられる機会なんてなかったんです……。にも関わらず、あの脅迫状には金田さんの指紋がしっかりと付着している。ということは、あの指紋は原根さんが脅迫状に触れる前。つまりまだポストに入っていた時に触れなければ、絶対に有り得ないこと……。だとすれば、あの脅迫状は別の人間が金田さん宛てに作ったか、金田さん自身が作成したという仮説のみが残りますが……。内容等から考えれば、おそらく実際は前者の方でしょう」

「しかしだなあ……。毛利君。何故金田さんは、義理の父親の佐山社長の方なんかに？」

その目暮警部の問い掛けに、コナンは少々迷いつつも、やや宙を仰ぎながら素直に思ったことをそのまま答えた。

「その真意に関しては、私もよく分かりません……」

「わ、分からんだと?!」

「ただもし可能性があるとすれば、金田さんはその手紙を単なる悪戯であると思ひ込み、面白半分で佐山社長のポストの方に放り込んだのでしよう。だからパーティー会場でも、本人は余裕綽綽だった・・。そればかりか、手紙の内容を『本物である』と信じ切っている佐山社長や原根さん達を見て、面白おかしく笑っていたのかもしれない・・。」

「た、確かにアイツならんなこと・・。」

「やらなくもないよ・・。ね？　そういう男だったし・・。」

あれやこれやと被害者を言うのはどうかと思ったが、前々から金田のことをよく知っている柳川や石神が言うのであれば、きっとそういう人物だったのだろう。

そんな会話を小耳に挟みながら、コナンも半分納得してしまった。

と、こうして推理が先へと進んでいくことに腹を立てたのか、とうとう先程まで黙りつ放しだった加藤が、突然小五郎の方に向かって怒鳴り声を発する。

「そっ・・・、そこまで言い切るのなら、さっさとその証拠を見せてみるよ！　ここにいる全員にだって、今の推理なら犯行は余裕でできた。『僕一人が容疑者』ってわけじゃない・・。確実に『僕が犯人だ』というのなら、早くその証拠を見せてみるよっ！！」

「証拠ならありますよ。あなたの今着ているその服と、ポケットの中にね！！」

「えっ・・・。」

「あなたはあのドライアイスを、分厚めのゴム手袋を嵌めながら置き、そしてそれをまだ手に嵌めたまま、車のエンブレムの付け根に溝を掘ったはず・・。その際、その時着ていた服や手袋に、エンブレムと同じ素材の金属の粉が付着したはずだ。そしてその作業の途中に、ゴム手袋はトイレに流せたとしても、他の物を上手く処分



する場所はない！」

小五郎がそうキツパリと言い切ると、加藤は自分の着ていた上着を脱ぎ、それを丸めて小五郎の方に突きつけた。

「じゃあ調べればいいじゃないですか！」

「・・・よろしいんですか？」

「え、ええ・・・。別にいいですよ・・・。それにそんなのっ、この服の何処を調べたって出てくるわけ」

「服を逆に着て作業を行ったから・・・。でしよう？」

「ッ・・・！！」

「おそらくこれは私の予想ですが・・・。ドライアイスを入れる為に使用したクーラーボックスは、トイレの容疑入れの中に。エンブレムの溝を掘るために使用した彫刻刀のような尖っているものは、会場の壁側に並べられている花の花瓶の中にでも入れたのでしょ。う。あなたはずっと暗号ゲーム中に会場の端の方にいたのですから、花瓶の中にその道具を仕舞うのは容易に出来たはず・・・。まあ、衣服の裏側に付着している金属の粉や、用具入れに何故か多めに置かれているクーラーボックスの指紋。それとトイレの廊下近辺の監視カメラの映像を調べれば、すぐに犯人は見つかるでしょうね・・・。」

もはやここまでハッキリと推理で予測してしまった小五郎に、加藤は完全に口を閉じたまま、ただただ目だけを左右に泳がす。

その姿からは、必死に『自分が犯人ではない』と決定付けられそうなアリバイや動機などを探していることが、それこそ他の人達から見てもハッキリと伝わってくるほど。

しかしもうこの時既に、加藤にこの推理を崩すことの出来る方法など、何一つとして残されてはいなかった。

「それでもまだシラを切るつもりですか？　．．．加藤さん！！」  
「．．．．．くそっ．．．！」

最後に全てを認めた加藤は、そのまま力無く項垂れた。  
たった一度だけ、小さな溜息を吐きながら．．．。

### 39. Offender (後書き)

どーも☆彡

犬派と猫派では猫派の  
KIDでーす!!

ちなみに選択肢に『へび』があれば『へび派』でーす♪(笑)  
さてさて。

『少々』どころか『だいぶ』遅れましたが・・・。

コナン・快斗・KID

「「「新年明けまして、おめでとうございます!!」」」

はい!

ってなわけで、明けました!!

ちなみに私の学校での新年の挨拶は、この『明けました!!』が主流です(笑)

(まあ・・・。明けた後だしね(^|^-;) )

ところで去年の最後の投稿日、放送事故とかなかったよね?

コナン

「一応・・・」

快斗

「ちょっと作家さんの自宅近辺の話で長くなった(笑)」

なんだそりゃ・・・（――；）  
まあ、一応『大丈夫だった』ということにしておこう・・・。

コナン

「ところでGARNETのライブ、どうだった？」

それがもう、超サイコー！！（→）

ゆりっぺのセンターよ？！

センターッ！！（笑）

私の立ってた場所！！

コナン

「んで風船は？ 顔面ヒットになった？」

その辺に関しては・・・。

今は言えない。

快斗

「・・・はい？」

だからそのライブの話は、同時進行の連載小説

・『180回目の朝明けに・・・』（作者 赤鴉）

の後書きに少しずつ書いてく予定だから、今はそんなに詳しくは言えない・・・。

（興味のある方は是非、覗いてみてください）

コナン

「ああ・・・、そういうこと」

快斗

「じゃあ……。今日はこの辺りにでもするか？」

そうだね……。

んじゃあ、また来週まで♪

コナン・快斗・KID

「「それでは☆彡」」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2380t/>

---

名探偵コナン 名探偵の最終章（エピローグ）

2012年1月13日19時58分発行